

アンタイトルド・ブック

sasagani

梅雨(つゆ)が明けたというのに空はまだ灰色で。

だらしく広がる雲がのろのろと漂っていた。

ふと、面白味のないこの時間が永遠に続くんじゃないかという思いに駆(か)られて頭がおかしくなりそうな気になった。

逃げるように視線を少し下ろしてみても灰色。数十年前、夢の新興住宅地として郊外(こうがい)の丘陵地帯を埋め尽くすように建てられた団地(ハコ)の群れはくすみ、ところどころに細かい罅(ひび)が入っているのが遠目から見てもよくわかった。あれは骸(むくろ)のなりかけだ。建物の骸というだけではなく夢の骸でもある。そしてそこに住む人間もまた、かつて夢を抱いた亡者たちなのだろう。

視線をさらに下げる。緑のフェンスと防火用に植えられた銀杏(いちょう)の幹を辿(たど)ると赤茶けたグラウンドが広がる。二年女子の体育。ハキハキとした体育教師の指示に何の不満も見せず、かと言ってやる気があるわけでもなく淡々とハードルを跳ぶその様子を見て、ぼくは絶望的な気持ちになった。

視線を大きく横滑りさせ、窓の外から教室の中に帰還する。黒板にかけられた世界地図。文系とは思えないほどがっちりとした社会科教師が現代の世界情勢を熱く語っている。湿度が本格的に高くなる前でよかった。これが中学最後の歴史の授業。来週からは公民(こうみん)一本になるそう。今の世界はああだこうだ。君たちがこれから生きる社会はああだこうだ。時間が余りそうなのだろう。社会科教師は授業の内容から少し外れてぼくらへのアドバイスを口にし始めた。目標を持ちなさい。君は君なんだから。二人といたった一人の尊い人間なんだから。はっきりとしっかりと目標を立ててそこに向かって努力しよう。一步一步成長しよう。

心の中でレスポンス&クエスチョン。わかりました。そうですか。じゃあぼくたちはこれからどう生きればいいのか。何をやれば生きていていいのか。課題を教えてください。段階をはっきり示してください。そうしてくれればぼくたちは言われるがままにそれをこなして乗り越えて前に進んで社会に出て行きますから。

板書と話の要点を手短にノートにまとめてぼくはまた窓の外を見た。さっきと変わらない色褪(あ)せた空。雲の形も対して変わっていない。

いつまでこんなことをしていればいいのか。そう思う反面でいつまでもこんなことを続けていられたらいいな。とも思う。

面白いことなんて何もない毎日だけれど暇や退屈というわけでもない。やることはいくらでもある。

勉強、行事、部活、委員会活動。はいはいやります。

地域活動、職業体験、漢検(かんけん)に英検(えいけん)に数検(すうけん)。よろこんで。

ケンカはいけない。いじめもいじりもいけない。

人としてしてはいけないこと。もちろんわかっています。

――で、あとは？

あとは何をすればいいのですか。

何と何と何を理解すればいいですか。

何ができるようになれば社会に受け入れてもらえますか。

この世界で立派に生きていくことができますか。

ぼくに価値があると思ってもらえますか。

使える人間だと思ってもらえますか。

世界にぼくの居場所がありますか。

世界(せかい)に……それだけの価値はありますか？

こんなことを考えているのは多分ぼくだけだろう。この教室で。この階で。この中学校で。もしかするとこの市(まち)でぼく一人だけかもしれない。

他のみんなはどんなことを考えて生きているのだろう。将来への不安はないのだろうか。うまくいかない現実(いざどお)に憤(いきどお)ったりはしないのだろうか。そんなことがないくらい大人に飼(か)い慣(な)らされてしまっているのか？

いや、そんなことはない。みんな悩(な)んでる。ぼくは知っている。

例えば睦月(むつき)熾朗(しろう)と藍宮(あいみや)陽介(ようすけ)は部活(ぶくわく)のことで揉(も)めている。

例えば桑折(こおり)凪波(ななみ)は根暗(ねくら)で人見知り(ひとみしり)な性格(せいかく)に気を重(おも)くしている。

例えば奈倉(なくら)凜子(りんこ)と穴生(あのを)沙輝(さき)はお互(たが)いを思うあまり気(き)まずくなっている。

問題(もんだい)がなさそうなのはトンビ(とび)みたいに気楽(きらく)な転校生(てんこうせい)の陣内(じんない)達彦(たつひこ)と才色(さいしき)ともに学年(がくねん)一(いち)の天原(あまはら)亜依(あい)くらいのものか。

他の同級生(どうきゅうせい)も大(お)なり小(こ)なり問題(もんだい)を抱(かか)えているだろう。

自分(じぶん)の中(なか)の世界(せかい)について。自分(じぶん)と外(そと)の世界(せかい)について。

突き詰めると自分(じぶん)と世界(せかい)の間(ま)の問題(もんだい)だ。

自分の価値(かち)は？ 世界(せかい)の価値(かち)は？

みんなそれを知(し)りたくて、つまらない日々(ひび)を投げ出(な)さずに送(く)っている。

――ひらり。

灰色(こがし)の空(そら)に何(なに)かが舞(ま)った。無風(むふう)なのに。桜(さくら)の花弁(はなびら)のよう(よう)に見(み)えたけど桜(さくら)の季節(きせつ)はとっくに終(お)わっている。見間違(みまご)いだと思(おも)おうとしたそのとき、もう一度、

ひらり。

今度は見逃(みど)さないように目(め)で追(お)う。捉(とら)えた途端(とたん)、それはぴたりと空(そら)中(ちゅう)で動(うご)きを止(と)めた。花

弁(はなびら)じゃない。楕円形(だえんけい)の堅(かた)い実のような――

ずきゅん！

堅果(けんか)は静止状態から弾丸のように放たれてぼくの眉間(みけん)に突き刺さった。のけぞる。視界が空と同じ灰色に染まる。

あ、死んだ？

ぼく死んだ？

――いや、死んでない。視界は一面灰色だけど自分の手も体もはっきりと見える。

いつの間にか、灰色の闇の中にいた。

同級生たちがいない。社会科教師もいない。教室そのものが消え失せてしまっていた。ぼくとぼくが座っている椅子、机や上に乗っている筆記用具類だけが浮かんでいる。

額に触れてみると、楕円形の硬い物体が縦にしっかりとハマっていた。それは花弁でも実でもない。石のような滑(なめ)らかな質感を持っていた。

何だこれは。

これって……………めちゃくちゃかっこよくないか？

(喜んでもらえて嬉しいよ)

唐突に、誰かが声をかけてくる。

「だ、誰だ？」

灰色の闇を見回す。

ぼく以外には誰もいない。

(いるさ。君のすぐ傍(そば)にね)

また声がした。やはり姿は見えない。

「な、何だよ、どうなってるんだ？」

(驚かないでくれたまえ。私は君に道を示してやるために来たのだ)

「ふ、普通驚くだろ！ 道って何だよ？」

(現実には希望を抱いていない君に。世界と己の価値を疑う君に、夢の道を。あらゆる願いが叶

う《■□■□■□■》に至(いた)る門への道筋を教えてやろうということだ)

そこで、ぼくはその声の主に気付く。

声は灰色の闇そのものから発せられていた。

「い、今何て言った？ どこに行く門だって？」

混乱して立ち上がろうとするぼくの目の前が歪(ゆが)む。

空間がぐにゃりと曲がり、そこから一冊の本が現れた。

「この本は……？」

(門を見出し、開くためには〈夢見(ゆめみ)る力〉が必要。君にはその資質がある。その名もなき書物は、それを引き出すための物――)

「〈夢見る力〉？」

依然としてはっきりとした姿を見せない誰かは見えない手で本を取り、机の上に置いた。

(ああ。これから君にそれを外に出すための――〈綴(つづ)る力〉と〈読む力〉を与えよう)

「この本を読めってこと？」

(――そうだ)

見えない誰かが邪悪な笑みを浮かべた気がしたけれどぼくの興味はすでにそこにはない。机上の本に惹(ひ)き付けられていた。

本を観察してみる。黒を基調とした豪華な装丁のハードカバーで、古い外国の日記のように革(かわ)のベルトと鍵穴が付いていた。黒い表紙には人のような形が浮き彫りになっている。両腕と両足は形になっているが頭は何本もの蔓(つる)が絡み合っている。まるで作りかけの藁(わら)人形のようなのだ。

錠前は秘密を守るためではなく何かを封印しているのだ。ぼくはそう直感した。

「読めってたって、これじゃ開かないじゃないか」

――開いてはいけない。

理解しつつ、ぼくはそう言ってしまった。言葉では表現できない恐ろしさ、そして奇妙な期待感が混ざり合い、全身から脂汗(あぶらあせ)が滲(にじ)み出た。

(鍵(かぎ)ならば、すでにその掌(てのひら)の内に)

何を言ってるんだと思いながら右手を開いてみるとそこに鍵があった。

これまた日記に負けず劣らず古い形の鍵。デザインはシンプルだけど家の鍵とは段違いに高級

な素材が使われているのがすぐにわかった。おそらくは純銀製(じゅんぎんせい)だ。

ぼくはごくりと唾(つば)を飲み下すと、おそろおそろそれを鍵穴に差し込む――そして回した。

かちり。

鍵を穴に差したままベルトを外して分厚い表紙を持ち上げてみた。綴(と)じられた紙を見てぼくは驚く。

「何だよこれ、白紙じゃないか」

日に焼けて変色した紙には何も書かれていなかった。白紙だ。何枚めくってみても、文字も絵も何も書かれていなかった。

ぼくは安心半分がっかり半分の心境で本を閉じ、声の主を睨(にら)みつけた。どこを見ていいのかわからないから藪睨(やぶにら)みだ。

(そう急くな、物語の【綴(つづ)り手】にして【読み手】よ。物語はこれから君が書き綴り、そしてそれを自ら読むのだ。まずはキャラクターの設定を固めるとしよう。物語のテーマはその次だ。さあ、選bitたまえ)

何を――と質問する前に選択肢が現れた。

「ぼくが書く？ キャラクター？ 選ぶって……これは、まさか？」

声を上げるのと同時に、額にはまった石がかっと熱を放つ。

机上の本が赤く光っているのがわかった。

よく見ると、できそこないの藁人形の顔の部分がもぞもぞと蠢(うごめ)き、三つの小さな裂け目が生じる。

中から楕円形の赤い玉が浮かぶ。三つの目、今のぼくと同じ――。

(これより始まる五つの世界の物語。【綴り手】にして【読み手】よ、さあ選べ。物語の登場人物たちを！)

促されるまま、ぼくは選択肢へと意識を向けた。

額にはまった石――第三の目が、時間と空間を引き裂いた。

インター（１）

渡り廊下の窓から黄昏を眺める睦月(むつき)熾朗(しろ)に藍宮(あいみや)陽介(ようすけ)が声をかけた。

「どうしたことだよ、熾朗」

怒気を押し殺した口調。いつも大らかで人望のある藍宮には珍しい様子だった。

「どーもこーもねえさ。決めたんだ。俺はサッカー部を辞(や)める」

顔を半分だけ振り返らせて睦月が答える。西日(にしび)が逆光(ぎゃっこう)になって表情がわからない。

「だから、どうして辞めるのかって聞いてるんだ」

「何言ってるんだよ藍宮。入部するときにちゃんと言ったはずだぜ。『俺にゃ今やりたいことがねー。だから取りあえずおまえの誘いを受けてサッカーをやる』ってな。んで、やりたいことができたから辞める。そんだけだ」

「そのやりたいことが陸上なのかよ」

「あーそうさ」

「ふざけるな！ 関東大会まであと二週間もないんだぞ？ こんな大事なときに何考えてんだよ！」

藍宮はサッカー部の部長。司令塔もこなしつつゴールにも絡(から)んでいくトップ下(した)。

睦月は小柄だが俊足(しゅんそく)のエースストライカー。先日の都大会では得点王に輝き、チームを初優勝に導いた。

ちょうど十一人のチーム。去年までの弱小校をそこまで強化したのは二人の連携(れんけい)が抜きん出ているためであり、また他のチームメイトがその連携を成立させるために努力を重ねてきたからだった。

関東で勝ち残れば全国大会に行ける。部員でなくても緊張と興奮を禁じ得ない状況。どうやら睦月はそこに水を差したらしい。

「あと少しなんだ。中学最後の夏なんだぞ？ その後じゃ駄目なのか？」

「駄目だ。陸上にだって全中はあるんだぜ。サッカーの試合に出たら疲れてまともに走れやしねえよ」

「……そんなに陸上がいいのか？」

「そうだな。一人でやるってのが俺の性格に合ってるみてーだよ」

「チームプレイが嫌なのか？」

「そうじゃねえって。十一人で力を合わせて相手に勝つのはすっげー気持ち良いよ。たまんねーくらいにな。でもよ、そうじゃねえんだ」

「何がだ？」

「俺が勝ちてえのは相手――別の誰かじゃねーんだよ」

「……………」

藍宮は言葉を失う。説得は無駄だと悟ったのだろう。しかしその顔はまだ強張(こわば)っている

。納得できていないのだ。いや、納得したくないのだろう。

それを察したのか、睦月が言う。

「俺なんかにこだわってねーでよ。とっとと頭(あたま)切り替えて新しいフォーメーションを考えた方がいいぜ。今のあいつらなら十分戦える。おまえなら力を引き出してやれる」

「.....人が、足りない」

「都大会優勝で入部希望が殺到(さっとう)してんだろ？ 期待できそうな二年がいるっつってたじゃねーか」

「.....それじゃあ駄目だ」

「三年がいいってか？ じゃあよ、あいつはどうだ。うちのクラスの陣内(じんない)。あいつ帰宅部の癖(くせ)に意外とフィジカル高いんだぜ。タッパもあるしー」

「駄目だ！ それじゃ駄目なんだよ！」

藍宮はわなわなと肩を震わせる。けれどそれ以上の言葉は発さず、睦月を強く睨(にら)むとその場から立ち去ってしまった。

「どうしてわかってくれないんだ。おまえじゃなきゃ駄目なのに」

そう呟く藍宮陽介の泣き出しそうな横顔は、きっと誰も見たことのないものだったろう。

「悪いな、藍宮」

ぼそりと言い、睦月熾朗は再び窓の外を見る。

夕陽はくすみつつあった。

〈世界(ロカ・ダアツ)〉はまず虚空(こくう)だった。

茫漠(ぼうばく)とした虚空の世界にいつしか滅びた異世界の残滓(ざんし)が漂ってくるようになった。それが上下の二極(にきょく)に分かれて二つの大きな器(うつわ)を形作った。上極(じょうきょく)の器は中に入った塵芥(ちりあくた)を目映(まばゆ)い光へと変えていった。下極(かきょく)の器に降り積もった塵が大地となった。塵の降りように偏(かたよ)りが生まれ、多様な地形が形成され始めた頃、虚空の果てより一粒の種(たね)が飛来した。

下極の器に落ちた種は広がりつつあった大地に根を張り巡らせ、やがて世界樹(せかいじゅ)となった。世界樹は幾千もの枝葉(えだは)に天の光を享(う)け、また枝と同じ数の根から地の霊力(れいりょく)を吸い上げていった。そうやって蓄(たくわ)えられた滋養は世界樹のみを育(はぐく)むのではなく、隔(へだ)てのない恵みとして辺りにも分け与えられ、世界樹を中心とする大森林が形成された。植物だけではない。続いて生まれた様々な獣たちもまた世界樹の庇護(ひご)の下(もと)で健(すこ)やかに育まれた。その森は餓(う)えも渇きもなく、生死の境界もない安寧(あんねい)の楽園となった。

これが〈世界(ロカ・ダアツ)〉の第一季(き)である。

世界樹が天と地の二極を繋(つな)ぐようになって幾星霜(いくせいそう)。永遠(とわ)に続くかと思われた楽園にも終わりの時が訪れる。楽園だけではない。それは世界そのものに訪れた一つの終焉(しゅうえん)だった。

変化は急激なものではなかった。けれど世界は長い時間をかけてゆっくりと、そして着実に滅びの道を進んでいった。

まず天の光が翳(かげ)りを見せた。世界で唯一の光源である天から放たれる光量が徐々に減り、まばらに途切れるようになった。光の勢いが弱まるにつれ、世界樹の蓄えていた力も衰(おとろ)えていった。それは即(すなわ)ち分け与えられる恵みの減衰(げんすい)を意味する。滋養が行き届かなくなり、まず森の外縁部の木々から枯死(こし)が始まった。滅びの円が中心に近付くにつれて森に暮らす獣たちの数も大きく減っていき、とうとう最後の十一頭が残されるばかりとなった。

一頭の〈狼(おおかみ)〉が、一本の樹を見つめている。常緑の葉は全て枯れ落ち、露(あら)わとなった樹表の大半は枝から広がる石化の病に冒(おか)されたその樹は、世界樹を除いた森林の最後の一本だった。樹が滅びゆく様を、〈狼〉は一言も発さずに見つめている。とうとう樹の全てが石化し、音もなく崩れ落ちて砂の山となった後も、狼は怒りや悲しみ、恐れといった感情を表に出すことなくただひたすら樹の立っていた場所に目を向け続けていた。

そこにもう一頭の獣が訪れ、〈狼〉の背へと語りかける。

「母なる世界樹がお呼びだ。残る獣は我が元に集(つど)え、と」

現れた獣は、雄々(おお)しいたてがみを持つ〈獅子(しし)〉だった。

「……ああ、わかった」

そう応じながらも、〈狼〉は樹が滅びた場所から目を離そうとしなかった。〈獅子〉は嘆息(たんそく)しつつ、気心の知れた〈狼〉が何を考えているかに思いを巡らせた。

「先に行っている。気が済んだら来い」

少なくとも、滅びを恐れているのではないことを察した〈獅子〉が踵(きびす)を返そうとすると、〈狼〉はぼつりと呟きをもらした。

「滅んだ者たちは、一体何処(どこ)へ向かうのだろう」

〈獅子〉が向き直る。〈狼〉は滅びし樹から目を移し、そびえる世界樹を見上げていた。世界のありとあらゆる生命を守り育む母なる存在の衰えは目に見えて明らかだった。賢明な〈狼〉も〈獅子〉も、自分たちが世界樹に呼ばれた理由に気付いていた。

「おれたちも、このように滅んでゆくのだろうか」

「馬鹿なことを口にするな。滅びはしない。おれもおまえも、他の者たちも」

〈獅子〉の言葉は気休めではなかった。母なる世界樹の滅びを止める手立ては一向に見つからないが、して諦(あきら)めはしない。残された全ての生命を守り通そうと誇り高き〈獅子〉は固く決意していた。

「生き残った者は、全ておれが守り抜く」

たてがみを力強く震わせる〈獅子〉を見て、〈狼〉はようやく気持ちを和(やわ)らげた。

「……そうだな。おまえなら、きっとそれができる」

最も信頼を寄せる友の言葉を聞き、〈獅子〉はさらなる力が体の底から沸(わ)き上がるの感じた。それを見た〈狼〉は、〈獅子〉を好(この)ましく思うと同時に、己はそのようにはなれないことを強く自覚するのだった。

二頭が世界樹の元に着いたとき、その梢(こずえ)の下にはすでに他の獣たちが集っていた。

大らかで力のある〈熊(くま)〉、大きな角を持つ〈山羊(やぎ)〉、狡知(こうち)に長(た)ける〈蛇〉、鼻の利(き)く〈鼠(ねずみ)〉、深い知識を蓄えた〈亀(かめ)〉、小さいが気性の荒い〈蜂(はち)〉、千里(せんり)先まで見通す〈鷹(たか)〉、音を自在に操る〈蝙蝠(こうもり)〉、素早く跳ね回る〈兎(うさぎ)〉、これに気高い〈獅子〉と物静かな〈狼〉を加えた十一頭が世界樹の森で生き残った獣たちだった。

「母なる世界樹が我らをお呼びになられたのはなぜだろう」

〈兎〉が疑問を口にすると、〈亀〉が甲羅から首を出して答えた。

「そんなこともわからんのか。ちょこまかと動き回るばかりでなく、ちいとは頭を使え」

「何だと。このろまじじい！」

この二頭の言い争いは常日頃(つねひごろ)のことで、仲間たちも慣れたものであった。しかし、このときばかりは〈亀〉も〈兎〉も言葉の端々(はしばし)に焦りと恐れが入り交じった不安な感情を滲み出させており、他の獣がおいそれと仲裁(ちゅうさい)に入れそうな様子ではなかった。

「まあまあ、二人とも」

〈蝙蝠〉が睨み合う二頭を宥(なだ)めようとしたが、八方に良い顔をしようとするこの獣の言葉には耳も貸さなかった。

「言い争っている場合ではないだろう」

いがみ合うのを見かね、〈山羊〉が口を開いた。〈獅子〉の次に統率力のある〈山羊〉が諭(さと)そうとしたそのとき、世界樹の幹から目には見えない糸が伸びて十一頭の心を一綴(つづ)りにした。

(一一揃いましたね)

柔らかな声が、糸を通して十一頭に伝わった。

「おお、母なる世界樹よ！」

〈熊〉が野太い声で吼(ほ)えた。天が衰え、滅びが始まって以来、世界樹が獣たちに語る機会は著(いちじる)しく少なくなっていた。

「おいたわしい……」

と、〈鼠〉が顔を覆って悲嘆に暮れた。森が最も栄(さか)えていたときには、このように糸などを用いなくとも世界樹の声を聞くことができたのである。

「母なる世界樹よ、もっとお声を聞かせてください」

短気で向こう見ずな〈蜂〉も、このときばかりはさすがに素直な気持ちを吐露(とろ)した。

(私のかわいい子どもたち一一)

世界樹の暖かな思いを受け止め、十一頭は喜びに涙をこぼした。

(いつまでもこうしていたい。今までと同じように、あなたたちと平穏に暮らしていきたい。けれど、その願いは叶いません。私に残された力は一生命(いのち)はあとわずかなのです)

「そんな……そんなことを仰(おっしゃ)らないでください」

〈鷹〉が鋭い眼差(まなざ)しから滂沱(ぼうだ)の涙を流し、羽根を大きく開いて懇願(こんがん)した。

「……よそう、〈鷹〉よ」

その横で〈獅子〉が首を振った。

「おまえの思いは痛いほどよくわかる。だが、御自身で仰られたとおり、母なる世界樹にはもう力がほとんど残っておらん。駄々をこねて困らせてはいかん」

〈獅子〉はまなじりを引き締め、世界樹を見上げた。

「母なる世界樹よ。あなたは我らに何かを言い残そうとしていらっしゃる。それが何なのかはおれにもわからぬが、こうして我らをお集めになられたのだ。それはきっと希望のあるお言葉なのでしょう」

〈獅子〉がそう促(うなが)すと、世界樹は頷(うなず)いたかのような間を置き、そして言葉を紡(つむ)いだ。

(私のかわいい子どもたちよ、新たな光を探しなさい)

それを聞き、獣たちの中からざわめきの声が上がった。

「新たな光……ですと？」

〈蛇〉が訝(いぶか)しげに舌を出し入れした。

（そうです。失われつつある天の光に替わる――次なる光を見つけ出し、そして、その光と共に新たな世界を創り上げるのです）

「つまり、その光であなた様をお救いしろ、と？」

そう訊ねる〈蛇〉の目は、どこか忌(い)まわしい企みめいたものを秘めていた。そのことに――今までこの森には存在しなかった邪悪(じゃあく)の萌芽(ほうが)に気付いたのは、聡明(そうめい)な〈獅子〉と、まだ一言も発さずにいた〈狼〉だけだった。

（いいえ、それは違います。今ここにいる私の生命はもうすぐ尽きます。理(ことわり)に則(の)って定められた命数を変える術はありません）

「お言葉を返すようですが、我らの生命はあなた様の庇護(ひご)があってこそそのもの。あなた様がおらずば、新たな光を探すことなどできませんぞ」

〈蛇〉は慇懃(いんぎん)を通り越して不遜(ふそん)とも聞こえる口調で問いかけた。しかしそれは正論で、獣たちは世界樹に殉(じゅん)じ、滅びを享受する覚悟を既にしていたのである。

（安心なさい。私に残された力を全て使ってあなたたちに二つの力を与えます。私の庇護がなくとも滅びに立ち向かうことのできる力を――）

「二つの力……」

「滅びに立ち向かう、ですって？」

獣たちが口々に声を上げる中、世界樹から再び暖かい思いが流れ出た。

（一つは同化(どうか)の力。それぞれを補(おぎな)い合う力――）

語りながら、世界樹は天の光と地の霊力を一つにまとめた。言ったとおりに残された力を振り絞(しぼ)っていることは明らかで、十一頭は息を呑み、無言でその様を見つめた。

（もう一つは異化(いか)の力。己自身を見つめ、高める力――）

世界樹はその形をほどき、集めた力ごと自らを七色(なないろ)の奔流(ほんりゅう)へと変じさせた。

（私のかわいい子たち。仲良く、力を合わせて進むのですよ――いく久しく健やかに――）

最期の言葉が伝わった。奔流は幾筋にも分かれて十一頭の中へと吸い込まれていった。

2

母なる世界樹がいまわの際に示した新たな光の在処(ありか)については〈亀(かめ)〉が知っていた。重く堅固(けんこ)な甲羅を生まれ持っていたがゆえに動き回る機会の少なかった〈亀〉は、森に住まっていた無数の獣たちの中で最も長い時を世界樹の傍(そば)で過ごし、最も長くその声に耳を傾(かたむ)けていたのだった。

「新たな光は七つの沙漠(さばく)を越えたところにある」

〈亀〉は健在だった頃の世界樹の預言(よげん)めいた言葉をなぞるように語った。十一頭の獣はそれに従い、〈獅子(しし)〉を先頭に立てて光を求めての旅路に就(つ)いたのである。

一つ目の沙漠(さばく)は枯れ果てた大森林の残骸(ざんがい)だった。即(すなわ)ち残された十一頭が生まれ育った場所であり、そこを越えること自体にさしたる苦痛はなかった。ただ、よく見知

った地が減びに褪色(たいしょく)した様は新たな希望を目指さんとする十一頭の心を挫(くじ)くには十分だった。

森の端(はし)に辿り着いた獣たちはそこから遙か彼方の地平を目にした。二つ目の沙漠にはぽつりぽつりと足跡が残されていたが、それはかつて世界樹の庇護による安寧をよしとせず森から出ていった数少ない獣たちが刻んだものだった。独立心に溢れる足取りであったことは容易に察することができたものの、しかしどの足跡も爪先(つまさき)が森の外へと向いたものばかりで森に帰還するものは一つとしてなかった。さりとしてそこを越えた先人がいるという事実だけで、十一頭は少なからざる心強さを感じたのである。

第三の沙漠こそが十一頭が初めて対峙した試練だった。砂が一時(いっとき)たりとも留(とど)まることなく流れ続けるその様は、まるで地面が感情を持ち、獣たちの行く手を阻んでいるかのようだった。羽根を持つ〈鷹(たか)〉や〈蝙蝠(こうもり)〉、〈蜂(はち)〉にとっては何の苦もなかったが、小柄な者や鈍重(どんじゅう)な者は足を取られ、進んでしばらくも経(た)たずに体力の大半を奪われた。中でも堅牢(けんろう)な甲羅を背負った〈亀〉の疲労は著しく、第三の沙漠の半(なか)ばに至る前に息が上がってしまった。今にも仰向(あおむ)けになって倒れそうな〈亀〉を〈獅子〉が拾い上げ、休むようにとその豪奢(ごうしゃ)なたてがみの内に招き入れた。

最初の脱落者は〈亀〉ではなかった。ようやく第三の沙漠の終わりが見え、気が緩(ゆる)んだ獣たちを巨大な流砂の渦(うず)が捕らえた。その渦の中心に吞まれたが最後、無明(むみょう)の淵(ふち)へと引きずり込まれて二度と戻って来られないだろうことを十一頭は直感した。まず幸いにも勢いの弱い渦の端にいた〈熊(くま)〉が逃れ、〈亀〉をたてがみに包んだ〈獅子〉が瞬発的に跳び退(の)いた。羽根ある三頭は上空から取り残された者確かめ、流されまいと抗(あらが)う〈兎(うさぎ)〉と〈鼠(ねずみ)〉を救い出した。〈狼(おおかみ)〉は〈蛇(へび)〉をくわえて渦の外に放り投げた。

不運な悲鳴を上げたのは〈山羊(やぎ)〉だった。突如出現した渦の中心近くにいた〈山羊〉は、すでに後ろ足の付け根までを吞まれ、必死に前足で砂を掻き、泡を吹きながらもがいていた。

「待っている！」

叫ぶなり、助かる場所にいたはずの〈狼〉が渦の流れに乗りつつ〈山羊〉の元へと駆けた。

「愚(おろ)かな……」

それを見て、〈狼〉によって救われた〈蛇〉が呟(つぶや)く。

「おれも行く！」

と吼え、回転を狭めながら勢いを増す渦に再び飛び込もうとする〈獅子〉を〈熊〉が力づくで抑えた。〈山羊〉を引き上げようとする〈狼〉の元へと羽根ある三頭が向かう。〈蜂〉は〈山羊〉の角の根元をくわえて離そうとしない〈狼〉の首筋に毒針を刺して昏倒させた。半身を飲み込まれた〈山羊〉は手遅れであったが、〈狼〉だけならば〈鷹〉と〈蝙蝠〉の力で何とか運ぶことができたのである。

「……同化(どうか)だ」

瞳(ひとみ)に諦(あきら)めの色を浮かべた〈山羊〉の呟きを聞いたのは、非力であるため〈狼〉の運搬に加わらなかった〈蜂〉だけだった。〈蜂〉は頭以外を吞み込まれた〈山羊〉の額に小さ

な顎(あご)で噛みついた。母なる世界樹に与えられた七色の奔流(ほんりゅう)が二頭を包み、一頭の獣へと変じさせていく。それは〈山羊〉の角を生やした〈蜂〉だった。

犠牲を払いながらも難を乗り越えた十頭は次なる沙漠(さばく)に足を踏み入れた。第四の沙漠は細かい塵芥(ちりあくた)が濛々(もうもう)と立ち込め、千里を見通す〈鷹〉ですら視界の自由が利かなかった。また、世界樹の庇護を受けていた頃には一度たりとも感じたことのなかった飢えや渇きが獣たちを苛(さいな)んだ。唯一〈山羊〉と同化した〈蜂〉のみが飢餓を感じていないという事実を知ると、獣たちはとうとうお互いを食らい合うことに決めた。

飢餓のない〈蜂〉、飢餓に耐えることを決断した気高き〈獅子〉と〈狼〉、心優しい〈熊〉を除いた六頭が額を突き合わせて誰が誰を食らうかという相談をした。その結果、〈鷹〉が〈亀〉を、〈蛇〉が〈蝙蝠〉を、〈兎〉が〈鼠〉と同化してそれぞれ甲羅や飛膜(ひまく)、嗅覚(きゅうかく)などを引き継ぐこととなった。

七頭となった獣たちは五つ目の沙漠に入った。道のりは格段に平易となったが、時折(ときおり)にわか雨のように数十もの拳ほどの岩石が降ってくる中を獣たちは進んだ。奥深くへと足を踏み入れるにつれて岩の雨が降る間隔は短くなり、とうとう途切れることがなくなった。飛礫(つぶて)も大きさをいや増し、果てには〈兎〉や〈蛇〉などならばたやすく押し潰すことができるほどの巨岩も落下してくるようになった。

「こ、これはたまらん！」

〈兎〉のその一言をきっかけに、獣たちは三度(みたび)の同化を試みることにした。

「ただ同化しても意味がない」

〈蛇〉がより効果的な同化を提案した。それは最も体の大きな〈熊〉が、〈亀〉の甲羅を持つ〈鷹〉を同化するというものだった。同化の力に言い表しようのない恐ろしさを覚えていた気高き〈獅子〉はそれを止めようとした。だが、当事者である〈鷹〉は自己犠牲こそ誇りと自負しており、進んで〈蛇〉の提案を受け入れてしまった。

〈鷹〉を食らった〈熊〉の背から堅固な表皮を持つ羽根が生えた。体格に比例した大きく堅い羽根は仲間を守りたいという〈熊〉の思いを体現したもので、その下に隠れた獣たちは世界樹の庇護を受けていた頃に似た安心感に包まれた。しかしそれも束(つか)の間のことで、第五の沙漠を越えたところで獣たちの結束はとうとう綻(ほころ)んでしまう。

きっかけを作ったのは〈蜂〉だった。第三の沙漠以来、〈蜂〉の内側で生来の短気と同化した〈山羊〉の調和を重んじる心とが激しく葛藤(かつとう)していた。〈蜂〉は母なる世界樹の面影(おもかげ)に救いを求めたが、そこで浮かんできたのは仲良くせよという最期の言葉だったため、〈蜂〉はついに心の平衡(へいこう)を失った。

「あっ……！」

〈兎〉が声を発するも時すでに遅く、〈蜂〉は狂おしく友の間をすり抜けると、尾の毒針を〈熊〉の脾腹(ひばら)に突き立てた。すさまじい唸り声を上げつつも〈熊〉が倒れなかったのは、〈蜂〉の毒への耐性を持っていたからである。しかしその毒は穏やかな気性を冒(おか)し、〈熊〉は〈蜂〉の胴を粗暴に掴むと一口に飲み下してしまった。

四頭分の力を得た〈熊〉だったが、心の平衡を取り戻すことはできなかった。〈熊〉は二対(に

つい)となった硬質の羽根を羽ばたかせ、鋭い角を残った獣たちに突き出した。〈蛇〉は飛翔し、〈兎〉は反射的に跳んで逃れた。〈獅子〉と〈狼〉は尖った角先を身に掠(かす)らせつつも〈熊〉の懐(ふところ)に飛び込んで首筋と腹とに噛みついた。同化はできなかった。同化を為(な)すにはされる側がそれを受諾(じゅだく)するか、もしくはする側がされる側を力によって屈服(くっぷく)させる必要があった。さすがの〈獅子〉と〈狼〉も平常心を失ったとはいえ四頭分の獣の力を持つ〈熊〉を圧倒することはできなかったのである。

しかし、二頭がかりで何とか〈熊〉の動きを止めることはできた。その隙を突き、〈蛇〉が〈熊〉の鼻先に毒牙を突き立てる。さしもの〈熊〉も〈蛇〉の毒には耐性がなかった。毒は見る間に鼻の傷口から全身に回り、〈熊〉は大きな音を立てながら仰向けに地に倒れた。

安心するのも間もなく、〈蛇〉と〈熊〉を中心に同化の奔流が発生する〈蛇〉が見たこともないほど忌まわしい姿へと変貌を遂げた。四肢のなかった〈蛇〉の胴から野太く毛だらけな腕が伸び、つるりとした頭部から角が生えた。

「はははははは！」

哄笑を上げながら、種類の異なる三対の翼を広げて第六の沙漠の彼方(かなた)へと飛び立ってしまう〈蛇〉の姿を、三頭はただ呆然と見送ることしかできなかった。

3

第六の沙漠(さばく)は、第一や第二の沙漠と大差のない平坦で単純なものだった。しかしそこに行く〈獅子(しし)〉と〈狼(おおかみ)〉、〈兎(うさぎ)〉の三頭の足取りはこれまでで最も重々しい。〈蛇〉が狂った〈熊〉を同化して遙か先へと飛び去ってしまったことが獣たちの気を沈み込ませ、泥濘(ぬかるみ)を掻き分けて進むかのような疲労を呼び起こしていたのである。

「〈蛇〉も心を毒に冒されてしまったのだろうか」

〈獅子〉は、未だに〈蛇〉が自分たちの仲間であると信じ込もうとしていた。

「何言ってるんだよ。あいつはぼくたちを裏切ったに決まってる。自分の毒にやられる間抜けがどこにいるってんだ」

〈兎〉は腹立たしげに反論した。〈兎〉は〈鼠(ねずみ)〉から引き継いだ鼻で、飛び去った〈蛇〉の残り香(が)に深く暗い邪悪さが含まれているのを嗅(か)ぎ取っていた。

「〈蛇〉の奴は結局自分のことしか考えてなかったんだ。あなただって気付いていただろう？ 母なる世界樹の最期のときだって、あいつは滅びを悲しむより先に自分も滅びやしないかと心配していたじゃないか！」

〈兎〉の剣幕(けんまく)に、〈獅子〉は口を噤(つぐ)むしかなかった。常に己よりも仲間に気を配っていた〈獅子〉は〈兎〉よりも早く〈蛇〉の利己性を感じ取っていながら何もできなかったのだった。

「〈蛇〉が飛び去ったのは、同化によって大きな力を得たためなのだろうか」

〈狼〉の呟きは、〈蛇〉が仲間であるか裏切ったかという問題にとんと無頓着(むとんじゃく)であるかのような響きを含んでいた。

「何だよ。まるであいつがぼくたちに情けをかけたような言い種(ぐさ)だね。あんたまであいつの肩を持つ気かよ！」

怒りが収まらない〈兎〉の言い様(ざま)を耳にし、〈獅子〉は自信をひどく失った。雄々しき姿とそれに見合う誇りを備える〈獅子〉は、己こそが世界樹の遺志を継ぎ、仲間たちを率い、新たな光へと導く者であると信じ込んでいた。しかしその力も沙漠の試練の前ではとても小さくか弱いものでしかなかった。滅びや別離もなくここまでやって来ることができたのも、世界樹に与えられた同化の力があったからこそである。

「そうではないぞ、〈兎〉よ」

〈狼〉は静かに頭を振る。

「じゃあ、何だってんだよ」

「……〈蛇〉に、新たな光を見つけ出せると思うか？」

〈狼〉が問いかけたのは、いきり立つ〈兎〉ではなく、心身ともに弱りきった〈獅子〉だった。

「どういうことだ？」

「〈兎〉が感じているように、〈蛇〉は邪悪な考えで行動していることに間違いはない。そんな者が新たな光——次なる世界への希望を見出すことができるのだろうか」

〈獅子〉が問い返すと、〈狼〉は静かな口調で答えた。

「なるほど！」

〈兎〉は一転して喜色を浮かべ、長い耳を盛んに動かした。

「母なる世界樹も、力を合わせて仲良くせよ、と仰っていた。あのお言葉は、もしかしたらぼくたち全員が揃っていなければ新たな光は見つけれないという意味だったのかも」

「そうだとすれば、おれたちを裏切った〈蛇〉は新たな光を見つけることができない……」

〈獅子〉は胸を痛めつつ、ようやく〈蛇〉の裏切りを認めた。

「だが、逆に言えば〈蛇〉と別れたおれたちにも新たな光は見えないということだな」

〈狼〉は極めて冷静に言う。

「じゃあ、まず〈蛇〉を見つけなきゃ」

〈兎〉は鼻を広げて興奮した。〈獅子〉も、薄れかけた勇気が再び湧いてくるのを実感した。

「……なあ、おまえたち。〈蛇〉を見つけて、それからどうするつもりだ？」

淡々とした〈狼〉の一言が、奮い立ちつつあった〈獅子〉の背筋を凍てつかせた。

「〈蛇〉と和解するか、それとも……」

〈狼〉の言葉は残酷なまでに無情だった。しかし、だからこそこれから起こり得ることを正確に言い当てていた。

「戦うに決まってる。やっつけてやろう！」

鼓舞(こぶ)するように〈兎〉が言うが、〈狼〉は元より〈獅子〉すらも安易にそれに賛同しようとはしなかった。

「おいおい、一体どうしちまったんだよ。森で一、二を争った強者たちが、揃いも揃って弱気の虫じゃないか」

「〈兎〉よ。おまえはおれたちが〈蛇〉に勝てると思えるか？ 七頭分の獣の力を持つあの〈蛇

」に」

そう言い返され、〈兎〉は口を嚙みかけたものの、わずかな間で何かを決心して赤い瞳を引き締めた。

「思うさ！　ぼくたちが力を合わせれば、きっと勝てるよ！」

〈獅子〉も〈狼〉も、〈兎〉が言わんとしていることがよく理解できた。

「おれたちも同化(どうか)する……か」

〈獅子〉に〈狼〉、そして〈鼠〉を食った〈兎〉が同化すれば四頭分の獣の力を持つことになる。数では劣るが、それを補って余りある勇猛さを備えた獣になるはずである。〈獅子〉は〈兎〉の提案を受け入れることを決めた。だが、それを言うより早く、〈狼〉が口を開いた。

「おれは断る。同化はごめんだ」

「何だって？」

〈兎〉だけでなく、〈獅子〉すらも〈狼〉を凝視した。

「自分勝手なことを言うなよ、〈狼〉」

〈兎〉は心底困り果てた顔をした。

「そうだな。しかし、勝手なのはおれだけではないぞ」

「どういうことだよ」

あくまで落ち着き払う〈狼〉に、〈兎〉はいよいよ憤りを覚えた。

「〈蛇〉がおれたちを裏切ったのも、おまえが同化しようと言うのも、勝手な行いだろう。おれはもちろん〈獅子〉だってそうだ」

「何、おれのどこが自分勝手だと言うのだ」

己の自尊心に爪を立てられたように思え、〈獅子〉は珍しく声を荒(あら)げた。

「気を悪くするな、〈獅子〉よ。おまえを貶(おとし)めるつもりはない。おれが言いたいのは、同化に頼らずとも力を得られるのではないか、ということだ」

「同化せずに、どうやって〈蛇〉に勝る力を？」

「母なる世界樹がおれたちに与えてくださった力は同化だけではないだろう」

同化にばかり気を取られていた〈獅子〉と〈兎〉の頭に、もう一つの力のことが浮かんだ。

「異化(いか)か……」

「そうだ。補(おぎな)い合う同化ではなく、自分自身を見つめ、高めるという異化の力。おれはそれに期待したい」

「だが、これまで異化の力を発揮した者などおらぬぞ」

「そもそも、それがおれたちの過ちだったのかもしれん。他者を飲み込み、力を得ることばかりに思いを囚(とら)われ過ぎていたのではないだろうか」

「同化を悪だと言うのか」

「そうは言っておらん。ただ、異化というものも同化と同じく用いる必要がある。おれはそう思えてならないのだ」

「あなたの言いたいことはわかったよ、〈狼〉。でも、ぼくの言い分もわかってくれ。異化で得られた力でも〈蛇〉に勝てなかったら、ぼくは同化されてもいいと思っている。あなたはどうか

だい？」

「……それでも、おれは同化したくはない。されたくもない」

「やっぱりあなたは勝手な奴だよ。根性なしだ」

〈兎〉は〈獅子〉を見やった。

「〈獅子〉よ。いざというときはあんたがぼくを食べてくれ」

〈兎〉の悲愴な言葉を、〈獅子〉は拒絶することができなかった。

4

第六の沙漠(さばく)の果てから次なる沙漠を眺望(ちょうぼう)した三頭は、平らで滑(なめ)らかな足場の中央に屹立(きつりつ)する構造物を見つけた。それは山のように巨大な砂岩から削り出した獣の彫像(ちょうぞう)だった。しかし三頭には頭と四肢を持ち、後ろ足に当たる二本で直立するそれが何の獣であるかの判別はつかなかった。頭部以外に体毛のない像の顔は、三頭に母なる世界樹のことを思い出させるような穏やかなものだった。

自由となった二本の前足のそれぞれに方形の石版を掴む彫像の足下に〈蛇(へび)〉が佇んでいた。

「来たか……」

振り向いた〈蛇〉の眼差(まなざ)しに、自分たちと同じく滅びし世界樹を悼(いた)む思いを浮かんでいるのをはっきりと見て取り、三頭は小さからぬ動揺の波に襲われながら像の元へと足を運んだ。

「へん、やっぱりおまえだけじゃあ新たな光は見つからなかったんだな。ざまあみろ」

動揺と怯懦(きょうだ)に長耳(ながみみ)を震わせながら〈兎(うさぎ)〉が言う。その強がりを聞き、〈蛇〉は冷ややかな光を蓄えた瞳を細め、不敵に鼻を鳴らした。

「そうだ。だからこうしてここで待っておったのだよ……おまえたちを食らってやるためにな！」

言うなり〈蛇〉は風切り音のような甲高い叫びを上げ、三対六枚の羽根を開いた。そして〈山羊(やぎ)〉の脚力で跳び上がると、低空を滑るようにして三頭へ襲いかかった。

その突進を〈獅子(しし)〉と〈兎〉は左右に避けた。〈狼(おおかみ)〉だけが真正面からそれに向かい、振り下ろされた〈熊(くま)〉の野太い腕を掻いくぐった。さらに〈山羊〉の角と〈蛇〉の毒牙を身軽に交わした〈狼〉は、〈蛇〉を跳び越して背中に回り込むと、そのまま〈蜂(はち)〉の一对の羽根に牙を立てて付け根から力任せにもぎ取った。〈亀(かめ)〉の甲羅の力を持つ〈蛇〉に痛手を加えられたのは、ここに至るまで〈狼〉が異化(いか)に集中し、己の力を高め続けてきたからである。

しかし、その程度で〈蛇〉が負けを認めるはずもなかった。〈蛇〉は自慢の尾の先端から〈蜂〉の毒針を生やし、後方の〈狼〉に向けて閃かせた。そのとき、不可思議なことに〈狼〉の毛並みが銀色の光を放った。〈狼〉の輪郭がおぼろに揺らめき、〈蛇〉の尾は空を掻いた。

「何だと……」

驚き慌てる〈蛇〉に〈兎〉が体ごとぶつかり、その体勢を崩した。さらに〈獅子〉が爪を振って〈熊〉の片腕を切り落とし、〈山羊〉の角の一本を噛み砕いた。〈蛇〉は空気をつんざくような叫び声を上げると、胴から〈山羊〉の逞(たくま)しい前足を生み出してまとわりつく〈兎〉と〈獅子〉を蹴り飛ばした。邪魔者を引き離すや、〈蛇〉は〈鷹(たか)〉と〈蝙蝠(こうもり)〉の羽根を羽ばたかせて飛翔した。下降と上昇を何度も繰り返し襲い来る〈蛇〉に、飛ぶことのできない三頭は抗(あらが)う術(すべ)を持たなかった。

「……こうなったら、〈獅子〉よ！」

〈兎〉は意を決すると、攻めあぐねる〈獅子〉へと駆け出した。

「うむ！」

その決意と勇気に応えるように〈獅子〉は顎(あご)を大きく開き、〈兎〉を一呑みにした。七色の奔流が生じ、〈獅子〉と〈兎〉は同化(どうか)した。豪奢(ごうしゃ)な〈獅子〉のたてがみを掻き分け、〈兎〉と〈鼠〉の頭が浮かび上がる。〈獅子〉は三つの頭で同時に咆哮(ほうこう)すると、異化の力で〈蛇〉を引きつけていた〈狼〉の助勢に加わった。

〈獅子〉はいや増した俊敏さで迫り、〈蛇〉の下降する機会を捉えて跳躍する。抵抗する間もなく鋭い爪の一薙(な)ぎに二対の翼を切断され、〈蛇〉は無様に地に落ちた。〈獅子〉は三つの頭の六つの目全てから血の涙を流しながらなおも反撃しようとする〈蛇〉の体をずたずたに引き裂き、ようやく動かなくなったところでその頭を食らった。

〈鷹〉や〈熊〉、そして〈蛇〉らも加え、合わせて十の頭を持つ獣となった〈獅子〉と、誰とも同化せず、ただひたすら異化に徹した〈狼〉が残ったところで、それまでの争いを見守るように佇んでいた彫像が震え、大地を鳴動させた。

(世界樹の裔(すえ)、新たな光求めし獣たちよ――)

〈獅子〉と〈狼〉が目を向けると、彫像が掴む二枚の石版がそれぞれ異なる光を発していた。

(目指す光は二つある。一つは生命の諸源(しょげん)であり、全てを偏(あまね)く照(て)らす無限の光――太陽(たいよう)である)

彫像の右手の石版から目映(まばゆ)いばかりの黄金(おうごん)の光が溢(あふ)れた。

(一つは滅びし者を導く、静謐(せいひつ)なる唯一の光――太陰(たいいん)である)

左手の石版は、冷たい白銀(はくぎん)の光を湛(たた)えていた。

(この二つは共存の叶(かな)わぬ光。獣たちよ、汝(なんじ)らはどちらの光を望むか)

彫像の問いに、〈獅子〉はすぐさま返答した。

「考えるまでもない。おれは黄金の太陽を選ぶ」

すると、右の石版から放たれた黄金の光が〈獅子〉に向けて収束した。金の光に包まれながら〈獅子〉は〈狼〉を振り返った。

「おまえも来い、〈狼〉よ」

しかし、〈狼〉は〈獅子〉の招きには応じなかった。

「〈獅子〉よ。済まぬが、おれはそちらを選ばん」

「何だと。ここまで来て道を違えと言うのか」

愕然(がくぜん)とする〈獅子〉に構わず、〈狼〉は静かに左の石版の前に立った。

「おれは太陰を目指す」

白銀の光を享(う)けた〈狼〉の姿形が変わっていく。前足の付け根が左右に開き、胸板と肩が形作られた。後ろ足は全身を支えられる強さを得た。変貌を終えた〈狼〉は、見知らぬ獣の彫像と同じように直立した姿をしていた。

(〈同化の多頭獅子(たとうじし)〉と〈異化の孤狼(ころう)〉よ、汝らは如何(いか)なる世界を望むか)

彫像の問いかけを聞き、〈狼〉が一步前に出た。

「共存できぬというのなら、太陽と太陰が交互に入れ替わる世界を」

生まれ育った森と母なる世界樹の滅ぶ様を見つめ、他者の同化を拒み続けた〈狼〉が望んだのは、滅びし者も安らぐことのできる世界だった。

「何を言う！」

〈獅子〉の十の頭全てが同時に異を唱えた。

「おまえが望む世界では、生命は永遠のものでなく、常に滅びと表裏(ひょうり)することになるのだぞ。それでもよいと言うのか！」

〈狼〉は〈獅子〉をしっかりと見据(みす)え、頷いた。

「確かにおまえの言う通りだ。おれたちも、これから誕生するであろう新たな生命たちも永遠(とわ)のものではなくなる。おれが望む新たな世界は誕生と滅びを繰り返す世界だ。だが、そうすることでこのような大きな滅びを避けることができるとおれは考えている。そうではありませぬか、見知らぬ獣を象(かたど)りし像よ」

(然(しか)り。それも一つの理(ことわり)である)

彫像は〈狼〉の言葉を肯定したが、〈獅子〉は納得しなかった。

「そのような世界を認められるか！ 新たな世界の光は太陽だけでよい。おれが太陽となり、生まれくる者たちを守り、育(はぐく)み続けるのだ。そう、母なる世界樹がなさっていたように！」

言葉通り、たてがみから黄金の太陽光を発しながら〈獅子〉は吼えた。

(それも是(ぜ)であろう)

彫像は巖(おごそ)かに言った。

「では、雌雄(しゆう)を決するしかないな」

直立する〈狼〉の白銀の太陰光は、量では太陽光に劣りながらも押し流されることなく輝いた。

〈獅子(しし)〉のたてがみから九つの獣の頭が伸びて〈狼(おおかみ)〉を襲った。〈熊(くま)〉や〈蛇(へび)〉は牙を剥(む)き、〈山羊(やぎ)〉は角の先を向け、〈鷹(たか)〉の嘴(くちばし)が閃(ひらめ)いた。それらをかまし続ける〈狼〉だったが、侮(あなど)っていた〈兎(うさぎ)〉や〈鼠(ねずみ)〉らの首に手足を絡(から)め取られてしまった。〈狼〉はすぐさま異化(いか)の力を手足の爪に注(そそ)ぎ込み、絡みつく四頭の獣の首を両断した。しかし〈獅子〉の頭が数を減らしたのはほ

んのわずかな間だけだった。〈獅子〉が咆哮(ほうこう)を轟(とどろ)かせるとともに黄金(おうごん)の光を放つと、断ち切られた首は元の通りに生え変わったのである。

(あくまでも相(あい)争うというのか、獣たちよ)

太陽(たいよう)の獣と太陰(たいいん)の獣が爪と牙を交(まじ)えるのを見つめながら、彫像は淡々とした口調で呟いた。

〈獅子〉は十の頭だけでなく三対六枚の翼を広げて〈狼〉に襲いかかった。

〈狼〉は二本の後ろ足で縦横無尽に駆け、ときにその身をおぼろとし、ときに手足の爪を尖(とが)らせながら〈獅子〉との攻防を繰り広げた。

黄金の光と白銀(はくぎん)の光がぶつかり、光彩(こうさい)が互いを弾き合う度(たび)、それぞれの光は少しずつくすんでいった。共存の許されぬ二つの光がお互いを削り合うことにより、世界を照らす光そのものが擦(す)り減っているのであった。

(愚かではあるが――それも一つの結実(けつじつ)か)

彫像はあくまで傍観者(ぼうかんしゃ)だった。元を辿(たど)ればその存在は世界樹(せかいじゅ)と表裏を成す巨岩だった。ただ、生命なき巨岩には生命を生み、育む力はなく、大地における無為の自然を用いて自らの形を削り出すことしかできなかったのである。

(光が莫(な)くとも世界は続く)

世界樹を光の寵児(ちょうじ)とするならば、闇の分身(ぶんしん)である彫像は、二つの光の衝突の影響を受けて風化し、崩落しつつあった。

(光が潰(つい)え、闇が訪(おとず)れる――)

彫像の最期の言葉は、獣たちの闘争のため光が行き届かなくなりつつあった大地に共鳴した。

光莫き大地の果て、世界の礎(いしずえ)となった器の縁(へり)から黒き水が滲(にじ)み出した。黒き水は光が弱まるにつれてその量と勢いを増し、彫像の残骸からこぼれた闇を呼び水として七つの沙漠(さばく)を平呑(たいらどん)していった。

大地の大半を黒い洪水が浸(ひた)しても〈獅子〉と〈狼〉は争う手を止めようとはしなかった。とうとう天も滅び、世界の全てに帳(とばり)が下り、光を放つのは己たちのみとなったところで、二頭はようやく力尽きた。

「気高き〈獅子〉よ」

「聡明なる〈狼〉よ」

精根(せいこん)尽き、暗黒の瀟寂(しじま)に飲まれてようやく二頭はお互いを許し、認め、寄り添うことができた。だが、残された光は世界の全てを照らすにはあまりにもか細く、今にも消え入ってしまいそうだった。

激しい後悔の念に包まれる二頭の前に、それまで世界に存在しなかった者が現れた。

「私の〈肉体(からだ)〉を知らないか」

二頭の弱々しい光が最後に照らしたのは、彫像と同じく二本の後ろ足で直立する獣だった。像ではなく明らかに生命を宿した姿であったが、その獣は輪郭のみで内側は淡く移(うつ)ろう黒で塗り潰されていた。

「おまえは誰だ？」

「私は〈影(かげ)〉……闇でありながら光より生じる者だ」

〈影〉は身を屈(かが)ませ、問いかけた〈獅子〉のたてがみに触れた。

「君は私と全く違う。君は私の〈肉体〉ではない。違うけれど、私にとって不可欠なもの――太陽(たいよう)だ」

〈影〉は次に〈狼〉の体をなでた。

「君は太陰(たいいん)。君は私にとっても近い姿形をしているね。けれども、やはり違う。君は私の〈肉体〉ではない」

ひどく残念そうな〈影〉の言葉を聞きながら、二頭の獣は長き沈黙――滅びを迎え入れた。

〈影〉は太陽光(こう)と太陰光の最後の一欠片(かけら)を掬(すく)い上げると、二頭の獣を黒き静寂の底に沈めた。

「獣たちよ、しばし眠れ。その体は次なる世界の礎に。その魂は来たるべき時のため、力を蓄えよ」

〈影〉は立ち上がり、かつて光を降らせた天を仰(あお)いだ。

「私は〈影〉。〈肉体〉を失い、さまよう者――我が〈肉体〉は何処に――」

残光とともに〈影〉の姿が掻き消えると、世界は完全に黒き水の闇で覆われたのである。

インター（２）

桑折(こおり)凧波(ななみ)は放課後の図書室でノートにペンを走らせている。ノートはキャンパスの分厚いもの。ボールペンは三菱(みつびし)ジェットストリームの0.7mm(ミリ)。最高の書き味。

傍(かたわ)らには何冊もの本が積み上げられている。ハードカバー。ノベルス。文庫。世界文学全集などというものもある。桑折は左側に積み上げた山から本を取ると隅から隅まで目を通しては右側の山に積んでいく。時折頁(ページ)をめくる手を止め、食い入るように凝視(ぎょうし)して文を書き写す。そんな作業をひたすら続けていた。

どのような文を写しているのかといえば、

【ぼくはきみの心に棘(とげ)を刺し入れたくなかった】 【おまえをまもるのはこの俺だ】 【私が『そうじゃない』ってことくらいとっくにわかっていた】 【俺は甘いが陛下(へいか)は青い】 【私は殺されることはあっても、負けることはない】 【天に躍り地に伏しても嘆(なげ)いても、誰一人おれの気持を分ってくれる者はない】 【どっちでもないよ。ぼくには関係ないから。本当に、ぼくたちには関係ないんだ。あんたたちの問題なんだ】 【私は確信したい。人間は恋と革命のためにうまれてきたのだ】 【私も.....行くわ.....深い所に.....】 【あたしはその掌(たなごころ)の上でいいように弄(もてあそ)んでもらえたらそれでよかった】 【だから私は、いつも夜を心待ちにしていた】 【君が、ぼくのことをまっすぐな人間だと感じたのは、君自身がまっすぐな人だからだ】

やや重い文章ばかりがずらっと並んでいる。全て一人称だった。

司書(ししょ)すらいな寂(さび)れた図書室で。たった一人で。黙々と。

桑折には友達と呼べる存在はおらず、同級生とまともに挨拶をすることもなかった。いつも俯(うつむ)きがちで、勉強はできないわけではないのだが授業で当てられたときには黙ってしまう。小柄な体をさらに小さく丸めて殻(から)に閉じこもってしまう。

だから桑折は人見知り、ひどいときは根暗(ねくら)女と呼ばれながら中学校生活を送っていた。

キーン、と音がする。金属バットの快音。桑折は手を止め、体を起こして窓から外を見る。校庭。野球部。サッカー部の練習がない日だからかのびのびしているように見えた。

「.....ああいうのって、何が楽しいのかな」

ぽつりと呟いた。小声だがはっきりと。

「部活か。誰かと一緒に何かをやるって.....うーん、考えただけで目眩(めまい)がするなあ」

桑折は苦笑した。教室や他の人間の目があるところでは決して見せない表情だった。

「へえ。桑折ってそんなこと考えてんだな」

左隣から声がして桑折はビクッと振り返る。それが男子だったのを見て「わー！」と声を発して席から立ち上がって窓まで後ずさりする。

「声でか。びっくりさせんなよー」

のんびりした口調で言うのは桑折も知ってる同級生の男子だ。

「じじ陣内(じんない)くん？ 何であたしに話しかけてるの？」

桑折は声を上擦(うわず)らせながら言う。

「何で話しかけるって、どうしてそんなこと聞くんだ？ 俺たち同級生じゃんか」

「そそそりゃそうだけどでも今まで一回も話したことなんてないのにいきなりどうしたのかな
と思って何か理由とかあるんでしょあーそーだあれでしょ何かの罰ゲームできたんでしょきっと
そうだそうに決まってるそうじゃなかったら男子があたしに話しかけてくるなんてそんなこと」

「ちょっと落ち着け。息継(いきつ)ぎをしなさいって。ほら深呼吸」

陣内が穏やかに言う。

桑折は言われた通りに深く息を吸って吐いた。

「.....ふう」

気持ちを鎮(しず)めた桑折は元の席に戻ろうとするが、隣の陣内との距離を目測して対面の席に移動してそちらに腰を下ろした。

対角線に座って緊張げな面持(おもも)ちの桑折を見て苦笑いをしながら陣内は口を開く。

「理由なんてないよ」

「え？」

「桑折に話しかけたことに理由なんてない。ま、強(し)いて言えばなぜだか知らんが今朝からずっ
と藍宮(あいみや)に追い回されててな。校内のあちこちを逃げ回っててここに来たってワケだ」

「藍宮くん.....どうして？」

「サッカー部に入ってくれないかってさ。ほら、睦月(むつき)がいきなり辞(や)めて陸上始めた
だろ？ その穴埋めらしいんだけど、何で俺なのかねえ」

陣内はぼやく。迷惑というより心底不思議がっている顔をしていた。

「んで、物音を立てずにここに入ったら桑折がいるのを見つけて。一心不乱に何かを書いてるから横から覗き込んでみたわけよ」

陣内は桑折のキャンパスノートを取って堂々と目を這(は)わせる。

「ちょっ！」

桑折はカエルのようにぴょんと跳(と)ぶ。ぱっとノートを奪い返したものの、びたん。顔からテーブルに落ちた。

「だ.....だいじゃぶか？」

「う、うん.....」

顔を上げた桑折の鼻の頭は真っ赤で、たらりと一筋の血が垂れてきた。

「わっ鼻血！」

陣内は慌てて制服のポケットをまさぐる。

「どこだ一、陣内ー！」

廊下から声が聞こえてきた。

「げ、藍宮。もう嗅(か)ぎつけやがった！ すまん桑折、俺は逃げる。取りあえずこれを使ってくれ」

未開封のポケットティッシュをぽいと投げて寄越(よこ)したと思うと陣内は脱兎(だっと)の如く

動き出す。図書室のドアから.....ではなく、何と開いてあった窓から飛び出した。

息が止まるほど驚く桑折の目に、窓から二メートルほど離れたところで真っ直ぐ伸びているプラタナスの樹(き)に陣内が飛びついたのが映る。

「そのノートの話、また今度聞かせてくれよなー」

そう言って、陣内はするすると幹(みき)を登っていく。下りるのではなく登っていった。

「一体何だったんだろ」

桑折が丸めたティッシュを鼻に詰めていると、

「陣内どこだ！ サッカーやろう！」

ばたばたばた。遠ざかる藍宮の声と足音。

「.....ほんとに、何だったんだろ」

桑折凧波はもう一度呟き――。

にへらと笑って、ノートをぎゅっと抱き締めた。

〈世界(ロカ・ダアツ)〉よりあらゆる光が失われてから悠久(ゆうきゅう)の時間が過ぎた。依然として世界には闇が充満して光差す機会は寸毫(すんごう)たりともなく、かつて大地だった平面は黒き水の底となった。これが世界の第二季(き)である。

時経(へ)る内に、黒き水には深淺(しんせん)に応じた闇の濃淡(のうたん)が生まれた。黒き水には光にはない曲線的なうねりや流れがあり、それらが複雑に絡まり合うことで子宮(しきゅう)のような機能を備えるようになっていた。深きところの闇は濃く生まれ出ずる生命(いのち)は数少なかったが、どれも大きく力ある者で、さらには根元的な存在であった。浅きところで生まれた者は、力こそ弱々しくはあったが数は多く、およそ三百種、のべ一万を超える生命が満ち溢れていた。

黒き水の上澄(うわす)みに名もなきとある種(しゅ)が棲(す)まっていた。雲霞(うんか)のごとく漂う小さきその種は黒き水で最も弱く、最も数多き生命であった。群(むれ)を統率するような者もおらず、ただただ浅きところの激しき流れに翻弄(ほんろう)されて他の生命の滋養になるしかないその種の中から〈いと小さき者(もの)〉は生まれた。

小さきがゆえに流される同種の群から上へ上へと押し出され、〈いと小さき者〉はとうとう水面(みなも)近くを漂うことになった。群には戻れず、かといって水面の向こうに出ることも叶わない。〈いと小さき者〉は孤独に揺蕩(たゆた)いながら、いつしか「自分」という存在を意識するようになっていった。

「〈わたし〉とは、一体何者なのだろう」

黒き水の生命でそのことについて思いを巡らせたのは、大いなる者を除けば〈いと小さき者〉が初めてだった。そもそも光が在ってこそ事象を観(み)ることができるのである。闇の満ちた黒き水に生まれた生命たちは触覚(しょっかく)、聴覚(ちょうかく)、嗅覚(きゅうかく)、味覚(みかく)の四つの感覚を駆使して周囲を認知し、世界を理解してきた。〈いと小さき者〉が取った「見つめる行為」は、光溢れる大地の生命ならば誰しもが備えていた、けれど今では失われてしまった感覚の範疇(はんちゅう)であった。だからこそしばらく後(のち)、世界に変化が訪れたときに〈いと小さき者〉がいち早くそれを感じ取ることができたのである。

それは何の先触(さきぶ)れもなく水面の向こう側に現れた。それは弱々しく、か細く、そして真(ま)っ直(す)ぐな波をあらゆる方向へと放つもの――光だった。〈いと小さき者〉の体に生まれつつあった視覚器官は、光の波を享(う)けて形を持った。〈いと小さき者〉は目を具(そな)えたのである。

光の放つ直線的かつ放射的な波は、世界を照らすだけでなくその波を享けた生命を変化させる力をも持っていた。水面の少し上に浮かんでいたその光が変化を促(うなが)す波を撒(ま)き散らしながら〈いと小さき者〉から遠ざかっていった。光が向かう先はかつて天と呼ばれたところであった。つまりその光は新たに世界を照らすもの――太陽(たいよう)だったのである。

天に上り着いた太陽は輝きを少しずつ増していき、世界のあらゆる場所から闇を取り払った。

黒き水は黒き水のままだったが太陽光(こう)は水中にも達し、まず浅きところに棲まう生命たちの所在を明らかにした。そのとき世界でただ一人、目を具えていた〈いと小さき者〉の興味は、水中の変化よりも水上に向いていた。越えることのできない境目(さかいめ)の向こうに独り佇(たたず)んでいる者がいたのである。

「あなたは誰……？」

〈いと小さき者〉が問いかけると、佇む者は静かに答えた。

「私は〈影(かげ)〉……闇でありながら光より生じる者」

〈影〉が〈わたし〉という概念を持つことを知り、〈いと小さき者〉は生まれて初めての共感を覚えた。

「光……この不思議な波は光というのね」

「ああそうさ。そして、あそこで光を放つのはこの世界から失われし二つの光の一つ。太陽だ」
〈影〉の声は至って穏やかだった。だが、天から降る太陽光の眩しさのせいとその姿は判然とせず、〈いと小さき者〉の目に映ったのは〈影〉の輪郭だけだった。

「ところで、君は誰だい？」

〈いと小さき者〉は〈影〉の問いに答えることができなかった。闇濃き深みの大いなる者ならともかく、最も浅きに棲まう〈いと小さき者〉には名乗る名など持ち合わせていなかったのである。

「……〈わたし〉は、たくさんいるものの一つよ」

声を震わせながら言うと、〈影〉は小首を傾(かし)げた。

「たくさんの一つだって？ 本当にそうかい？ ぼくに見えている君は、世界でたった一つの存在だよ。自分の姿をよく見てごらん」

言われるままに己の姿に目をやり、〈いと小さき者〉は驚いた。〈影〉との出会いに喜ぶあまり、〈いと小さき者〉はいつの間にか、その体を〈影〉の輪郭を写し取ったかのように変化させていた。四本の手足を持つその姿は黒き水が生み出した生命のどれとも異なるものだった。

「これが〈わたし〉……」

「そうだよ。太陽の光を享けた君はとても輝いて見える。君の内側から光が引き出されているんだ」

〈いと小さき者〉は喜びながらも、〈影〉の声色に悲しみが秘められていることを察した。

「〈わたし〉には、あなたの姿がよく見えないわ。自分のことははっきりと見えるのに」

水面を挟(はさ)んだ向こう側の〈影〉の姿は、ゆらめきと逆光(ぎゃっこう)で定まらなかった。しかしそれとはまた別に、〈影〉には実体そのものが欠けていたのである。

「それはそうだ。君と違って私には〈肉体(からだ)〉がないからね。今の私は、いるように見せかけていて実はいない者なのさ」

〈いと小さき者〉には〈影〉の言葉の意味を理解することができなかった。

「それって何だかおかしいわ。あなたはすぐそこにいる。〈わたし〉にはちゃんと見えているのよ。こうして言葉も交(か)わしているじゃない。それなのに、いるのにいないってどういうことなの？」

そう捲(ま)くし立てると、〈影〉は少し困ったように黙った。〈いと小さき者〉は触れてはいけないところに触れてしまったことを悟り、それ以上のことを問い質(ただ)せなくなってしまった。「面白いことを教えてあげよう。私のことよりも、もっとずっと面白いことだよ」「面白いこと？」

〈いと小さき者〉が首を傾げるが早いか、〈影〉は水面に手を伸ばした。〈影〉の手先は易々(やすやす)と境界を越えたかと思うと、呆然とする〈いと小さき者〉の手首を掴んだ。

「な、何をするの？」

〈影〉が自分を水面の向こうへと引き揚げようとしていることに気付いた〈いと小さき者〉は、驚きと恐れの入りが交じった声を上げて激しく抵抗した。世界が闇に満たされた後に水面の向こうへと出た者は誰一人としていなかった。〈いと小さき者〉に限らず、黒き水に棲まう者のほとんどは、水面こそが存在と滅びを分かちものであると強く信じていた。

「平気だよ。そこまで怖がるのなら、片手の先だけでもいいから。私を信じて」

〈いと小さき者〉が抵抗を止めたのは、〈影〉の声に信頼に足るものを感じたからであり、さらには水面の彼方に輝く太陽に近付いてみたいという思いが頭をよぎったからである。

〈影〉に導かれるまま、〈いと小さき者〉はとうとう片手を水面の向こうへ出した。そこにあったのは考えていたような滅びではなく、むしろ生命を活発にする暖かな力だった。

「こ、これは何？」

「これが太陽の光だよ。光の波だけならばそちらにいても感じるができる。けれど、光の持つ暖かみはわからない。そちらはとても冷たいところだからね」

感じた暖かみは降り注ぐ太陽光からのものだけではなかった。その手を掴む〈影〉からも優しく柔らかい温度が伝わってくるのを、〈いと小さき者〉はしっかりと感じ取っていた。

2

それからしばらくの間、〈いと小(ちい)さき者(もの)〉と〈影(かげ)〉は二人きりで語り合った。片手を出す分には何事もなかったとはいえやはり〈いと小さき者〉にとって水面(みなも)の向こう側は恐ろしく、踏み込まざるべきところだった。そのため、二人は水面を挟んで背中合わせとなって様々な言葉を交わした。

〈影〉は自分自身のことは全く語ろうとはしなかったが、〈いと小さき者〉が知らないいくつかの世界の不思議を教えた。黒き水が溢れる以前に大地というものが存在していたこと。大地には世界樹(せかいじゅ)に庇護(ひご)された獣たちが悠久の安らぎを謳歌(おうか)していたこと。そして天より降る光が減衰し、新たな光を求めた最後の獣たちが相(あい)争い、世界から光そのものが失われてしまったことを〈影〉は語って聞かせた。

「それはとても悲しい結末ね」

〈いと小さき者〉が口にすると、〈影〉は首を横に振った。

「そうじゃないさ。世界が黒き水に満たされなければ、君も、君以外の多くの生命も誕生することではなかったんだから」

そう諭され、〈いと小さき者〉は半ばまで納得し、半ば疑問も感じた。〈いと小さき者〉はやはり己が誕生し、存在することの意味がどうしてもわからなかったのである。

話の最後に、それまでもっぱら聞き手に回っていた〈いと小さき者〉が〈影〉を感心させることを言った。それは気分が高揚した〈いと小さき者〉が手で水面を弾いたことがきっかけだった。〈影〉も同じように水面を弾き返すと向こう側から幾つもの小さく透明な玉が入り込んできた。

「これは何？」

無数の小さな玉は、わずかに水中に沈んだかと思うと同じ勢いで水面へと戻り、向こう側に消えていった。

「それは空気の粒さ」

向こう側には空気という目に見えないものが漂っているのだと〈影〉は語った。

「普段は見えないものなのだけれど、水に入ると見えるようになるんだ」

「へええ。じゃあ、もし逆に水が空気に入ったらどうなるの？」

〈いと小さき者〉はもう一度水面を弾いてみた。

「小さな玉になって、落ちていったよ」

「こっちと同じだわ。とても面白い！」

〈いと小さき者〉の小さな胸が、それまでにないほど高鳴った。

「全体、それはどういうことだい？」

「だってだって、空気がこっちに入っても水がそっちに入っても玉の形になるのよ。それにどちらも水面に引き寄せられていく。とても面白いことじゃない。水面が境目とされているのも、きっとそこに秘密があるのよ！」

〈いと小さき者〉がこみ上げる興奮のまま語ると、〈影〉は感嘆するように唸った。

「なるほど、そうか。ぼくはただ、自分の仲間がいる場所——つまり、自分のいるべき場所に戻ろうとしているものだと考えていたのだけれど……なるほど。境界に引き寄せられているのか。水面の役割は、空気と水とを隔てることだけではないのかもしれないね」

そう言ったきり〈影〉は押し黙り、何やら物思いを始めた。

「どうしたの？」

〈影〉の急な沈黙を不安に思い、〈いと小さき者〉が問いかけた。

「ああ、ごめんよ。いや何、君ならば平気なのかもしれないと思って」

〈影〉の言葉の意味はよくわからなかったが、それを聞いた瞬間、〈いと小さき者〉は自分に何らかの変化が訪れる兆(きざ)しであると感じた。それは自分にとってとても大切で、とても大きな変化だという予感が小さな胸を突いたのである。

「何が平気なの？」

〈影〉はそれまでの気安さから一転し、重々しく口を開いた。

「……君に、頼みたいことがあるんだ」

「どんなこと？」

〈いと小さき者〉は、初めて光を見たときに勝るほどの好奇心と未知への恐怖で心を渦巻かせた

。水面越しに、〈影〉が懐(ふところ)から小さな箱を取り出すのが見えた。

「この中に、もう一つの光が入っている」

「もう一つの光？」

「そう。こちら側で輝き続ける太陽とは異なる、太陰(たいいん)という静かな光だよ」

太陽はあらゆる生命に活力を与えるが、太陰は授かった生を全うして滅びを迎えた生命を導く役割を持っているのだ、と〈影〉は語った。

「この太陰光を携(たずさ)えて、水底(みなそこ)――深く濃い瀬流(せいりゅう)の底を訪ねて欲しい」

〈影〉の頼みごとの詳細を聞き、〈いと小さき者〉は言葉を失った。自分が生まれた浅く淡い激流(げきりゅう)でさえ、水面近くの比較的穏やかなところしか知らない〈いと小さき者〉にとって、固有の名を持つ大いなる者が棲まう深く濃い瀬流は、水面の向こう側と変わらぬほど恐ろしき場所だったのである。

「無理にとは言わない。本来、これは私が頼まれた役割なのだから」

そう言いながら、〈影〉はどこか無理をしているように感じられた。それはおそらく〈影〉には〈肉体〉を探すという最も優先する目的があるためだろうと〈いと小さき者〉は察した。そして〈いと小さき者〉はこのまあいっまでも〈影〉と語らっていたいと心の底で願っていることを自覚した。できることなら〈影〉をここに引き留めたい。けれども、それはきっと〈影〉の望むところではないことも痛いくらいに理解できた。

「……ううん、やるわ。〈わたし〉にやらせてちょうだい」

〈いと小さき者〉がそう答えたのは自暴自棄(じぼうじき)になったからではない。心を通わせた〈影〉の頼みを引き受け、それを成し遂げることこそが、自分と〈影〉との絆の証明となる。

〈いと小さき者〉はそう確信したのだった。

「ありがとう」

〈影〉は水面の向こうから小箱を差し入れ、〈いと小さき者〉はそれをしっかりと受け取った。

「それを、深く濃い瀬流に棲まう、最も古き者の元に届けてもらいたい」

「最も古き者？」

「ああ。光が失われた後、黒い水から最初に生み出された原初の存在だ。固有の名があるはずだが、それは私にもわからない」

「大いなる者なのね。その御方が、光を届けて欲しいとあなたに頼んだの？」

「ああ、そうさ」

〈影〉は手を伸ばし、小箱を持つ〈いと小さき者〉の指先に触れた。

「辛(つら)い道のりになるかもしれない。本当にいいのか？」

心配げに言う〈影〉に、〈いと小さき者〉は精一杯の作り笑顔で応じた。

「大丈夫、任せて！ あなたこそ、早く〈肉体(からだ)〉が見つかるといいわね」

「ありがとう、本当に……」

表情がないはずの〈影〉の顔に優しげな微笑(びしょう)が浮かんだのを、〈いと小さき者〉ははっきりと見た。もう二度と会うことはないだろう。けれども、それでいい。〈影〉の笑顔は〈い

と小さき者〉にそう思わせるものだった。

「その小箱自体に意味はない。困ったときには開いてみるといい。中の太陰が、きっと君の助けになってくれるだろう」

〈影〉からの最後の言葉を聞き遂げると、〈いと小さき者〉は別れの名残(なごり)を惜しむことなく水面を蹴り、未知の深みへと向かった。

「……さようなら」

そのつぶらな瞳(ひとみ)に、黒き水の中でもよくわかる大粒の涙を溜めながらの出発であった。

3

別れの涙を振り切るように潜りながら、〈いと小(ちい)さき者(もの)〉は浅く淡い激流(げきりゅう)の住人に変化が生じていることを知った。まず自身を生み出した雲霞の如く小さき種(しゅ)の中に、激流に逆らう力を持つ者が混じるようになっていたのを見つけた。彼らは個体ごとに体のどこかしら違う箇所を変化させ、すでに小さき種と一括(くく)りには呼べぬ姿になっていた。だがそれでも〈いと小さき者〉に生じたものとは比べ物にならぬほど微細な変化だった。

そもそも変化の有無に関わらず、小さき種のほとんどが太陽光の存在を上手く感知できていなかった。浅く淡い激流で目を具えた生命は未(いま)だに〈いと小さき者〉ただ一人であり、ゆえに〈いと小さき者〉だけが変化を積極的かつ肯定的に受け入れることができたのである。

自らの変化に戸惑い右往左往する小さき種を掻き分けるようにして、〈いと小さき者〉は潜り続けた。視覚を得た〈いと小さき者〉は、それまで嗅覚や聴覚でのみ感知していた生命たちの姿を目の当たりにした。常に一対になって行動していると思われた者たちが実は一個の生命だったり、逆に大きな一個の生命だと思われた者が小さな生命の集合体だったりする様は〈いと小さき者〉に新鮮な驚きを与えた。

太陽光はすでに浅く淡い激流の隅々にまで届いており、あらゆる生命に変化をもたらしていた。姿形が様々に変貌(へんぼう)しつつあるのは元より、光が存在しなかったときには不要であった色(いろ)という観念が生まれつつあった。色について〈影〉から伝え聞いていた〈いと小さき者〉は、暖かみのある色が赤で、見ていて落ち着く色が緑であるなど目を通して得た一つ一つの情報を具体的な知識へと変え、己が内に蓄えていった。

深みに潜るにつれ、淡い色は徐々に濃くなり、流れは激しさを増していった。激流に翻弄(はんろう)されながら深く濃い瀬流(せいりゅう)を目指す〈いと小さき者〉は、激流で最も権威ある多くの体節と固い外殻(がいかく)を持つ種の長老に会い、瀬流に至る道筋を訊(たず)ね聞いた。

「深く濃い瀬流に至るには、アクラハザにお会いせねばならぬ」

浅く淡い激流の最深部の流れは絶えず荒れ狂っており、近付こうとただけで千々に引きちぎられ、瞬(ゆ)く間に微塵(みじん)となってしまう。それに耐え得る生命はアクラハザの名を持つ大なる者のみなのだと長老は語った。

アクラハザという手がかりを得た〈いと小さき者〉であったが、その元へ辿(たど)り着くためには、定まることなく荒れ狂う流れを越えねばならなかった。無謀(むぼう)にも激流に身を投げ出

そうとしたそのとき、〈いと小さき者〉は小箱の中からうっすらと光が漏れていることに気が付いた。おそろおそろ小箱を開けてみると、中から一欠片(かけら)の小さな光が浮かび上がった。太陽光のような暖かみはない静かな青白い光――それが太陰光だった。

〈いと小さき者〉が指先で触れると、太陰光は眼下の激流へと沈んでいった。いざなうようなその動きを見て、〈いと小さき者〉の脳裡に太陰光は滅びし者を導くという〈影〉の言葉が浮かんだ。

「まるで、〈わたし〉に滅びよと言っているようだわ……」

背筋を冷たくしながら、しかし〈いと小さき者〉は太陰光の導きに従った。困ったときに助けになるという〈影〉の別れ際の言葉を信じることにしたのである。

その勇気ある決断は正しかった。太陰光は激流の間隙をくぐるように進み、それに続く〈いと小さき者〉は何の苦もなく通り抜けることができた。かくして〈いと小さき者〉はアクラハザの前に至った。

「あなたがアクラハザ様ですか」

(如何(いか)にも――)

〈いと小さき者〉が目にしたその姿を一言で表すと、途方もなく大きな岩の顔であった。丸みを帯びた輪郭の台の上に、ごつごつとした岩肌が目鼻を象(かたど)るように盛り上がっている。口を固く閉ざしたその表情は、まるで激流を睨みつけるかのような憤怒(ふんぬ)の形相(ぎょうそう)だった。

〈いと小さき者〉はその異様に総身(そうみ)を竦(すく)ませながら口を開いた。

「大いなるアクラハザ様。〈わたし〉めに深く濃い瀬流への道を示してくださいまし」

〈いと小さき者〉は太陰光を運ぶという役割をアクラハザに伝えた。

(黒い水の上に太陽が生じたことは知っておる。世界に新たな変化が訪れんとしておるのだ)

そう言うと、アクラハザは厳(いか)めしい顔容(かんばせ)をさらにしかめさせた。

(汝(なんじ)に問おう。太陽が生まれしこの折(おり)に、水底(みなそこ)に太陰を運ぶことが如何なる意味を持つか、汝は理解しておるのか?)

アクラハザに問いかけられ、〈いと小さき者〉はわずかに当惑した。

「いいえ。〈影〉はそれを教えてはくれませんでした。けれど〈わたし〉めには、与えられたこの役割がとても大切なものだということはわかっています」

〈いと小さき者〉は気圧(けお)されながらも黙することなく、真摯(しんし)に己の思うところを伝えた。

(汝がこの世界に生じたのは、我にとってはたかだか昨日今日の事。幼く愚(おろ)かな身の分際で、このアクラハザと同じく世界の根元に関わる使命を負っておると申すか)

激流を掻き消さんばかりの大音声(だいおんじょう)だったが、〈いと小さき者〉の耳には、それは怒りを含んだものに聞こえなかった。

「恐れながら、アクラハザ様。この世界に生み出された者に、この世界に関わらぬ者が存在するのでしょうか。大小はあったとしても、誰にでも何かしらの使命が生命と共に与えられているのだらうと〈わたし〉めは考えます」

それを聞き、アクラハザの巖面(いわおづら)が微かに緩んだ。

(ほう、面白いことを申すではないか。よかろう。では一つ、試しを与えてみるとしよう)

「試しとは？」

(我がこれより口にする問いに答えてみせよ。見事それを果たせたのならば、深く濃い瀬流への道を開いてやろう)

〈いと小さき者〉が大きく頷くと、アクラハザは問いかけた。

(我、大いなる者の一柱(ひとり)であるこのアクラハザに与えられた使命とは何だ。疾(と)く答えよ)

根元的で難解な問いであったが、それは〈いと小さき者〉に答えられないものではなかった。

〈いと小さき者〉はアクラハザが座するこの場所について思いを巡らせ、答えを導き出した。

「恐れながらお答えいたします。アクラハザ様は〈分(わ)かつ者〉でございましょう」

それを聞き、アクラハザは唸った。

(具(つぶ)さに述べよ)

「はい。アクラハザ様がおわしますのは、浅く淡い激流と深く濃い瀬流の分かれ目でございます。深浅の境(さかい)、濃淡の半(なか)ば、激動(げきどう)と瀬寂(しじま)のあわいに鎮座(ちんざ)ましますアクラハザ様の御使命は、万(よろ)ずの物事が混ざり合い、混沌(こんとん)とならぬように分かつということではないかと愚考(ぐこう)いたしました」

〈いと小さき者〉がそう言うと、わずかな沈黙の後、アクラハザは呵々(かか)大笑(たいしょう)した。その笑い声の大きさを、頭上に渦巻く激流を戸惑わせ、その勢いを減じさせてしまうほどであった。

(明察(めいさつ)じゃ。まさか汝のような幼く小さき者にそれを答えられるとは思わなんだ)

笑いを収め、アクラハザが言った。

「〈わたし〉めは水面(みなも)近くで生まれ、水面を挟んで〈影〉と語らい、知恵を得たのでございます」

(そうか、水面も大きな境目であるな。なるほど然り——)

大きく納得すると、アクラハザは口を開いた。

(よかろう。深く濃い瀬流への道を開いてやる)

アクラハザが大きく息を吸うと、〈いと小さき者〉の体と太陰光は抗(あらが)う間もなく甚大(じんだい)な量の水ごと巨大な口の中に飲み込まれていった。

4

〈いと小(ちい)さき者(もの)〉が目を覚ますと、辺り一面が漆黒(しっこく)の闇に包まれていた。

「ここが、深く濃い瀬流(せいりゅう)なの……？」

その眩(くら)きが大きく反響するほどの瀬寂(しじま)に、〈いと小さき者〉はこれまで以上の孤独感を味わった。小さき種(しゅ)の群から弾き出されたときよりも〈影(かげ)〉に別れを告げて水面(みなも)から発ったときよりも強い孤独だった。胎児(たいじ)のように身を縮(ちぢ)こませる 〈いと小

さき者〉の傍(そば)に、太陰光が寄り添うように近付いた。

(臆(おく)するな、勇気ある小さき者よ)

耳を震わせたのはアクラハザの声だった。太陰光が照らすその顔容(かんばせ)は、激流(げきりゅう)側で見たようなごつごつと厳(いか)めしいものではなく滑(なめ)らかで穏やかな表情をしていた。怒りと穏(おだ)やかな二つの顔が背中合わせとなったアクラハザの在(あ)り様(よう)を見て、〈いと小さき者〉はそれがかつて背中合わせになって水面で語り合った自分と〈影〉のようだと思った。またそれと同時に、自分はアクラハザの筒状の口を通して深く濃い瀬流にやって来たことに思い至った。

(我は大いなる〈分(わ)かつ者〉であるが、水底(みなそこ)までの道程を見通すことはできぬ。小さき者よ、バルンベを訪ねよ)

「バルンベとは？」

(水底の所在を知る大いなる者だ)

「そのバルンベ様は何処(どこ)におられるのですか？」

(そのまま真っ直ぐに進めばよい。さすればバルンベの方が汝を見つけるだろう。バルンベは知りたがりであるからな)

アクラハザの希望ある言葉に勇気づけられた〈いと小さき者〉は心を込めて礼を述べると、太陰光と共に深く濃い瀬流の奥へと向かった。

瀬流では時も距離も緩やかに過ぎていくようだった。どれだけ長く、どれだけ深く潜っても、〈いと小さき者〉の心が再びの不安に苛まれることはなかったが、その体は別だった。水面を発(た)ってからというものほとんど休みなく潜り続けてきた疲労に加え、瀬流の水は全身を刺すような冷たさであった。まず四肢の末端部の感覚がなくなり、それから体の節々の動きも重く鈍(にぶ)くなっていった。

それでも諦(あきら)めることなく一筋の希望を胸に前進しようとする〈いと小さき者〉を太陰光が包み込んだ。太陰光は銀色の衣(ころも)となり、〈いと小さき者〉の体から凍(い)てつきを遠ざけた。それはまるで〈影〉が傍にいるような安心感をもたらし、〈いと小さき者〉の小さな心は大きく励(はげ)まされたのである。

意気を取り戻してしばらく進むと、闇の奥から巨大な何者かが近付いてくるのがわかった。水を掻く手を止めた〈いと小さき者〉の前に闇の中から一つの目が現れた。目には長い尾が生えており、その先は見えないほどの深みへと繋がっていた。

「あなたが、バルンベ様？」

〈いと小さき者〉が問うと、闇の中から幾つもの目が浮かび上がった。どれも最初の一つと同じく長い尾を引いていたが、目そのものは全て異なる形状をしていた。〈いと小さき者〉は知り得なかったが、それらはかつての大地に住んでいた獣たちの目であった。幾十幾百もの目に見つめられ、〈いと小さき者〉は困惑して何も言えなくなってしまった。続いて嗅覚を司る多種多様な器官が浮かび、そしてようやく言葉を発する口が現れた。

(ほうほう、それは太陰光か。見た覚えがあるぞ)

鳥の嘴(くちばし)に似た口を嚙矢(こうし)として次々出てきた多様な口たちが異口(いく)同音に言葉を発した。鋭い牙を持ったもの。草を擦(す)り潰(つぶ)すための臼歯(きゅうし)が並ぶもの。左右に開く硬質の顎(あご)。内側が鋭い棘(とげ)で埋め尽くされた丸い筒など、目や鼻と同数の口の一斉の言葉に、〈いと小さき者〉は困惑を通り越して気が触(ふ)れてしまいそうな気分になった。

「ど、どうして太陰光を御存知なのですか？」

幾百の目口たちが太陰光を知っていることに〈いと小さき者〉は疑問を覚えた。いかに瀬流に棲まう大いなる者の一柱(ひとり)とはいえ、世界から光が失われた後に生み出された生命であることに変わりはないはずである。

大いなる者は〈いと小さき者〉の問いに答える前にその全貌を露(あら)わにした。千にも及ぶ目口の尾が伸びる先が見通しの利(き)かない闇の中から浮かんでくる。それは、無数の触手が絡まり合った途轍(とてつ)もなく巨大な球状の異様だった。一本一本の触手の先端から目や鼻、口、またそれだけではなく多種多様な手足、心臓や肺をはじめとするあらゆる臓器をも生やしていた。

(我はバルンベ。獣たちの亡骸(なきがら)が寄り集まりて生まれし大いなる者なり)

それを聞き、〈いと小さき者〉は得心した。つまりバルンベが生やしている諸々の器官は光と共に失われた獣たちのもので、バルンベは彼らの感覚を受け継いでいたのである。感覚だけでなく、目には見た景觀が、手足には触れた物が、口には語り続けた言葉というように、そこに残された記憶をも引き継いでいるのだった。

「恐れながら、黒き水で最も賢(かしこ)きバルンベ様にお訊ねします。〈わたし〉めにこの瀬流の水底(みなそこ)へ至る道筋をお教えてください」

〈いと小さき者〉の懇願に、バルンベは代償を要求した。

(我はバルンベ。数多(あまた)の知を蓄え、かつ〈知を求める者〉である。我はさらなる知を渴望(かつぼう)する)

バルンベは己が未だ知らぬ事柄を聞いたがっていた。〈いと小さき者〉は水面近くの景觀や太陽の輝く様、変化しつつある浅く淡い激流の生命たちのことを語ったが、常に周囲に気を巡らせているバルンベにとってそれらは全て既知(きち)の物事であった。〈影〉のことすら知っていたバルンベの未知とは一体何なのかという疑問を〈いと小さき者〉は率直に呟(つぶや)いてみた。

「バルンベ様は、どうしてそのように知をお求めになさるのでしょうか？」

幼き頭に浮かんだ質問それ自体には何の思惑(おもわく)もなかった。だが、幾百の耳でそれを聞き止めたバルンベに大きな動揺を走らせた。

(何故、我は知を希求するのであろうか……)

それまで一つの意志の元にあった千を超える触手たちが統制を失い、てんでばらばらな動きを取り出した。目に口が噛みつき、耳の穴を心臓が塞(ふさ)ぎ、手指が鼻へと突っ込まれたという混乱が、至るところで起こっていた。それを見た〈いと小さき者〉は、慌ててバルンベを落ち着かせようとした。

「お鎮(しず)まりください、バルンベ様！」

手近にあった長耳(ながみみ)にしがみつき、その奥へと喉(のど)が張り裂けんばかりの大声を発してようやく混乱が収まった。

「分を弁(わきま)えず、出過ぎたことを口にしてしまいました。バルンベ様を悩ませるつもりなどなかったのです」

(.....謝ることはない、太陰を運ぶ小さき者よ。それは確かに我にとっては未知(みち)の事柄であった)

一見してバルンベは落ち着きを取り戻したようであったが、その声色にはまだ動揺が残っていた。

(生まれてよりこれまで、我は知のみを求めてきた。だが、知を在りのままに記憶するばかりで、その一つ一つに思いを馳せてはこなかった。まして、我が何故(なにゆえ)知を求めるのかという至極(しごく)根本的な疑問は、考えるまでもないことだと決めつけていたのだ)

「.....〈わたし〉には、バルンベ様がどうして知をお求めになられるかがわかるような気がします」

〈いと小さき者〉の言葉は取り繕(つくろ)ったものではなかった。

(ほうー面白い、申してみよ)

「ちゃんとした答えになってはいないかもしれませんが.....バルンベ様はおそらく、境界(きょうかい)を探しておられるのだと思います」

(境界だと?)

「はい。〈わたし〉は水面にて、水と空気が似ていることに気が付きました。水面を出て空気に混じった水は玉となり、再び水面へと戻っていかうとします。水面を越えて水中に入った空気もまた、玉となって水面へと引き寄せられていくのです。〈わたし〉はそれを見て、空気や水の球には水面――つまり境界を求めさせる、意思とは異なる何かがあり、それが命じるがまま突き動かされているのではないかと思ったのです」

(我が知を希求するのも、その意思と異なる何かとやらがそうさせておると言いたいのか?)

〈いと小さき者〉は静かに、けれどもはっきりとした表情で頷いた。バルンベは全ての目を閉じ、口を閉じ、全ての耳を塞ぎ、大いなる沈黙に包まれた。いくら待ってもその沈黙が解けることはなく、千を超える触手は本体とおぼしき中核の球へと絡みつぎ、ただ一本だけ残った手指が深く濃い瀬流の一点を指し示していた。〈いと小さき者〉は深々と一礼すると、バルンベの示した方向へとさらに潜っていくのだった。

5

いよいよ水底(みなそこ)へと近付く 〈いと小(ちい)さき者(もの)〉は、途上でもう一柱(ひとり)の大いなる者に出くわした。その大いなる者はアクラハザやバルンベと比べると驚くほど小さかった。

「あなた様は？」

(やつがれはキュカラパブロキ。〈沈まぬ一(いち)なる舟〉にして、〈変化を見つめる者〉じゃ)

威厳(いげん)には欠けるが老獪(ろうかい)そうな声の主は 〈いと小さき者〉 三つ分ほどの身の丈しかなく、楕円形(だえんけい)の球を短軸に沿って半分に断ったような姿をしていた。断面の中心

には黒く輝く硬質の輪が盛り上がっており、それがキュカラパブロキの目であった。輪状の目の中心から蛇腹の触手が一本伸び、その先端に鋭い牙を持った丸い口が具(そな)わっていた。

(ほうほう。太陰光(たいいんこう)を運んできたのか)

キュカラパブロキは先の二柱(ふたり)のような試しの問答は一切求めようとせず、水底について訊(たず)ねる〈いと小さき者〉の言葉の全てに首肯(しゅこう)した。

(汝が求める場所はもうすぐじゃ、ほれ)

キュカラパブロキが示す先にはアクラハザやバルンベよりも遙かに巨大な二枚貝の殻があった。

「あそこが水底なのですね」

〈いと小さき者〉は心身の疲労を忘れ、喜び勇んで殻の上に下り立った。辺りを見渡してみるが、表面がごつごつとしているばかりで何もなかった。

(こっちじゃ、こっち)

キュカラパブロキは〈いと小さき者〉を貝の縁(へり)へといざなった。〈いと小さき者〉が縁から覗き込んでみると、上下の貝殻にはわずかな隙間が開いていた。

(汝が求める御方は、この中におられるぞい)

その隙間は〈いと小さき者〉がようやく通れるほどしか開いていなかった。〈いと小さき者〉はキュカラパブロキに別れを告げ、太陰光のみを連れだって貝の内側に入ってしまった。

(いいか、最も大きな物を目指すのじゃぞ)

念を押すようなキュカラパブロキの助言を受け、殻の内面に沿って進むと、石でできたアーチの向こうに数え切れないほどの尖塔(せんとう)がそびえ立つのが見えた。どれも目にしたことの無い構造物だったが、〈いと小さき者〉はそれが自然に形成された物ではなく、何らかの意図によって作り出された物であることを感じ取った。

「ここに、〈影(かげ)〉が言っていた最も古き者がいらっしゃるのね」

〈いと小さき者〉はキュカラパブロキに教えられた通り、最も大きな尖塔を見つけ出し、その中へと入ろうとした。巨大な扉を開こうとしたそのとき、か細い声が耳に届き、〈いと小さき者〉は手を止めた。

(……いけない。そこに入ってはいけない)

耳元で警告を繰り返すのは、一粒の小さな泡(あわ)だった。

「あなたは誰？」

指先ほどの大きさしかない泡は〈いと小さき者〉の問いには答えず、門を開くのを止めたと察するや、ふわふわとどこかへ漂っていった。キュカラパブロキの言葉に漠然(ばくぜん)とした疑いを抱いていた〈いと小さき者〉は小さな泡の後を追うことにした。

行き先は崩れかけの小さな尖塔だった。小さな泡は壁面の細かな亀裂に入り込んだため、〈いと小さき者〉はその姿を見失ってしまった。慌てて古びた扉を引き開けると、そこには地下に通じる穴がぼっかりと口を開けていた。

(こちらへいらっしゃい)

〈いと小さき者〉は奥から聞こえてくる暖かい声に引き寄せられるように穴に入った。穴の中に

も黒き水が満ちていたが、今まで感じたことのないほどの高温を発していた。全身に火傷(やけど)を負いながら、〈いと小さき者〉はうめき声の一つも上げず、ひたすら奥へと潜り続けた。灼熱の水を越えたところで待っていたのは薄紅色の泡の集合体だった。

(私はディアルレリオ。〈最奥(さいおう)に凝(こご)る泡沫(ほうまつ)〉であり、この黒き水における原初の生命(いのち)――)

静かだがよく響く声で、泡の集合体は語り出した。

「ということは、あなた様が最も古き者なのですね！」

求めていた者をとうとう捜(さが)し当て、〈いと小さき者〉は胸をなで下ろす気持ちになった。
(よくここまで辿(たど)り着きましたね。感謝します、勇気ある小さき生命よ)

火傷による痛みに加え、溜まりに溜まった疲労が噴き出そうとするのを必死にこらえながら、〈いと小さき者〉は身に纏(まと)っていた太陰光を脱いでディアルレリオに差し出そうとした。太陰光は疲れ果てたその生命を保(たも)つものであり、それを手放すことは即(すなわ)ち己の滅びに繋がるということだと〈いと小さき者〉は理解していた。だが、〈いと小さき者〉にとって、〈影〉に託された使命を全うするためには、己の生命などどうというほどのものではなかった。
(その必要はありません)

ディアルレリオはそんな〈いと小さき者〉の悲愴(ひそう)な挙動を押し留めた。

「どうしてそのようなことを仰(おっしゃ)られるのですか？ 〈わたし〉はあなた様にこの青く静やかな光をお届けするために参ったのです」

〈いと小さき者〉は顔を歪(ゆが)ませながら主張した。自分にだけ与えられた役割だと固く信じていた思いを否定されたような気持ちになったのである。

(重々承知していますとも。私はあなたに感謝しておりますし、あなたの献身(けんしん)を無為(むい)にするつもりもありません)

ディアルレリオは諭すように語りかけたが、〈いと小さき者〉はまだ戸惑いを拭(ぬぐ)い切れずにいた。

(よくお聞きなさい。私に必要だったのは太陰光ではないのです。これは〈影〉にも伝えていなかったのですが、その太陰光はこの水底の忌(い)まわしき城への導き手でしかありません)

「では、〈わたし〉は何のために……？」

(落胆することはありません。あなたのお陰で、私の願いはこうして叶えられたのですから)

〈いと小さき者〉は、ディアルレリオの言わんとしていることが一向に掴めなかった。

「一体どういうことなのでしょう。幼く愚(おろ)かな〈わたし〉には、御心(みこころ)をお察しすることができません」

(私は、他ならぬあなたを待ち続けていたのです)

「〈わたし〉を……？」

呆然とする〈いと小さき者〉の眼前に、ディアルレリオは二粒の泡を吐いた。泡はそれぞれ金色と銀色の光を内包していた。〈いと小さき者〉は金色の光は太陽(たいよう)、銀色は太陰の光によく似ていることに気が付いた。

(私はかつての大地に棲まっていた二頭の獣の亡骸から生まれました)

「それは、異なる光を求めたがゆえにあらゆる光を失ったという……」

〈いと小さき者〉は、〈影〉から聞いた大地の終末に争った最後の二頭の話の思い浮かべた。

(その通りです。光を失い、滅びを迎えた二頭の亡骸はあなたが出会った〈影〉によって諸共(もろとも)に黒き水の底に沈められました。その亡骸が朽ちていく中で生じた泡が集まり、このディアルレリオとなったのです)

息を呑む〈いと小さき者〉に、ディアルレリオは己は黒き水の全ての生命の母だと語る。

(私は生まれ落ちてすぐにこの小さな塔を建て、ここから亡骸の欠片を二つの流れに乗せて数多の生命を生み出しました。深く濃い瀬流(せいりゅう)には力ある大いなる者を。浅く淡い激流(げきりゅう)にはか弱いけれども自らの手で新たな生命を生み出すことのできる者を。全ては、いつか再び訪れるこの世界に光が戻る日を迎えるためです)

「だから、このように大きな宮殿をお造りになられたのですか」

(いいえ。私が造ったのは今いる小さな塔のみ。この都(みやこ)、リユーレエは私が造り出した物ではありません)

ディアルレリオの塔は突如出現したこの二枚貝に吞まれ、リユーレエという都市の一部とされてしまったのだという。

「一体誰がそんなことを？」

(その名はクリルリ。この世界ではない異世界よりの来訪者です)

「それは、〈影〉のように？」

(いいえ。ああは見えても〈影〉はこの世界の者です)

それを聞き、〈いと小さき者〉は安堵した。

(そもそも存在の本質が全く違います。〈影〉は己の〈肉体(からだ)〉を探すという目的を持っていますが、クリルリには目的はありません。その証拠に、クリルリはこの世界を訪れて私を閉じ込めた後、最も大きな尖塔の中で一度も目覚めることなく深い眠りを貪(むさぼ)り続けているのです)

「では、キュカラパブロキ様は……」

〈いと小さき者〉は、輪の目と蛇腹の触手を持つ大いなる者に最も大きな物を目指すように言われたことを告げた。

(キュカラパブロキは、私の生み出した生命でありながら忌まわしくも巨大なクリルリの力に魅せられた愚かな子。きっとあなたを利用して、クリルリを深い眠りから呼び覚まそうと企んでいるのでしょう)

そもそもキュカラパブロキは大いなる者たちを繋げ、まとめ上げる役割を与えられていた。そのための知恵は与えられたが体は小さく、限られた力しか持っていなかった。長い時の間でキュカラパブロキはそれを不満に思うようになり、クリルリの大いなる力に惹かれるようになったのだ、とディアルレリオは語った。

(キュカラパブロキが外にいるとなれば、いっそ大胆に行動してみましょう)

ディアルレリオの口調はこの機会を待ち詫びていたかのような不敵な響きを持っていた。だが、〈いと小さき者〉にはディアルレリオが何を考えているのか皆目(かいもく)検討もつかなかった

。

（これから私は全ての力を使い、その二つの生命と共にあなたを再び水面へと戻します）

〈いと小さき者〉が訊(たず)ねるより早く、ディアルレリオは寄り集まった全ての泡を激しく震わせ始めた。その振動は小さき尖塔に留まらず、リューレ全体へと伝わっていった。

「こ、これではクリルリも起こしてしまうのでは？」

慌てふためく〈いと小さき者〉とその手の内にある二つの生命を、ディアルレリオは薄紅色(うすべにいろ)の泡の一つで包み込んだ。

（リューレはクリルリの目覚めに応じてその殻を開くのです。しかし心配は無用。この程度の刺激でクリルリが完全に目覚めることはありません。おそらく、ちょうどよく私たちが通れるだけの隙間が生まれるはず）

そう言って、〈いと小さき者〉を内包したままディアルレリオは目にも留まらぬ勢いで小さな尖塔から出で、リューレの出口を目指して直進した。薄紅色の泡の中で〈いと小さき者〉が振り返ると、あれほど静まり返っていた尖塔群(ぐん)が振動に呼応してそれぞれの扉から軍勢がわらわらと現れた。

「あれは……」

黒き軍勢の相貌(そうぼう)を一目見て、〈いと小さき者〉は言葉を失った。鱗(うろこ)と鰭(ひれ)と鰓(えら)に加え、四肢を持つ異形(いぎょう)が群(むれ)をなし、怒濤(どとう)のように押し寄せて来たのである。

（あれなるは深(ふか)き者(もの)ども。醜(みにく)く忌まわしいクリルリの走狗(そうく)です）

ディアルレリオの言葉を聞き、〈いと小さき者〉は恐ろしさに蒼然(そうぜん)とするとともに言い表しようのない不安を覚えた。なぜかといえば、醜く忌まわしいと形容された深き者どもの姿は、〈いと小さき者〉自身に近しいものだったからである。ディアルレリオに〈いと小さき者〉の動揺を気にかける余裕はなかった。薄紅色の泡沫は、四分の一ほど開いた二枚貝の口から脱出し、そのまま深く濃い瀬流を駆け昇った。

それを追う深き者どもの先頭に、怒りに染まったキュカラパブロキが立ち、その左右には番(つが)いらしき二頭の一層巨大な深き者が付き従っていた。黒き軍勢の追撃は凄まじく、瀬流の半ばを過ぎるところで泡沫群の最後尾を捉(とら)えた。ディアルレリオはその部分を切り離すと、面状に広げて深き者どもを押し包んだ。足止めされつつも、深き者どもは追う手を緩めず、同様のやり取りが幾度(いくたび)かに亘(わた)って繰り返された。

その応酬(おうしゅう)の最中(さなか)、〈いと小さき者〉は横目で未だ硬直したままのバルンベを見た。アクラハザの穏やかな側へと着いた頃には、ディアルレリオを形作っていた薄紅色の泡沫は数えられるほどしか残ってはいなかった。ディアルレリオはアクラハザの口腔(こうこう)を通りながら、わずかな泡沫を〈いと小さき者〉を包む一つへとまとめ、浅く淡い激流に出るや我が身を破裂させた。その勢いは、定まらない乱流を上方へと向かう一本の大きな流れに変じさせて浅く淡い激流を二つに裂いた。

激動たる流れの中、〈いと小さき者〉は二つの生命を決して離すまいと、あらん限りの力で抱き締めた。水面を突き破り、煌(きら)めく太陽光の元に飛び出した〈いと小さき者〉の胎内には、

二つの生命がしっかりと宿っていたのであった。

インター（3）

奈倉(なぐら)凜子(りんこ)と穴生(あのう)沙輝(さき)は早朝の屋上で対峙(たいじ)した。

「よく来たね、沙輝！」

フェンスの上から言い放ち、奈倉は竹刀(しなひ)の先を穴生に向ける。

「リンリン、危ないから下りてきた方がいいよー」

落ち着いた口調で言う穴生も竹刀を持っているが、こちらは袋に入れられている。

「こら、いきなり水差すな！ あたしたちは永遠(えいえん)のライバルなんだぞ！」

「はいはい。どっちが上かはっきりさせるんだよね」

「ああ。中学卒業までに決着をつける！予定だったけど、その予定は変わってしまった！」

「うんうん。お師匠様が気まぐれで変なことを言い出したんだよね」

「その通り。こないだ昼寝から起きたばかりの寝ぼけ眼(まなこ)で師匠が言った！ あたしかあんなのどちらかに剣の奥義(おうぎ)を授けてやろうと！」

「そうそう。今度の秋季(しゅうき)大会で優勝した方が教えてもらえるんだよね」

「そうだ。だからあたしは宣戦布告する！ 今度の大会、あんたを倒してあたしが優勝するから！」

「わかったわかった。受けて立つよー。今日で五回目の早朝宣戦布告お疲れ様ー。そろそろ下りてきなよー」

「うん！」

奈倉はにっこりと笑ってフェンスから跳(と)び、くるりと回ってアスファルトに着地した。

「じゃあ、朝稽古(あさげいこ)しましょうか」

穴生は静かに微笑み、袋から竹刀を取り出した。

二人の少女は制服姿のまま向かい合い、深く一礼して構えを取った。

パンッー竹刀が交(まじ)わる乾いた音が朝の澄(す)んだ空気を震(ふる)わせる。

穴生が言った通り、このやり取りは今日で五回を数えていた。おそろう二人が師匠に奥義伝授の話をした翌日からなのだろう。

奈倉凜子と穴生沙輝は幼なじみである。同じ日に同じ病院で生まれ、そこから本当の姉妹のように暮らしてきたそう。

奈倉は運動神経が抜群(ばつぐん)で男勝りの活発な性格。

穴生は穏やかだがしっかりと芯(しん)の通った性格。

対照的なこの二人は、ほんの一年前までは竹刀を振るところか握ったこともなかった。

これはあくまで噂だが、奈倉凜子と穴生沙輝は市(まち)外れの森で天狗(てんぐ)に剣法(けんぼう)を習っているらしい。

どうやら女の天狗で、基本的にはぐうたらしているが剣を取ると達人に変貌(へんぼう)するそう。

それが剣法の強い人間なのか、それとも本当の天狗なのかはわからない。

正体どころか、二人を除けばその姿すら見た者はいない。

しかし、確実なことは一つある。

たった一年で奈倉と穴生は驚くほど剣を上達させたという事実だけは揺るがしやがないのである。

春に二人の入部の申し込みを受けた剣道部は騒然となった。

三年生が、それも段(だん)どころか級位(きゅうい)すら持っていない素人(しろうと)が入部したいなどと、弱小の部活をからかっているのだろうとしか思えなかったからだ。

だが、直後に見せた剣技の冴(さ)えを目の当たりにして評価は一変する。力強さと柔軟さを兼ね備えた奈倉の剣。水面(みなも)のように静かで相手を引き込む穴生の剣。どちらも一般的な剣道とはかけ離れていたが、その技は見た者の心を揺り動かすものだった。

晴れて剣道部員となった二人は無位無段のまま試合に出場し、めざましい活躍を見せていた。そして今度の秋季大会が、二人にとって初めての大きな舞台となるのである。

はじめ緩(ゆる)やかに交わされていた剣撃(けんげき)が徐々に速さを増していく。

奈倉が攻め、穴生が受ける。火の構えからの上段を水の構えを保ったまま足運びでかわして胴を狙う。相手の左腹への逆胴。思い切り踏み込んだはずの奈倉の体が跳(は)ね返るように後ろに飛ぶ。穴生の横薙(な)ぎが空を搔(か)いた。いや、搔かない。穴生の竹刀は弧(こ)を描く運動からかくりと直線運動に切り替わる。突きに変化した。それも手先だけの技でなく、しっかりとした威力のある突き。まるでフェンシングのようだ。奈倉はそれを下から弾(はじ)き上げてそのまま上段から振り下ろす。穴生はなぜかそれに反応しない。左手側に竹刀を構えた。奈倉の上段が穴生の頭に届いた——かと思うと搔き消える。パシン。音がしたのは穴生の構えた場所。奈倉の袈裟懸(けさが)けの一撃を抑えている。剣筋の変化ではなく、剣筋が二本あるように見えた。正(まさ)しく天狗の剣法だ。受ける穴生の体が微(かす)かに沈んだ。どん。なぜか奈倉が後ろに弾かれる。

「む……」

下がりながら小さく呻(うめ)く奈倉。驚くとまではいかないが意外そうな顔。穴生の上段が迫る。奈倉はコンパクトに体勢を整えて突きで迎え撃つ。

穴生の剣は奈倉の額の手前で。奈倉の剣は穴生の鼻先でそれぞれ止まった。

「……また引き分けね」

穴生は緊張した顔を崩して剣を下げる。

最初の宣戦布告から五日連続の引き分け。それだけ二人の実力が伯仲(はくちゅう)しているということだった。

奈倉は懔然(ぶぜん)として剣を突き出したままだった。引き分けが気に食わないのだろうか。

「何で手え抜いたんだよ沙輝！ どうして最後に上段なんだ。突いてくれればあんたの方が早かっただろ？」

「手抜きなんてしてない。ただの判断ミスだよ」

「そんな嘘が通用すると思ってんの？ 何、あたしを馬鹿にしてんの？」

「馬鹿になんてしてないってば」

困った様子の穴生を見て、奈倉は怒り心頭の顔をする。何かを言おうとするが、ぐっと拳を握ってこらえた。

「.....あたし、秋季大会まであんたとは仕合わない。部活も休んで特訓するから」

「ちょ、何ってんのリンリン？」

「あたしはマジだよ！ マジでマジのあんたと戦って、そして勝ちたい」

生まれてからずっと一緒に過ごしてきた相手の真摯(しんし)な瞳(ひとみ)に、穴生はさらに戸惑った様子を見せる。

「部活にも行かないから、みんなにはよろしく言っというて。じゃあね」

踵を返して屋上から立ち去る奈倉を見送り、穴生はため息をついた。

「じゃあね、って。私たち同じクラスじゃない」

冗談めかした独(ひと)り言を口にするが、その顔は晴れない。

「困ったことになっちゃったな」

握った竹刀を見つめて苦笑する。

穴生沙輝はまだ、奈倉凜子の本気を受け止める気構えができていないようだった。

かくして黒き水は二つに分かれた、〈世界(ロカ・ダアツ)〉に再び大地が還(かえ)ってきた。黒き水の生命(いのち)の多くが〈いと小(ちい)さき者(もの)〉と共に新生した大地に打ち上げられた。黒き水の生命は降り注(そそ)ぐ太陽光(たいようこう)を浴び、かつて大地に棲(す)まっていた多くの獣たちへと姿を変えた。また黒き水は大海(たいかい)と名を変え、そこに残った生命は魚(うお)と呼ばれるようになった。

あらゆる獣と魚を見守る存在となった〈いと小さき者〉は、大地と大海とを往還(おうかん)する中で、胎内に宿した二つの生命を産み落とした。〈いと小さき者〉の内にて太陽光と太陰光(たいいんこう)が重なって生まれた二つの生命は、一柱(ひとり)はヒシコグという男で、もう一柱はヒワメルという女だった。男女は獣や魚たちに〈真人(しんじん)〉と崇められ、〈いと小さき者〉が滅びを迎えた後、ヒシコグは大地の、ヒワメルは大海の管理者となった。

表裏(ひょうり)の存在であるヒシコグとヒワメルは交互に眠った。ヒシコグが起きている間を昼(ひる)、ヒワメルが起きている間を夜(よる)とし、昼と夜が一巡(めぐ)りする間を一日と定めた。ヒシコグとヒワメルは千日に一度だけ逢瀬(おうせ)を設(もう)け、その度に千の子を成(な)した。そうして産まれた千の子を獣と魚たちから選び出した千の子と娶(めあ)わせ、その夫婦はさらに千の子を産んだ。同じ営みが幾度(いくたび)にも亘(わた)って繰り返され、そうして産まれた子同士がさらに交わって新たな生命を紡(つむ)ぎ出していった。

はじめは雑多な姿形をしていた新たな生命たちは、継(けい)を経(へ)る内に定まった容貌(ようぼう)をとるようになった。ヒシコグとヒワメルは、〈真人〉と獣魚(じゅうぎょ)の間にあるものとして彼らを〈人間(にんげん)〉と名付けた。二柱(ふたり)の〈真人〉のような大いなる力はおろか獣や魚としての力すらも持ち合わせない〈人間〉に、ヒシコグとヒワメルは尽きることのない好奇心を授けた。

一方で、ヒシコグとヒワメルは〈人間〉らの暮らす場を大地のみに限った。ディアルレリオに守られ、〈いと小さき者〉に育まれた〈真人〉は大海の底に眠る深(ふか)き者(もの)どもの存在とその恐ろしさを記憶しており、力はないが好奇心旺盛(おうせい)な〈人間〉が彼らを刺激しないように、と考えたのである。〈人間〉はその戒(いまし)めをよく守り、授けられた好奇心を広がる大地にのみ向けた。

時が移(うつ)ろい、二柱の〈真人〉は太陽と太陰それぞれに昼夜の運行を引き継(つ)いで滅びを迎えたのと同じ頃、好奇心溢れる〈人間〉の中から光に興味を示す者たちが現れていた。彼らは長い時をかけて自らの手で光を生み出す術(すべ)を考案した。〈人間〉はその術を火(ひ)と呼んだ。

火の発明により〈人間〉の暮らしはそれまでとは比べ物にならないほど豊かなものとなった。〈人間〉は夜を昼のように照らし、大地の至る所に集落を作り、それらを繋(つな)ぐ道を切り拓(ひら)いた。そうして〈人間〉はか弱き力を補(おぎな)って余りある文明を手に入れたのである。文

明はより大きな火を引き出し、〈人間〉の営みは絶頂期を迎えた。

広大無辺と思われた大地のあらゆる場所を踏破(とうは)し、己(おの)が領土とした〈人間〉だったが、その好奇心は満ち足りるところかさらなる飢餓に突き動かされた。より一層の利便を追求した〈人間〉は、火に個として自立する意思を与えたのである。これは本来罪なきものであった好奇心が犯した最初にして最大の罪だった。

はじめ従順だった〈意思(いし)ある炎(ほのお)〉は、生み出されて十数年経(た)ったある日、おもむろに〈人間〉への反乱を起こした。文明の礎(いしずえ)たる火の全てを掌中(しょうちゅう)にしていた〈意思ある炎〉の侵攻は苛烈(かれつ)を極め、文明を根底から覆(くつがえ)された〈人間〉の領土は瞬(またた)く間に炎に包まれていった。大海の魚たちに助力を求め、ようやく〈人間〉が火の勢力に拮抗(きっこう)できた頃には大地の半(なか)ばまでが〈意思ある炎〉の版図(はんと)となっていたのである。

激烈でありながら狡猾(こうかつ)さも兼ね備えていた〈意思ある炎〉は、支配下に置いた領土の〈人間〉を根こそぎに滅ぼそうとはしなかった。〈炎〉は集落をちょうど百だけ選んで残すと、そこに住まう〈人間〉の手足に鉄の枷(かせ)と鎖(くさり)の軛(くびき)を与えた。また、百の内から十の集落を選んでそれぞれに祭火殿(さいかでん)を建造させ、己の存在の根元たる火を絶やさずことなく燃やし続けるよう申しつけた。

辛(から)くも火の侵攻から逃れた〈人間〉たちは、〈意思ある炎〉のものとなった領土にそういった同胞(はらから)がいるということに薄々感づきながら助けようとする素振りすら見せなかった。それどころか中には彼らに〈火の民〉という蔑称(べっしょう)を与え、裏切り者扱いをする者すらいたのである。

敵(てき)する者のない〈意思ある炎〉の支配は、百万の昼夜を経ても揺らぐことがなかった。火を絶やさぬ役目に従事しながら細々と暮らす〈火の民〉には一切の希望がなく、ときに〈炎〉とその下僕の戯れにより生命を弄(もてあそ)ばれた。

暴虐と隷属にその生を染め上げられた〈火の民〉たちだったが、親から子へ細々と引き継がれるその生命は、埃(ほこり)が積もるように少しずつであるが着実に火に抵抗する力を育(はぐく)んでいった。

その兆候が見られたのは、十ある祭火殿の一つに奉仕するとある集落の者たちだった。〈意思ある炎〉は彼らの火への耐性を善(よ)きものとし、ものの試しといった程度の思いつきで、火を祭る他の集落の者と交わるように強制した。〈火の民〉たちの反逆心は諦念(ていねん)に押し流されつつあり、火への耐性もそもそも支配への順応でしかなかった。それが大きな力となり、〈意思ある炎〉の支配を離れることになるのは、皮肉にも〈炎〉自身が〈人間〉に反旗を翻(ひるがえ)したときと同じ構造をしていた。これが世界の第三季(き)である。

※ ※ ※

「光溢れる世界すらも、これほどまでの試練(しれん)となるのか」

〈意思ある炎〉と〈人間〉の領土を分かち大溪谷(だいけいこく)に佇む者があった。その輪郭(りん

かく)は〈人間〉のものだったがそこに実体はなく、輪郭の内側には判然としない淡(あわ)い黒が充満し、揺らめいていた。

「〈人間〉の中になら、私の〈肉体(からだ)〉も見つけることができると思ったのだから……」

そう寂(さび)しげに呟くのは、かつて〈いと小さき者〉に太陰光を託して姿を消した〈影(かげ)〉だった。

「今はまだ、そのときではないか」

〈影〉は〈人間〉の領土側から、溪谷の彼岸にて天を衝(つ)かんばかりに立ち昇る炎の壁を眺(なが)めた。

「しかし、次なる変化が起きる兆(きざ)しはある。焦らずもうしばらく待つとするか」

炎の壁の向こう側に世界にとっての希望となる者が現れつつあることを見た〈影〉は、揺らめく黒色の顔を微笑ませるように歪(ゆが)め、振り返るや三度世界から姿を消した。

それを見た者は、誰もいなかった。

2

〈意思(いし)ある炎(ほのお)〉はその座する主祭殿(しゅさいでん)を十万日ごとに遷(うつ)すことと定めていた。百万の日を経て十の祭火殿を一巡りし、〈炎〉は最初に主祭殿となったヴェニへと戻ってきていた。火の領土で最も西方にある集落であるそのヴェニから、世界に次なる変化をもたらす者が現れることとなる。

ある夜、ヴェニの祭壇(さいだん)にて闇を掻き消さんばかりの輝きと熱を放つ〈意思ある炎〉の元を、二人の少女が訪ねようとしていた。

「やっぱりやめようよ。ねえ」

「何言ってるのよ。言い出しっぺはあんたでしょ。あんたが『〈意思ある炎〉様ってどんな御姿をなさってるのかしら』なんて言うからこうして連れて来てやったんじゃない」

二人の少女の会話は、鎮座(ちんざ)する〈意思ある炎〉にも届いていた。戯(たわむ)れるように残酷(ざんぎゃく)な行いを為す〈意思ある炎〉だったが、このときは不思議なほど平穏な心持ちで少女たちのやり取りも他愛もないことだと聞き流していた。それどころか、むしろ心地よい調べとして無形(むけい)の耳朶(じだ)を傾(かたむ)けていたのは、〈炎〉が〈人間〉の手から離れ、長く己の王国を維持し続けてきたことに倦(う)み始めていたからに他ならなかった。

〈意思ある炎〉は一言も発さず、祭壇の下にやって来た少女たちを眺めた。一人は褐色(かつしよく)の引き締まった肌に黒い髪。もう一人は透(す)き通るような白い肌とそれに見合わぬ長い赤髪(あかがみ)を腰まで伸ばしていた。

「へえ、これが〈意思ある炎〉様ねえ」

褐色の少女が大きくつぶらな瞳を開き、燃え盛る〈意思ある炎〉を仰(あお)ぎ見た。

「だめよ、シャルナーグ。〈意思ある炎〉様を真っ直ぐ見つめるだなんて、罰が当たって目が潰(つぶ)れてしまうわ」

赤髪の少女が諫(いさ)めると、シャルナーグは肩を竦(すく)めておどけた。

「大丈夫よ、アノウエナ。ほら見てごらん。とっても綺麗なんだから」

シャルナーグがそう言うと、アノウエナは頑(かたく)なに俯(うつむ)かせていた顔をゆっくりと上げた。

「.....ほんとね」

アノウエナは感嘆するあまり深いため息をこぼした。ここに来たそもそものきっかけは乳飲(ちの)み子の頃からの友人であるシャルナーグとの会話の中で、アノウエナが〈意思ある炎〉に興味を抱いていることを漏らしたからだった。ヴェニの祭火司(さいかし)の娘でもあるシャルナーグは、友のためにと思案を巡らせ、夜半にこっそりと祭壇を訪れる算段を立てたのである。

「ありがとう、シャルナーグ」

アノウエナの薄い唇(くちびる)がたおやかに礼の言葉を紡(つむ)ぐのを見て、シャルナーグは息を呑むような思いに駆られた。

「どういたしまして、さ」

快活に答えるシャルナーグの褐色の肌は〈意思ある炎〉の火に照らされ、赤い宝石のように輝いた。それを見たアノウエナの心もまた感動で打ち震えていた。

「.....さあ、帰りましょう」

足早にその場を離れようとするアノウエナの腕をシャルナーグが掴む。二人の手首にはめられた鉄の枷(かせ)がぶつかり合い、耳障(みみざわ)りな音を立てた。

「何言ってるのさ。こんなに近くまで来る機会なんて二度とないんだよ。ねえ、ちょっと触れてみようよ」

シャルナーグはいたずらっぽく笑った。

「い、いけないわ。そんな畏(おそ)れ多いことできるわけじゃない」

そう言いながらも、アノウエナの理性は友の言葉の魅力には勝てなかった。かつて二柱(ふたり)の〈真人(しんじん)〉が〈人間〉に与えたもうた罪深き好奇心は〈火の民〉である彼女にも宿っていたのである。

「せえの、で触れるよ。いいね」

「う、うん」

シャルナーグは右手を、アノウエナは左手を掲(かか)げ、それぞれの掌(てのひら)を〈意思ある炎〉へと近付けた。

〈意思ある炎〉は静かにそれを見つめ続けていた。〈人間〉の手から独立して以来、滅びと支配しかもたらさなかった己に、望んで近付こうとする者などいなかった。まして直接触れるという不遜(ふそん)な行為を取るなど、己の威厳(いげん)が揺らいでいるとしか思えなかった。ヴェニに遷る前ならば一睨(にら)みで灰と塵(ちり)にするとところだが、今の〈意思ある炎〉にはなぜかそれができなかった。それどころか、〈炎〉は少女たちに触れられることを望んでさえいたのである。

そして褐色の右手と白い左手が揺らめく火に触れた。ただの〈人間〉ならば瞬時に炭に変わる熱量も、〈火の民〉である少女たちには湯(ゆ)ほどの熱さも感じさせなかった。

「……暖かいね」

アノウエナがぼつりと呟くのを耳にし、シャルナーグは微笑みながら頷いた。暖かみは二人の少女が感じただけでなく、同時に〈意思ある炎〉も少女たちから伝わる不思議な熱を感じ取っていた。

（これは、何だ……）

〈意思ある炎〉はこれまで感じたことのない熱の正体を少女たちに訊ねようとした。そのとき、燃え盛る体の中心でより一層の熱を持つ何かが弾けた。それは〈意思ある炎〉の火種ともいうべき存在の根元だった。火種は幾つかの〈火精(かせい)〉を吐き出し、その内二つが糸で手繰(たぐ)られるようにシャルナーグの右腕とアノウエナの左腕に入り込んだ。

二人は叫び声を上げる間もなく〈意思ある炎〉の前から吹き飛ばされた。右腕に広がる燃えるような痛みに耐えながら顔を上げたシャルナーグの瞳に〈意思ある炎〉が変貌(へんぼう)する様が映った。〈炎〉は、まずその体を大きく振(よじ)らせ、幾筋かの亀裂を走らせた。それはまるで〈人間〉の顔のようで、苦痛にうめく表情が憤怒(ふんぬ)に移り変わった瞬間、〈意思ある炎〉は夜空へとその身を立ち昇らせた。

天を衝(つ)くかと思うほどの火柱が静止し、両側から一对の巨大な腕が伸びた。〈意志ある炎〉に浮かんだ顔が夜気をつんざくような咆哮(ほうこう)を上げるや、燃える両腕から紅蓮(ぐれん)の波が放たれた。波の行く手には深眠(しんみん)に浸(ひた)るヴェニの集落が広がっていた。

「……いや、いやよ、そんなの！」

アノウエナは反狂乱になって集落へと駆け出そうとした。同じ惨状(さんじょう)を呆然と眺めていたシャルナーグは反射的にアノウエナにしがみついた。

「だめだ、アノウエナ。行っちゃいけない！」

「どうして止めるの？ 離してよ」

アノウエナは振りほどこうともがいたが、シャルナーグは決して友を離そうとはしなかった。

「もう……もう遅い。ヴェニは……」

巨人と化した〈意志ある炎〉が放つ火の波はいかなる耐性も意味を成さないほど強く激しかった。それでも集落を目指そうとするアノウエナをシャルナーグは無理矢理に押し倒した。その音を耳にした怒れる巨人はもつれ合う二人の少女へと掌を翳(かざ)して紅蓮の波で諸共に押し流すと、悲しげな声を漏らしながら昇りつつあった太陽に向けてゆっくりと歩き出すのだった。

3

〈意思(いし)ある炎(ほのお)〉が去った後も紅蓮(ぐれん)の波は弱まる気配もなくヴェニの在った地を焼き続けた。三日三晩経ち、燃えるものが一切なくなってしまうや火勢は収まった。辺り一面が黒く焦げた大地の上に二人の少女が立ち尽くしていた。それは紅蓮の波を受けて消し炭(ずみ)になったはずのシャルナーグとアノウエナだった。

「私たち、どうして滅んでいないの？」

愕然(がくぜん)と呟くアノウエナの白い肌には火傷(やけど)一つなく、身に着けていた物や赤い

髪に焦(こ)げたような痕跡(こんせき)すらなかった。

「……あたしにもわからないよ」

傍(かたわ)らに佇(たたず)むシャルナーグも同様だった。シャルナーグの記憶は紅蓮の波が押し寄せてきたところまでで途切れていた。目を覚ましたときには炎に撒(ま)き上げられた土砂の下にアノウエナと共に埋まっていたのである。

「わからない。けれど、もしかしたら……」

シャルナーグが右手を広げて天に掲(かか)げると、その掌(てのひら)から一筋の火柱が噴(ふ)き上がった。

「シャル、それは……」

驚きつつ、アノウエナは自分の左腕が疼(うず)いていることに気が付いた。火柱が消えると、シャルナーグは睨むようにアノウエナを見た。

「きっと、あんたもだよ」

うろたえながら翳(かざ)したアノウエナの左手からも火柱が迸(ほとばし)った。

「もしかして、私たちが助かったのはこの力のせい？」

「そうなんだろうさ……忌々しいね」

シャルナーグが顔を歪(ゆが)ませたのは、その力が〈意思ある炎〉から与えられたものであることを感じ取っていたからである。〈炎〉の火種(ひだね)から吐き出された〈火精(かせい)〉は二人の少女の体深くにしっかりと根付いていた。

「これからどうすれば……」

心身ともに精根(せいこん)尽き果て、アノウエナは焦げた大地に膝を着いた。シャルナーグは表情に怒りの色を浮かばせると、力任せにアノウエナの頬(ほお)をはたいた。

「な、何するの？」

「どうすれば、だって？ ふざけないでよ」

頬に痛みが広がるとともに、アノウエナにも怒りがこみ上げてきた。

「私のせいにするの？ 言い出したのは確かに私だけど、無理矢理連れ出したのはあなたじゃない」

アノウエナは立ち上がり様(ざま)にシャルナーグの頬をはたき返した。日頃は絶えず穏やかだったアノウエナの反撃は、シャルナーグを少なからず動揺させると同時に一つの決意をも促(うなが)した。シャルナーグは眼差(まなざ)しを引き締め、〈火精〉が宿る右手でアノウエナの左手首の枷(かせ)を掴んだ。

「これは、あたしだけの罪じゃない。あんただけの罪でもない。わかるね」

瞳に満ちた決意はアノウエナにも伝わった。

「……ええ、そうね。これはあたしたち二人の罪」

アノウエナはそう言うと、左手でシャルナーグの鉄の枷を掴み返し、火の力を発して溶かした。シャルナーグも同じことをした。お互いを両手足の軛(くびき)から解き放った二人は、〈意思ある炎〉を滅ぼすことを固く誓(ちか)うのだった。

溶かした鉄鎖(てっさ)から作った鉄の杖を携(たずさ)え、二人の少女は〈意思ある炎〉の足跡を辿(たど)って歩き出した。ただ後を追うのではなく、二人の少女は途上にある集落に立ち寄り、虐(しいた)げられし〈火の民〉たちを解放しようと考えた。

祭火殿(さいかでん)を持たない九十の集落それぞれに〈意思ある炎〉が放った下僕(げぼく)がいた。下僕たちは火の領土に棲む獣に小さな〈火精〉を与えて作り出されていた。シャルナーグとアノウエナはいわば同じ境遇(きょうぐう)の生命と対峙し、これを打ち倒して多くの〈火の民〉たちを鉄鎖の軛から自由にした。

下僕たちとの戦いの中でシャルナーグとアノウエナは各々の力の特徴や細かい差異を理解していった。火の力に限ればアノウエナが勝っていたが、シャルナーグはそれを操る術に長けており、逞(たくま)しい肉体から発揮される体術と組み合わせることにより凶暴な〈意思ある炎〉の下僕を圧倒した。

一方、アノウエナは下僕を即座に焼き尽くすほどの強大な火を持っていたものの、それをうまく制御することができなかった。そのため戦いにおいてはシャルナーグが主導して下僕を足止めし、アノウエナの火でとどめを刺すという連携(れんけい)を取るようになっていた。

解放された〈火の民〉たちは自分たちの指導者になってくれるよう二人の少女に懇願(こんがん)した。アノウエナは及(およ)び腰(ごし)になったが、シャルナーグは迷うことなく〈意思ある炎〉を討(う)つ軍勢として〈火の民〉を率いることを快諾(かいだく)し、彼らが繋がれていた鉄の枷と鎖を武器へと作り変えて再度手渡した。

百人を超える兵を得たシャルナーグであったが、行動には慎重を期(き)した。無策(むさく)のまま〈炎〉に挑むのではなく、まずは火の領土における要衝(ようしょう)である各地の祭火殿を落とそうと考えたのである。

祭火殿の一つへと出奔する前夜、自室で猛(たけ)る気持ちを落ち着かせていたシャルナーグの元を訪(おと)なう者があった。

「アノウエナ？」

シャルナーグが思わず声を裏返らせたのは、唐突に現れたアノウエナが旅装(りょそう)を整えていたからである。

「どうしたんだい？ 出発は夜明けだ。まだしばらくあるよ」

冗談めかしながら、シャルナーグは自分の声が震えていることに気が付いた。

「……私、あなたたちと一緒にには行けない」

アノウエナは静かに、そしてはっきりとした意志を込めて言った。

「私は、自分の力が怖い。思うままにならないこの火の力が、とても怖い」

「一体どういうことなのさ。あんたまさか、ここまで来て逃げるつもり？」

シャルナーグはアノウエナに歩み寄り、肩を強く掴んだ。

「違うわ。それは違う」

アノウエナは首を横に振って否定した。

「じゃあ、どうして一緒に行けないだなんて言うのさ？ あたしたちはあの日――〈意思ある炎〉に滅ぼされたヴェニを見た日に復讐(ふくしゅう)を誓い合ったじゃないか！」

アノウエナの決断が逃避ではないことを、シャルナーグはよくわかっていた。わかってはいたものの、言葉を荒げて責めずにはいられなかった。戸惑い、激昂(げっこう)するシャルナーグの言葉の全てをアノウエナは黙って受け止めた。ようやくシャルナーグが吐き出す言葉を失うと、アノウエナは口を開いた。

「シャル、私はあなたを尊敬しているのよ。あなたはとってもすごいわ。だって、〈意思ある炎〉に逆らうなんて、何百年もの間誰も考えようとしなかったことだもの。あなたはそれを成そうとしている」

「そんなことない、あんただって……」

アノウエナの決意が強まり、揺るぎがなくなるのと比例して、シャルナーグの声は小さくなった。

「いいえ、私は何もしていないのと同じよ。力を恐れてばかりで、あなたに頼り切ってしまっていた。同じ誓いを立てたのに、あたしや他の人たちのことを考えて行動するあなたとは逆に、あたしは自分のことしか考えていなかったのよ」

アノウエナはそこで言葉を区切り、深く息を吸い込んだ。

「……あたしも、あなたやみんなのために何かをしたいのよ」

「何かって、何よ？」

「ここから少し南に行ったところにあるジェンカユ火山の麓(ふもと)に、不思議な武器を作る鍛冶(かじ)がいるそうなの」

解放した〈火の民〉からもたらされたその話はシャルナーグも耳にしていた。その鍛冶はとても偏屈(へんくつ)だが腕は良く、作り出した道具は〈意思ある炎〉の火ですら断ち切るのだという。

「あたしはその人のところに行って、〈意思ある炎〉を倒すことのできる武器を作ってもらおうと思ってるの」

アノウエナの言葉は、シャルナーグの指導者としての一面を十分に納得させるものだった。〈火の民〉たちに与えた鉄の武器では、〈意思ある炎〉の下僕を足止めする程度のことすらできていなかったのである。そもそもそれ以前に、いかに強力であるとはいえ〈意思ある炎〉の〈火精〉により身に着けたシャルナーグとアノウエナの火の力が〈炎〉自身に通じるのかどうかという疑問もあった。

「でも、でも……」

しかし、友としてアノウエナを慕(した)うシャルナーグの心は納得できないままだった。シャルナーグは、これまで己が〈火の民〉のため献身(けんしん)してこられたのは、穏やかなアノウエナがいつも傍(かたわ)らにいてくれたからだということを改めて悟った。

「大丈夫よ。すぐに戻ってくるわ」

困惑するシャルナーグの心を優しく包み込むようにアノウエナは笑った。シャルナーグが弱々しく頷くと、アノウエナは身を翻(ひるがえ)してその場から去っていった。

アノウエナは〈火の民〉の中から前以(もっ)て選び出していた十人の供(とも)を従(したが)え、夜明けを待たずに一路(いちろ)南のジェンカユ火山へと向かった。

ジェンカユ火山は山自体が大いなる者であり、〈意思(いし)ある炎(ほのお)〉でさえおいそれと手出しのできない強い加護で覆(おお)われたその麓には〈人間〉が現れる以前に生まれた半人半獣の者たちが住まっていた。そこへの道のりそのものには何の問題もなかったが、〈炎〉よりも古く、大地新生の折(おり)より存在するジェンカユ火山の周辺にはそこへ逃げ込もうとする者を捕らえるために多くの火の下僕(げぼく)が放たれていた。

わずか十日ばかりの行程で、従えていた〈火の民〉は次々その命を落としていった。ようようジェンカユ火山に辿(たど)り着いたときには一行はアノウエナを含めてたった四人にまで減っていた。疲弊(ひへい)した心身を引きずるようにジェンカユの集落で聞き込みを重ね、捜(さが)し求めている鍛冶(かじ)がボガラボスという名であることを突き止めると、アノウエナは駆け出すようにその工房へと向かった。

「何じゃと？」

ボガラボスは聞いていた通りの偏屈者(へんくつもの)で、甲虫(こうちゅう)のように硬質でずんぐりとした短軀(たんく)を怒(いか)らせながらアノウエナを睨(にら)みつけた。

「ふざけるな！ 先人(せんじん)たるわしらを醜(みにく)き獣人(じゅうじん)風情(ふぜい)とあざ笑ってきた〈人間〉に力を貸せだと？」

「ボガラボス殿、そこ曲げて何とぞお願いいたします。私たちには、〈意思ある炎〉を倒す力が必要なのです」

アノウエナは頭を深く下げたが、ボガラボスは聞く耳を持たなかった。

「はん！ 〈意思ある炎〉なんぞを作りおったときは何ちゅう愚かな連中だと鼻で笑ってやったもんじゃ。自分の尻(ケツ)は自分で濯(すす)ぐものと母親に教わらんかったのか？ もう一度言うぞ。わしには、〈人間〉なんぞのために振るってやる腕はないわい」

突(つ)っ慥(けんどん)に工房から追い出そうとするボガラボスに、アノウエナは追い縋(すが)った。

「では……では、この私めに火を断つ武器の鍛え方をお教えくださいまし」

ボガラボスは顔を赤黒く染め上げて激怒した。

「武器を鍛えるじゃと？ 莫迦(ばか)も休み休み言え。おまえのような女の細腕でできるようなものではないわ！」

「……できます。私には、腕力ではない力がありますから」

言うなりアノウエナは左腕の裾(すそ)を捲(めく)り、掌(てのひら)から火柱を上げてみせた。するとボガラボスは目を剥(む)き、腰を抜かさんばかりに驚いた。

「何と……〈火精(かせい)〉を宿しておるとは。それならそうと早く言わんか！」

何を思ったか、ボガラボスは態度を豹変(ひょうへん)させ、アノウエナの腕を引いて工房奥の窯(かま)へと連れ込んだ。

「どうしたのですか、ボガラボス殿？」

戸惑いながらアノウエナが訊ねると、ボガラボスは無言で顎(あご)をしゃくり、窯を見るよう促した。窯の中には真っ赤な火が揺らめいていた。鉄を溶かすほどの熱だったが、アノウエナは微かな違和感を覚えた。

「この火は弱まっている？ ……いいえ、老いているんだわ」

そう察すると同時に、アノウエナの脳裏にかつてこれと似たような火を見たという既視感(きしかん)が閃(ひらめ)いた。もう少しで思い出せそうなところで感心するボガラボスに肩を叩かれてしまい、アノウエナは既視感の正体は何だったかを思い出すことができなかった。

「その通り。この窯の火は、偉大なるジェンカユの御力を拝借して灯(とも)しておるものなのじゃ。この大地と時を同じくしてお生まれになったジェンカユとはいえその御力には限りがある。どれほど名工と賞賛されても火がなければ何もできぬ。この窯の火が途絶えたそのときは、このわしの命が終わるときということじゃ」

ボガラボスはごつごつとした手でアノウエナの左手を固く握った。

「そこで、おまえに頼みごとがある」

ボガラボスの手は整った形であるとはお世辞(せじ)にも言えなかった。しかしアノウエナは金属を鍛え続けるという一事(いちじ)にその生を捧げてきた老鍛冶に対して心底からの敬意を抱いた。

「頼みごと、とは？」

「偉大なるジェンカユのため、おまえの〈火精〉の力を分けてもらいたいのじゃ。頼む、この通り！」

懇願(こんがん)するように見上げるボガラボスに、アノウエナは頷き返した。

「おお、そうか！」

「けれど、その代わりに私の願いも聞いていただけますか？」

「わかったわかった。おまえに炎を断つ武器を鍛える方法を教えてやろう」

「私だけでなく、供の者にもご指南(しなん)をくださいますよう。それと、その後しばらく、我々にこの工房をお貸しいただきたいのですが」

「わはは！ おまえは図々(ずうずう)しい〈人間〉じゃのう。相(あい)わかった、全て言う通りにしてやるわい！」

ボガラボスの了承を得ると、アノウエナは早速右手を窯へと掲げた。掌から迸(ほとばし)る一筋の火柱が、窯の火へと吸い込まれていく。〈意思ある炎〉の下僕ならば骨も残さず滅ぼすことのできる火勢も、ジェンカユ火山との繋がりを持つ窯にとってはまだ物足りないようだった。

アノウエナは、今まで手に余る火を抑えてきた心の枷(かせ)を取り払い、赤髪(あかがみ)を輝かせながらありったけの火を送り込んだ。一心に火を見るアノウエナの頭の中に、取り返しのつかない過ちを犯した夜のことが浮かんできた。〈炎〉に興味を持ち、戒(いまし)めを破ってそれを見、そして触れた。その結果、故郷であるヴェニは滅び、〈火精〉を宿した自分たちだけが残された。

その苦々しい思い出の全てを薪(まき)に変え、火にくべて炭にしていまいたくなる衝動に駆られたが、アノウエナはそれを必死に耐えてその全てを受け止めようと努(つと)めた。いくら忌(い)まわしい力とはいえ、犯した過ちだとわかっているとはいえ、それはアノウエナ自身の選択の結果だということをここではっきりと悟ったのである。

過ちを消し去ることはできない。けれど繰り返さないようにすることはできる。アノウエナの心にふと、シャルナーグの姿が浮かんだ。その顔は悲嘆(ひたん)に暮れ、怒りに彩(いろど)られていた。そのような友の表情をアノウエナはこれまで見たことがなかった。深く暗い淵(ふち)に沈んでいくシャルナーグへとアノウエナは左手を伸ばした。

そこで、白昼夢(はくちゅうむ)から醒(さ)めたかのように現実(げんじ)に引き戻された。先ほどとは比べ物にならぬほどの活力(きりよく)に漲(みなぎ)る窯(かま)の火を見ながら、アノウエナは己(おのれ)に宿(よ)った〈火精(ひせい)〉の力の大半が窯へと流れ出てしまい、そしてそれが二度と戻って来ることはないことに気付いた。復讐(ふくしゅう)を遂げる術(すべ)を失ってしまったアノウエナであったが、しかしその心は奇妙(きせう)なくらい晴れ晴れとしており、一つのことを成し遂げた満足感(まんぞくかん)が広がっていた。

「ようやってくれた！」

ボガラボスは喜色(きしよく)を満面(まんめん)に浮かべ、アノウエナの肩(かた)を叩(たた)いた。

「窯(かま)だけでなくわしも生まれ変わった気分(きぶん)じゃわい。ようし、すぐに取りかかるぞ！」

「取りかかる、とは？」

「決まっておる。炎(えん)を断(た)つ武器(ぶき)の材料(そく)である金属(きんぞく)――〈水鋼(みはがね)〉を鍛(鍛)える準備(じゆんび)じゃ！」

ボガラボスはアノウエナの従者(じゆうしや)に命(いのち)じて必要な道具(どうぐ)を揃(そろ)えさせた。

「ほれ、おまえたちの持つ鉄(てつ)を渡(わた)せ」

「このような赤錆(さび)びた鉄(てつ)をどうすると？」

「材料(そく)は何(なん)でもいいんじゃ。錆(さび)びていようが朽(く)ちていようがな。要(よう)はそれをどう鍛(鍛)えるかじゃ」

ボガラボスはアノウエナが差し出した鉄(てつ)の杖(じやう)を鋏(はさみ)で掴(つか)んで取り上げると、燃(も)え盛(も)る窯(かま)の中(なかに)へと差し入れた。

「これを、〈古(ふる)き大地(だいち)の子(こ)〉イゾーンから賜(たまわ)った鉄床(てつど)と鎚(つち)で叩(たた)く」

ボガラボスは赤(あか)く色(いろ)を変(か)えた鉄(てつ)を叩(たた)き、形(かたち)を整(ととの)え、そしてまた窯(かま)へと戻(もど)すという工程(こうけい)を手際(てぎわ)で(て)ぎわ)良く幾度(いくど)も繰(くり)返(かえ)した。

「しまいに〈微睡(まどろ)む水瓶(みずがめ)〉ヨペナススミの祝福(しゅくふく)を受けた水(みづ)で冷(ひや)やして、仕上げ(しあげ)じゃ！」

噴(ふ)出した蒸気(じやうき)が工房(こうぷ)中に広(ひろ)がる。蒸気(じやうき)が消(き)え失(うしな)せたとき、ボガラボスは一振(ひと)りの刃(や)を掲(か)げ上げていた。透(と)き通(とお)るようなその刀身(とうしん)を一目(ひと)見(み)、アノウエナと従者(じゆうしや)たちは一斉(いつせい)に感嘆(かたん)のうめきを漏(も)らした。

「この〈水鋼(みはがね)の剣(けん)〉に断(た)てぬ火(ひ)はない。それがたとえ、〈意思(いし)ある炎(えん)〉であったとしてもな」

ボガラボスは〈水鋼(みはがね)の剣(けん)〉をアノウエナに渡(わた)すと、腰(こし)を叩(たた)きながら椅子(いす)に座(ま)った。

「鍛(鍛)え方は見(み)ての通り(とおり)じゃ。あとは自分(おのれ)たちでやれい。おおそうじゃ、裏(うら)に要(い)らん鉄(てつ)だの銅(どう)だのがある、それも使(つか)って構(かま)わんぞ」

「ありがとうございます」

アノウエナは礼(れい)を述べると、従者(じゆうしや)たちと窯(かま)に向(む)かい、休(やす)む間(かん)もなく次々(つぎつぎ)と〈水鋼(みはがね)の剣(けん)〉を鍛(鍛)えて上(あ)げていった。

シャルナーグは二百の軍勢を連れ、予定通り各地の祭火殿(さいかでん)へと出奔(しゅっぱん)していた。まず北西にあるツデトに向かったシャルナーグは、そこで驚くべきものを目の当たりにした。解放しようとしたツデトの〈火の民〉たちが武装し、有無を言わず襲いかかってきたのである。

数では勝(まさ)る反乱軍だったが、目を血走(ちばし)らせ、苦悶(くもん)の形相(ぎょうそう)で激しく抵抗するツデトの民たちを前にして浮き足立(だ)たざるを得なかった。シャルナーグはすぐさま天に向けて指示の火を放ち、混乱する反乱軍の体勢を立て直した。

「きさまたち、どういうつもりだ！」

シャルナーグはツデトの男を一人捕らえて詰問(きつもん)した。

「こうしなければ、妻と子どもを殺されてしまうんだ！」

「何だと？」

その男が語ったところによると、ヴェニから去った〈意思(いし)ある炎(ほのお)〉は、ツデトをはじめとする全ての祭火殿に知恵のある下僕(げぼく)を放ち、そこで奉仕する〈火の民〉から人質として女子どもを召し上げたのだという。連れ去られた者たちは、火の領地の東の最(さい)果(は)てに建造された〈陽炎宮(かげろうきゅう)〉に閉じ込められ、祭火殿の男たちはその無事と引き替えに反乱軍との戦いを強制させられていた。

「そんなこと、今すぐやめるんだ！」

シャルナーグは憤(いきどお)りのあまり声を張り上げた。

「あたしはおまえたちを解放するためにやって来たんだ。おまえたちの妻子もみな、必ず助けてやる。だから、だから……」

シャルナーグの悲痛な叫びを掻き消すかのように、抗うツデトの民の後ろから轟音(ごうおん)が上がり、これまで各地で倒してきた下僕とは比べ物にならぬほど巨大な蛇が鎌首をもたげた。

「ツデトの民よ、戦え。息絶(た)えるまで戦うのだ！」

そう号令し、火の舌を出し入れする大蛇(だいじゃ)に向けて、シャルナーグは駆け出した。

「きさま！」

シャルナーグが右手に火の力を生じさせるのを見た大蛇は、ツデトの民を呼び寄せて壁とした。〈火の民〉を傷つけることをためらい、シャルナーグは足を止めた。

「卑怯(ひきょう)な……」

シャルナーグが歯噛みし逡巡(しゅんじゅん)している間にも反乱軍の兵たちはツデトの民の刃に傷つけられていく。このままではツデトを解放するどころかアノウエナと共に助けてきた者たちをも失うことになる。シャルナーグは断腸の思いで意を決し、立ち上がるツデトの男たちに向けて火を放った。

瞬く間に消し炭となる男たちを血涙(けつるい)を流しながら踏み越え、シャルナーグは火の蛇に飛びかかった。止めどない憤怒(ふんぬ)によって右手の火が〈炎(ほのお)の剣(つるぎ)〉の形を取り

、大蛇を一刀の元に斬り伏せた。

そのときにシャルナーグが上げた雄叫(おたけ)びは勝利の歓喜によるものではなく、濯(すす)ぐことのできない罪業(ざいごう)を背負った深い哀切(あいせつ)の響きだった。

ツデトの件の後、シャルナーグは祭火殿への派兵を中止し、それ以外の集落の解放を進めつつ〈意思ある炎〉が待つ〈陽炎宮〉へと迫った。そこに至るまでの間にも各地の祭火殿の〈火の民〉が反乱軍鎮圧のために送り込まれた。シャルナーグはその都度(つど)彼らを殲滅(せんめつ)し、人知れずさらなる罪業を己が身に糊塗(こと)していった。

瞳(ひとみ)に暗い光を灯すようになったシャルナーグが率いる反乱軍にアノウエナが合流したのは、〈陽炎宮〉での最後の戦いの直前だった。

「よく間に合ってくれたね、アノウエナ」

二百本を超える数の〈水鋼(みはがね)の剣(つるぎ)〉を前にシャルナーグはアノウエナを労(ねぎら)った。アノウエナはシャルナーグの言葉に喜びを感じつつ、彼女が身に纏(まと)う空気が自分の知っているものではなくなっていることに気付いた。アノウエナが初めて目にするシャルナーグの〈炎の剣〉は、すでに濃い血の色に染め上げられていたのである。

友の内なる変容(へんよう)に気付きながら、アノウエナはいたわりの言葉をかけることができなかった。シャルナーグが背負った罪の少なくとも半分は本来ならば自分が被(かぶ)るものだったからだ。アノウエナは何も言わず、ただひたすらシャルナーグの歩まんとしている道に付き従って行こうと自らの心に誓った。

〈陽炎宮〉がよく見える小高い丘に、千人を超えるまでに膨れ上がった反乱軍が隊列を整えた。シャルナーグが深紅(しんく)の〈炎の剣〉を翳(かざ)すと、〈火の民〉は関(とき)の声を轟(とどろ)かせ、勇壮な鼓笛(こてき)の音とともに一斉に駆け出した。

シャルナーグとアノウエナは〈火の民〉たちを五人一組にさせ、それを率いる者に〈水鋼の剣〉を与えた。その二百組は〈陽炎宮〉から応戦に出た大小様々な火の下僕たちと真正面からぶつかり、宮殿に至る一本の道を開いた。

シャルナーグとアノウエナは十人余りの手勢とともにその血路を駆け抜けて〈陽炎宮〉へと突入した。待ち構えていた三つの頭を持つ巨鳥(きょちょう)を一気呵成(かせい)に斬り捨てると、手勢を人質の解放に向かわせ、二人だけで〈炎〉がいるという広間を目指した。

炎の回廊(かいろう)を越えたシャルナーグとアノウエナは、罪を犯したあの夜と同じ巨人の姿で玉座に腰を下ろす〈意思ある炎〉と対峙した。〈炎〉が立ち上がるのを待たず、シャルナーグは積もった憤怒を〈炎の剣〉に乗せて斬りかかった。多くの〈火の民〉の血を怨嗟(えんさ)と共に吸い上げた〈炎の剣〉の切っ先は、大いなる〈意思ある炎〉の四肢を裂くと同時に切り離したその火をも己(おの)が力と変えた。しかし、〈意思ある炎〉もすぐさま周囲に燃える火を取り込み、その身を復元する。

終わりのない闘争のようであったが、アノウエナの目にはそうは映らなかった。〈意思ある炎〉の力は確実に殺(そ)がれている。いや、広間に入った時点で〈炎〉がかつてほどの力を持っていないことをアノウエナは見抜いていた。くすみつつある〈炎〉を見て、アノウエナはボガラボス

の窯(かま)の衰(おとろ)えた火を思い出した。憎(にく)むべき〈意思ある炎〉も滅びを迎えつつあるという事実で動揺し、アノウエナはシャルナーグのように感情に任せて動けなかったのである。

アノウエナが挙動を取ったのはシャルナーグの異変を感知したときだった。〈意思ある炎〉の火を取り込み、右腕のみならず全身をも燃え上がらせていたシャルナーグは、褐色の肌を白熱させながら、なおも血塗られた〈炎の剣〉を振るった。その姿を見てシャルナーグが〈炎〉を超える脅威になりつつあるように思えたアノウエナは、〈水鋼の剣〉を鞘走(さやばし)らせて飛び出した。

「だめよ、シャルナーグ！」

アノウエナは〈意思ある炎〉とシャルナーグの間に入り、とどめを刺そうとする〈炎の剣〉を〈水鋼の剣〉で受け止めた。

「邪魔をするな！」

シャルナーグは怒り、全身から烈火(れっか)を迸(ほとばし)らせた。

「アノウエナ、そこをどいて！」

「いやよ！」

気圧(けお)されつつ、アノウエナは断固として動こうとはしなかった。

「どういうつもりなの。そいつはヴェニを――あたしたちの家族を滅ぼしたのよ？ その仇(かたき)を取るために、さんざ苦労してきたんじゃない。あたしは……あたしは罪もない〈火の民〉たちを……」

シャルナーグの抱く悲痛さはすでに自分とは共有できないほどだと悟り、アノウエナは胸を締め付けられるような思いに駆られた。

「……そうよ、あなたの言う通りだわ。でもそれはそもそも私たちの罪なのよ。私たちが〈意思ある炎〉に触れなければ〈火精(かせい)〉を宿すことも、ヴェニが滅ぼされることもなかった」

シャルナーグにとって受け入れることのできない理屈であると知りつつ、アノウエナはそれを口にした。

「……そうか。アノウエナ、あなた、そうなのね」

シャルナーグは伏(ふ)し目(め)がちに言った。

「何のこと？」

「あたしの目は節穴(ふしあな)じゃないってことよ。知ってるのよ、あんたが火の力を使えなくなってることをね」

感情を押し殺すような口調の問いかけに、アノウエナは黙って頷いた。

「あたしがこの力で人殺しをしている間に、あんたは力を捨ててたってことね。まんまと騙(だま)されちゃったわ」

シャルナーグは卑屈(ひくつ)な笑いを浮かべながら、同じ境遇であったはずの友を睨(ね)め上げた。

「違うわ、シャル……」

アノウエナが伸ばそうとした手を振り払い、シャルナーグは激昂した。

「何が違うっていうのよ。あんたはあたしを裏切った。あのときに立てた復讐(ふくしゅう)の誓いを破ったのよ！」

アノウエナは無二の友の思いを全てその身で受け止めた。それは、友に筆舌にし難(がた)い辛(つら)みに苛まれながらの戦いを押しつけた己に課した罰であった。

「……破ってなんていないわ」

アノウエナは身を翻(ひるがえ)すや〈水鋼の剣〉を振り上げ、火種しか残っていない〈意思ある炎〉を両断した。四散していく〈意思ある炎〉からシャルナーグへと向き直り、アノウエナは微笑んだ。

「あなたは、今でも私の大切な人よ」

その言葉を聞き、シャルナーグは我に返った。落ち着くとともに周囲の状況が見えてくる。〈意思ある炎〉が滅んだにも関わらず、辺りが煌々(こうこう)と照らされているのはなぜか。アノウエナの赤髪(あかがみ)と白い肌が反射している光の源は何か。それは全て己が身から噴き上がる火のためだということを、シャルナーグはようやく知った。

「あたし……あたし……」

もし〈意思ある炎〉にとどめを刺したのが自分だったらと考え、その恐ろしさのあまりシャルナーグは膝(ひざ)を着いて震えた。怒りに任せてその火の全てを取り込んでいたら、確かに〈炎〉を滅ぼすことはできただろう。だが、おそらくそのときはシャルナーグが第二の〈意思なる炎〉となっていたことは容易(ようい)に想像できた。

「アノウエナ……あんた、あたしを助けるために……」

愕然(がくぜん)とするシャルナーグにアノウエナが手を差し伸べたそのとき、〈陽炎宮〉の外から勝鬨(かちどき)が上がった。創造主である〈意思ある炎〉と共にその下僕たちも滅びたのである。

「さあ、立って。みんなが待っているわ。聞こえるでしょう？」

シャルナーグの耳に歓声が届いた。長い支配から真の自由を勝ち得た〈火の民〉たちが一様に唱えるのは、他ならぬシャルナーグの名であった。

「前にも言ったけどもう一度言わせて。あなたは偉大だわ。私なんかよりもずっと、ずっとね」

アノウエナの言葉を聞き、シャルナーグは目の前に輝かしい道が開けるのを幻視した。それは虐(しいた)げられし〈火の民〉を軛(くびき)から解き放った英雄が、彼らを統(す)べる者になるという道だった。しかしその輝きは、今のシャルナーグにとってあまりにも眩(まぶ)し過ぎた。

「アノウエナ！」

シャルナーグはおもむろにそう叫ぶと、覆い被さるようにアノウエナへと飛びかかった。床に倒れる瞬間、アノウエナはおかしな手応えを感じた。

「シャル……ナーグ？」

アノウエナが呆然と視線を泳がせると、手に持った〈水鋼の剣〉が友の腹に深々と突き刺さっていた。刀身の半ばまでが鍛えられた腹に潜り込み、その切っ先は背から飛び出していた。

「……悪いね。あたしには、ちょいとばかり荷が重いや」

シャルナーグは柄を握るアノウエナの左手に右手を重ねると、心の底から済まなさそうにそう言った。〈水鋼の剣〉は、炎の化身になりかけていたシャルナーグの肉体を白い蒸気へと変えていく。

「だってさ、人を……大切な友達を信じられないやつが英雄だなんて、ちゃんちゃらおかしいじゃないか」

触れ合う手を伝い、シャルナーグの思いがアノウエナに流れ込んできた。シャルナーグは怒りに捕らえられ、唯一無二の友であるアノウエナに疑念を抱いたことを恥じていた。

「そんな、そんなこと……」

アノウエナは必死に刀身を引き抜こうとしたが、シャルナーグはそれをさせようとしなかった。

「あたしは、ここで〈意思ある炎〉を道連れに死んだってことにするんだ……いいね？」

肉体の大半を失いながら、シャルナーグは真摯(しんし)な瞳でアノウエナを見つめた。

「後は……あんたに任せたよ」

大粒の涙を流しながら、アノウエナは頷いた。

「……ありがとう。あんたは、あたしにとっても大切な人さ」

そう言い残すと、シャルナーグの全てが蒸気となってアノウエナの腕からすり抜け、〈火の民〉の歓呼(かんこ)に見送られるようにして〈陽炎宮〉から天へと昇っていった。

昼下がりに。陣内(じんない)達彦(たつひこ)は北校舎の屋上でごろりと仰向(あおむ)けになってぼんやりと雲を眺(なが)めていた。

ピーひょろー。一羽のトンビが上空を旋回する。

「トンビか、珍しいな。まったく気楽そうに飛びやがって」

陣内は呟いた。同級生から自分がそのトンビの形容をされていることを知ってか知らずか。

ばたばたと音がした。何者かが屋上に入ってきたらしい。

誰だろう。一緒にこの場所を開拓した睦月(むつき)熾朗(しろう)は陸上部に入ってから訪れなくなった。また藍宮(あいみや)陽介(ようすけ)が部活に誘いに來たのだろうか。そろそろ追いかけてもしんどいので一度くらい手を貸してやってもいいかという気になっている。

かんかんと梯子(はしご)を昇ってきたのは女子だった。逆光で顔は見えない。奈倉(なぐら)凜子(りんこ)と穴生(あのを)沙輝(さき)との屋上戦争はあちらが南校舎を使うという話で手打ちになったはずだ。じゃあ誰なのか。

女子は足音を立てて陣内に近寄り、その体の上に仁王立(におうだ)ちになった。

「とうとう見つけたわよ、陣内達彦」

ポニーテールが初夏の陽射(ひざ)しに揺れる。右手に茶封筒を握っていた。

陣内は目を凝(こ)らしてその女子の顔を判別し、

「おおう」

と感嘆(かたん)の声を漏らした。だが、寝そべった姿勢は全く崩さない。

「見つけたっつっても、毎日同じ教室にいるだろーに」

淡々と言うと、ポニーテールの女子は憤然(ふんぜん)とした。

「そうよ！ 毎日顔を合わせてるはずなのに、あたしは君のことに気づかなかったのよ！」

「俺のことに気づかなかったって、おまえさらっとひで一こと言うなあ。まあ確かに存在感はねえと思うけどよ」

「違う！ 君が同じクラスだってことはもちろん知ってる。でもそこじゃない。あたしがやっと気づいたのは、君が何者かってことよ！」

「何者って、ただの中三男子だろ？」

「とぼけないで！ もう全部調べ上げたんだから！」

「おいおい待て待て。何だよ、いきなり現れたかと思ったらすげえ剣幕で突っかかってきてよ。ちょっと整理させてくんね？」

「いいわよ」

「えっとだな……質問は三つある。まずはどうしておまえが俺のところに來たのかってことだ」

「それは君があたしの――」

「待ーて待て待て。その話は長くなりそうだから後回しにしよう。後でちゃんと聞くからもうちょっと待ってくれって。な？」

「じゃあ、早く他の二つの質問っていうのをしてよ」

「二つ目は、どうやってこの屋上に入ってきたかってことだ。南校舎は鍵(かぎ)が壊れてっから出入り自由だが、この北校舎は嚴重に封鎖(ふうさ)されてるはずだ。ドアに三つの鍵の上、錠前(じょうまえ)付きの鎖も巻かれてる。おまえはそのドアから堂々として入ってきた。一体どうやって——っつー質問だ」

「答えは簡単ね。なぜなら鍵は一つもかかっておらず、鎖も外されてたからよ」

「何だと？」

「え、何その反応。明らかに人が入った形跡だったからてっきり君がやったものかと思ったんだけど」

「俺じゃねー。俺はドアを使って出入りしねーからな」

「じゃあどうやってここに来たていうのよ？」

「ん、あれだよ」

上半身を起こした陣内が親指で指し示したのは、屋上を一メートルほど超えた高さのプラタナスの樹(き)だった。

「あれをよじ登ってきたの？」

確かに高さは十分だが、校舎とその樹までの距離は二メートルくらいある。樹にしがみついた体勢から飛び移るのはかなりの身体能力がなければ無理だ。

「.....なるほど。藍宮くんが君のことを気にかけてた理由がわかったわ」

「んじゃ第三の質問。こいつは単純な興味なんだが、その白と水色のストライプはどこで売ってんだ？」

「え、何のこと？」

「いや、ほんとに興味があるだけなんだ。その柄(がら)ってけっこー古典的だよな。なんつーかほら、九〇年代ラブコメ風っての？」

「.....え？」

「いやいやダサいっつってるんじゃないくてよ。どっちかっていえば俺の好みなんだけどさ。へー今時そんなの置いてる下着(したぎ)屋があるんだなってよ」

「もういい！」

げし。上履きの裏が陣内の顔に炸裂(さくれつ)した。

ポニテ女子はすぐに仁王立ちを解いて離れる。

「おー、いてて.....」

赤くなった鼻先をさする陣内に、顔を真っ赤にして紺(こん)の夏用カーディガンでスカートの半分を抑えつけながら女子は言う。

「君がこんな馬鹿者だとは思わなかったよ！」

「よく言うぜ。まともな印象持ってなかった癖(くせ)に」

皮肉げであり、そして微かな虚(むな)しさが漂う呟(ささや)きを漏らす。

「.....んじゃま、最初の質問に戻るとするか。学年一の才女(さいじょ)であり、端正な容姿を神から与えられ、男女関わらず好意を抱(いだ)かれる愛嬌(あいきょう)の持ち主であるところの天原(あまはら)亜依(あい)こと〈姫君(ひめぎみ)〉が、どうして俺みて一などうでもいい男子に用事がある

んだ？」

陣内が訊(たず)ねると、天原は落ち着きを取り戻した様子で言う。

「どうでもよくないってわかったからよ。今のあなたはどうでもいい人なんかじゃないどころか、あたしにとって重要な人だってやっとわかったからよ」

「おおっふ。こいつはとんだ告白だな」

「茶化(ちゃか)さないで。真面目に話してるんだから」

ばさり。天原は持っていた茶封筒を陣内の目の前に放った。その勢いで中に入っていた何枚もの書類が滑り出た。

陣内はそれを取り、目を白黒させた。

「何だこりゃ？ 出入国(しゅつにゅうこく)記録？ 興信所(こうしんじょ)の報告書っておい、俺の身元調査をしたってのか？」

茶封筒に入っていた書類は全て陣内に関するものだった。

「あたしって意外と完璧主義なの。君がそうじゃないかって気づいたのがひと月前。それから昨日までずっと君について調べ上げてたのよ。逃げ道を完全に塞(ふさ)いで問い詰めるためにね」

「げ、マジかよ。〈姫君〉にあるまじき性格じゃね？ そんなの臣民(しんみん)が知ったら革命(かくめい)起きるぜ」

「言ったら地獄の断頭台(だんとうだい)ね」

「おおふ、〈姫君〉じゃなくてまさかのキング・オブ・デビルだったとは」

「だから茶化さないでってば！」

だん、と天原は足を鳴らす。

「ねえ陣内君。どうしてあたしに言わなかったの？ 君が、あたしのお父さんと知り合いだったってことを」

「……………」

陣内は答えない。時間が停まったような沈黙に包まれる。

天原の父親は大学教授だった。中東や西アジアの考古学を専門にしていた研究者だったが、昨年の八月に調査で赴(おもむ)いたイラン中央部の地下遺跡で崩落事故に遭(あ)ってしまった。不安定な国の政情から爆弾テロの巻き添えになったとも、局地的な地震が発生したとも言われているがはっきりした理由はわかっていない。事故の生存者はたった一人だけ。それは考古学が好きな余り天原教授の押し掛け弟子となった男子中学生だった。

「陣内達彦……四月に君が転校してきたときにどうして気づかなかったんだろう。忘れるはずのない名前なのに……」

一年前の事故に巻き込まれていた陣内がどうしてここにいるのか。それに気づいた天原が同様したことは想像に難(かた)くない。そして調査をしたのだ。そこに何かしらの意味を見出さない方がおかしいだろう。

「どうして、あたしの前に現れたの？」

天原はどんな答えを期待していたのだろう。

陣内の返答はそれに応えられたのだろうか――。

「……おまえを守りに来たんだよ。センセイの代わりにな」

そう言って、陣内は語り出す。

天原教授が研究の中で知ってしまった恐ろしい存在(モノ)――〈無貌(むぼう)の三眼(さんがん)〉について。

調査に赴いた遺跡はそれを崇(あが)める場所だったことを。

崩落事故の原因はテロでも地震でもなく、その〈無貌の三眼〉によって引き起こされたことを。

〈無貌の三眼〉は調査団を全滅させるだけでは飽き足らず、天原教授の一人娘を狙ってこの国にやって来ていることを。

それを阻止するために陣内はやって来た。

陣内の話は続く。〈無貌の三眼〉は怒りで動いているのではなく戯(たわむ)れている。天原に直接手を出すのではなく、もっと回りくどい手を使っている。すでに同じクラスの誰かが操られ、奇妙な力を与えられて他の同級生を餌食(えじき)にしている。

突飛(とっぴ)な話だったが、天原は疑わなかった。どうやら知らない内に教室を覆う異常に薄々感づいていたようだ。

「操られてるって、一体誰が？」

「それをずっと探ってたんだが、なかなか尻尾(しっぽ)を出さなくてよ。けど、今日になってようやく見当がついた。おまえが俺の正体を確かめたようにな」

にやりと笑ってその名前を口にした陣内達彦とそれを聞いた天原亜依を、おもむろに発生した強烈な突風が襲った。

シャルナーグとアノウエナが〈意思(いし)ある炎(ほのお)〉を滅ぼしたことにより、その支配下にあった領土を包む火は全て鎮(しず)まり、隔(へだ)てられた大地は再び一つとなった。〈火の民〉だけでなくあらゆる〈人間〉の女王となったアノウエナは、かつて起こした愚行(ぐこう)を二度と繰り返させないよう民たちに言い聞かせながら〈水鋼(みはがね)〉を多方面の技術に応用させ、ついには火の制御を成功させた。

二百年の後(のち)、数え切れない功績を残してアノウエナが滅びのときを迎えて大地の統治権をその娘スウェナへ継承した頃には、〈人間〉は火の制御技術を完全なものとしていた。本来暗きものであるはずの夜を再び照らすようになった〈人間〉は、世界を変える新たな試練と対面することとなる。つまりは〈世界(ロカ・ダアツ)〉の第五季(き)の訪(おとな)いである。

夜の象徴として密(ひそ)やかに輝く太陰(たいいん)は闇への畏怖を忘れた〈人間〉に憤慨(ふんがい)した。〈真人(しんじん)〉たるヒシコグとヒワメルより夜を司(つかさど)る力を与えられていた太陰は〈人間〉が夜を消そうとしているものと判じたのである。

火によって衣たる闇を引き剥(は)がされ、世界の片隅へと排除されつつあった太陰は、残された微かな夜の残滓(ざんし)を吸い込むと自らその身を幾千幾万に引きちぎり、大きく渦を巻きながら天から地へと降りていった。その渦の影響は巨大な竜巻となって天と地とをしっかりと繋(つな)ぎ止め、その位置を固定させてしまった。これにより夜が失われ、世界には昼しかなくなってしまったのである。

困り果てたのは天に残された太陽(たいよう)であった。地上から聞こえる〈人間〉や獣たちの罵(ののし)り声にいたたまれなくなった太陽は、〈人間〉を模した〈光(ひかり)の姫君(ひめぎみ)〉を創り出し、彼女の内に太陽光(こう)を差し入れると、昼の管理を委(ゆだ)ねて己の意思を虚空(こくう)へと流してしまった。

少女の姿と心を与えられた〈光の姫君〉は光の化身であるがゆえに夜を呼び戻すことはできなかったものの、生まれながらにして慈愛に溢れ、〈人間〉の心の機微(きび)をよく捉(とら)えた。〈光の姫君〉は〈人間〉に協力を乞(こ)い、夜の不在をどう乗り越えるべきかに関して広く知恵を求めた。結果、若く賢(さか)しきヴィフィドが提示した「天に坐(ざ)す〈光の姫君〉と〈人間〉の住む大地の間に隔(へだ)たりを設(もう)けて影を生じさせる」という案を採用することとした。

とはいえ、大地を遍(あまね)く照らす太陽の光を遮(さえぎ)るほど大きく、かつ天に浮かべることのできるような存在は、そう易々(やすやす)とは見つからなかった。天険(てんけん)ハウジョ山(山)の頂(いただ)きに棲(す)む世界最大の巨鳥(きょちょう)ンマオガオですら、一日足らずの間、それも大地の四半分(しはんぶん)に影を落とすくらいのことしかできなかったのである。

しかし〈光の姫君〉は諦(あきら)めることなく最良の方法を模索し続けた。賢しきヴィフィドを天に召し上げ、黒々としたその頭髮に白いものが混じるまで議論を交(か)わした末、たった一人だけそれを成すことのできる者がいるという結論に達した。その者とは、かつて〈意思ある炎〉を

倒した英雄シャルナグであった。

友であるアノウエナの剣に身を投じて白い蒸気となったかの女傑(じょけつ)は滅ぶことなく天と地の間をさまよい続けていた。〈光の姫君〉がその御手を翳(かざ)して呼びかけると、さまよえるシャルナグは自我を取り戻し、蒸気となった体を雲の形に変えて馳せ参じた。

〈光の姫君〉は三日に一度〈雲曜日(くもようび)〉を設け、地上の〈人間〉へ降る日差しを和(やわ)らげた。シャルナグの雲は、天地を繋いで大地を無軌道に動き回る大竜巻の接近には四散せざるを得ないものの世界で最も長く〈光の姫君〉の光を遮ることができた。とはいえそれで生じさせられるのはあくまでただの影であり、やはり夜には遠く及ばなかったが、大地の干魃(かんばつ)を和らげるといった程度の効果はあった。

地上の〈人間〉たちは〈光の姫君〉に惜(お)しめない感謝の念を送り、その証として家々の屋根に天へと口を開く煙突(えんとつ)を備え付け、祈りと共にシャルナグの雲を助ける煙を立ち昇らせた。それを見た〈光の姫君〉は成すべき役目を果たしたことを悟り、賢しきヴィフィドとの間に一人の娘をもうけた。〈光の姫君〉は娘をシャルナグに預け、伴侶(はんりょ)であるヴィフィドと共に生みの親である太陽の行方を求めて虚空に消えてしまった。

ペサラと名付けられたその娘を、シャルナグは次代の〈光の姫君〉としてこの上なく大切に育(はぐく)んだ。〈雲曜日〉以外の日は、斑(むら)にすることなく光を地上に当てる練習に付き添ったり、人であった頃の武勇譚を語って聞かせたりした。

その甲斐あってかペサラは健(すこ)やかに育(そだ)ち、母にも劣らぬ〈光の姫君〉となった。だが、時を経(へ)る内にその祝福を当たり前のこととして捉えるようになった〈人間〉たちは感謝の心を薄れさせていった。追い打ちをかけるように天地を繋(つな)ぐ竜巻の勢いが盛んになり、雲を散らすだけに留まらず幾つもの町へと牙を剥くようになっていた。〈人間〉の中には感謝を忘れるどころか、猛威を振るう竜巻に対して無力であると〈光の姫君〉を責める者まで現れた。

しかし〈人間〉の血を継ぐペサラにはその不条理な心も理解できた。ペサラは竜巻への対処を思案したが、その脅威に抗(あらが)う術は全くなかった。竜巻の影響により雲曜日は五日に一度となり、シャルナグが人の姿を取ることのできる機会も減った。地上に降り注(そそ)ぐ光は多大となって〈人間〉はひどい干魃に苦しんだ。

孤独に耐えながら、阿鼻叫喚(あびきょうかん)の光景から目を背けようとしなかったペサラは、いつしか心を疲弊させ、知らぬ内に己が司る光を呪い、心の奥で闇を求めるようになっていったのである。

※ ※ ※

一方大地では、あらゆる〈人間〉の女王の座を継承したスウェナが母とは比べ物にならぬほどの短命で一生を終えると、スウェナの息子ヒアリガが王位を継(つ)いだ。そのときすでに天に太陰なく、しばらくして太陽が〈光の姫君〉を生み出したのを見たヒアリガはすぐさま〈支天法(してんほう)〉を定め、あらゆる町々に触れを出して民に〈光の姫君〉を崇拜(すうはい)させるようにした。

ヒアリガ自身も一番の信奉者となり、〈光の姫君〉が知恵のある〈人間〉を求めた折には速やかに国中に家臣を走らせて若く賢しきヴィフィドを見出した。また〈雲曜日〉が定められたときには、シャルナーグの雲を助けるために各家で設ける以外の大規模な公(おおやけ)の煙突を全ての町で建造させた。その御世だけで数千基にも及ぶ煙突が建造され、これらの功績を称えられたヒアリガは〈光の姫君〉より〈仰天王(ぎょうてんおう)〉の名を賜(たまわ)った。

しかしヒアリガの継嗣(けいし)であるナオリガは即物的な考えの持ち主で、信仰心は父の半分も持ち合わせていなかった。後ろ盾となった家臣からの讒言(ざんげん)もあり、ナオリガは〈支天法〉の撤廃を推(お)し進めた。民衆からの強い反対があったためそれは果たせなかったものの、にわかに勢いを増す竜巻への対処費用の捻出(ねんしゅつ)という名目で新たな煙突の建造を禁止させることにだけは成功した。

〈光の姫君〉をないがしろにするナオリガの政策はその治世(ちせい)が終わった後も継続された。決定的となったのはさらに二代を経たヤイジャリガの御世(みよ)である。ヤイジャリガは〈光の姫君〉が幼きペサラへと代替わりしたことを好機とし、竜巻による被害の責をペサラに押し付けて民に罵倒(ばとう)させ、王の支持を強めることに成功したのである。

天地を繋ぎ止める大竜巻が乾いた大地から砂塵(さじん)を巻き上げながら駆け巡るその様は、世界が次なる転換期を迎えつつある兆(きざ)しだった。

だが、それに気付いた者は誰一人としていなかった。これまで世界に訪れる試練と変化の兆しがある度に現れた〈影(かげ)〉すらも、なぜかその姿を一切見せようとしなかったのである。

2

五日に一度の〈雲曜日(くもようび)〉が終わったばかりのある日のこと。世界の片隅、東の町ビーヤニにて百を超える煙突群の一つから顔を出す者がいた。それは逞(たくま)しい体躯(たいく)の背の高い青年だった。

「我が麗(うるわ)しのお姫(ひ)いさまは、今日も輝いていらっしゃるなあ！」

清らかでいて鮮やかな光を享(う)けながら呟く青年の顔には、煤(すす)だらけではあったが満ち足りた色が浮かんでいた。フオベという名のこの青年は、ビーヤニに多く住まっている煙突掃除人の一人だった。

「おおいフオベ。そろそろ上がりにしようやー」

少し離れた煙突から声かけられた。周囲の煙突から立ち昇る蒸気に遮(さえぎ)られ、声の主の姿は見えない。

「はいよ、サデルの兄貴」

フオベは朗(ほが)らかに返事をして煙突の中から縁(へり)へと上った。手早く命綱(いのちづな)を外すと、大きな体格に見合わぬ機敏な動作で煙突の外面に取り付けてある鉄(てつ)梯子(ばしご)を軽やかに降りていった。

地面に着くなり清掃と点検作業のため運行を休止させていた煙突を再起動させた。ごうごうと音を立てて勢いよく蒸気を吐き出す煙突を見上げ、フオベは嬉しげに頬を弛緩(しかん)させた。自

分の仕事への手応(てごた)えもあったが、それ以上に蒸気の向こうにうっすらと見える光の源(みなもと)が存在することに喜びを感じていたのである。

「元気にしてらっしゃるかね、お姫(ひ)いさまよう」

光を見上げる度、フオベは祖母の皺だらけで丸い顔を思い出す。祖母は近頃では珍しくなってしまった〈光の姫君〉の熱心な信者で、幼いフオベによく〈光の姫君〉にまつわる伝説や侍従にして光を遮る雲であるシャルナークがかつて立てた勲(いさおし)、そして生涯をかけて〈光(ひかり)の姫君(ひめぎみ)〉に尽くした〈仰天王(ぎょうてんおう)〉ヒアリガの話を語って聞かせた。

ヤイジャリガ王の近習(きんじゅう)を血縁に持つフオベの母は〈雲曜日〉が訪れる度にこの姑(しゅうとめ)と口喧嘩をし、ことあるごとに祖母の言うことは全てでたらめだとフオベに言い聞かせた。そんな母へ律儀(りちぎ)に首肯(しゅこう)を返しつつ、フオベの心はやはり祖母の語る話に惹(ひ)かれていたのである。

そんな母も祖母もすでにこの世にはなかった。十一年前、フオベの一家が住んでいた町はおもむろに進行方向を変えた竜巻に蹂躪(じゅうりん)され、大地の上から跡形もなく消え去っていた。それはそれまで竜巻によって〈人間〉が受けた被害で最大ともいえるもので、町の住人で生存していたのはまだ十歳にもなっていないフオベだけだった。

フオベが助かったのは正に奇跡としか言い表しようがなかった。フオベは他の〈人間〉と同じように逃げる間もなく家々や煙突の破片と共に竜巻に巻き上げられた。すさまじい勢いで飛ぶその破片にさらされてほとんどの〈人間〉が命を落とした。それを免(まぬが)れた者も結局は遙(はる)かな高みから落下したことで粉々になった。

けれどもフオベだけは生き残った。災禍(さいか)から三日後、ヤイジャリガ王直々(じきじき)の命を受けた巡察使(じゅんさつし)に発見されたフオベの体に目立った傷はなく、あってもかすり傷ほどのものだった。巡察使が事の子細(しさい)を何度訊(たず)ねてみても、フオベが話せるのは家族と共に竜巻に巻き上げられるまでで、それ以後の記憶は一切なかった。これは嘘偽(いつわ)りではない。フオベ自身もそのときのことを思い出そうとしてみたが、竜巻の中で経験したことは分厚い闇の帳(とばり)の向こうにあった。

フオベは王都にある巡察使の家に半年ほど滞在した後、巡察使の知遇(ちぐう)である煙突掃除人の元締(もとじ)めのところに徒弟(とてい)に出されることになった。その元締めが住まっていた町がこのビーヤニだったのである。

フオベがビーヤニにやって来てからおよそ十年が経とうとしていた。町の左右すら知らなかった少年は、今や一人前の仕事を任せられるほどにまで成長していた。

「まったく。普段は岩みてえにだんまりな癖(くせ)に、お姫いさまを見上げるときだけはいい顔するんだよな、おまえさんはよ」

煙突の下で天を仰(あお)ぐフオベに語りかけたのは、先ほど声をかけてきたサデルという煙突掃除人である。サデルは長身のフオベと同じくらい上背(うわぜい)がある割に肉付きはやたらと悪く、柳(やなぎ)のようにひよろひよろとした風貌だった。

「そうかい？」

応じながらサデルを窺(うかが)う素振りもなく、フオベの視線は天へ向けられたままだった。

「やれやれ、仕方ねえやつだ」

苦笑を浮かべつつもサデルの口調は柔らかかった。サデルとフオベは同じ年だが、煙突掃除人の徒弟に入ったのはサデルの方が二年ほど早かった。上下関係がことさら厳格な煙突掃除人の中でサデルの性格は驚くほど大らかで、こうして余人を交(まじ)えず二人でいるときだけならばともかく、他の掃除人もいるような公(おおやけ)の場でまで気の置けない友人のように声をかけてきた。ぼんやりとした気質でありながら他者との足並みは崩さないようにと心掛けてきたフオベは、そうやってサデルに話しかけられる度に困惑してしまうのだが、しかし不思議と不快な気分にはならなかった。

「さて、そろそろ帰るとしますか」

上下の礼節を重んじつつ敬愛できる友としてサデルと接している内に、フオベは彼を実の兄のように慕(した)うようになっていた。それはサデルも同様で、こうしてフオベが天を見上げるときは、手のかかる弟と一緒にいるようにいつまでも付き合うのだった。

二人は来たときと同じく明瞭に照らされる帰途(きと)に就(つ)いた。この世界に夜はない。長い長い昼と、時折(ときおり)〈雲曜日〉が訪れるだけだった。

いつまでも続くかと思われる日々に終止符を打つのが己だとは、フオベはまだ知る由(よし)もない。

「まったく、困ったもんだぜ」

サデルは肩を落とし、道具箱をぶら下げた両腕をぶらぶらと振りながらぼやいた。横でそれを聞き、フオベは微笑んだ。

「笑いごっちゃねえぜ、フオベよう。十日(とおか)にいっぺんのお休みが、二十日(はつか)にいっぺんあるかないかになっちまったんだ。こいつは一大事ってやつだぜ」

サデルは深いため息を吐(つ)いた。休みがないのはサデルだけに限ったことではなく、フオベや他の若い煙突掃除人たちも同じ状況だった。ひっきりなしに仕事が舞い込む煙突掃除人は、間違いなく世界中で最も忙しい労働者だった。

それもこれも全て大竜巻の影響である。大竜巻はフオベの生まれ育った町を蹂躪した後、衰えるどころか勢力をいや増し、この十年で手足の指で数え切れないほどの町とそれに十倍する村々を消滅させた。町だけではない。竜巻は森林を根こそぎ薙(な)ぎ払い、山を削り、沙漠(さばく)を押し広げており、そのため多くの獣たちが種(しゅ)の滅びにさらされていた。大竜巻はすでに〈人間〉だけでなく世界にとっての脅威(きょうい)となっていたのである。

王権を強めんとするヤイジャリガの企図(きと)通り、〈人間〉の大半がペサラに不信を募らせていた。それは最も信仰篤(あつ)く、最も多くの煙突を築造(ちくぞう)した東の町ビーヤニの住民も例外ではなかった。ビーヤニには、持っている煙突の数に比例してフオベやサデルのような煙突掃除人も多く住んでいた。煙突の管理は〈光の姫君〉への奉仕であり、単なる作業夫ではなく聖職として尊崇(そんすう)されていた煙突掃除人も、職に就く三人に一人までもが〈光の姫君〉ペサラを忌(い)み嫌うようになり、次々とその職から離れていってしまった。何年もの修行を必要とする職人の替わりがすぐに見つかるわけもなく、必然的に残った煙突掃除人たちが穴埋めをする

ことになったのである。

中でも特に若い掃除人に多くの仕事が割り振られてサデルのように呻吟(しんぎん)していたのだが、フオベ一人だけは一言の文句もこぼさず、むしろ満足げに日々の仕事をこなしていた。それは言わずもがな、フオベが〈光の姫君〉に最も近いところで奉仕できることを誰よりも喜んでいたのである。それを知っているのはサデルをはじめとした気心の知れた職人仲間だけだった。

「他人事(ひとごと)じゃねえ忙(いそが)しさだってえのに、おめえってやつはよお」

サデルは猫背(ねこぜ)のまま恨(うら)めしげな視線を送ったが、フオベは微笑(びしょう)を浮かべて泰然とそれを受け止めた。

「惚(ほ)れた弱みってやつかい。へ、お熱いこって」

サデルはそう言ってがっしりとした肩をはたく。

「そんなんじゃないよ。こう見えても、おれなりに町のことを心配してるんだぜ」

冗談めかして言ったものの、それは本心からの言葉だった。ビーヤニの生まれでないフオベも、町から信仰が失われつつあることを心底から憂(うれ)えていた。いやむしろ、フオベが外から来た者だからこそ幼い頃から耳馴染みのある〈光の姫君〉を一途に信仰するビーヤニの民たちを美しいと思えたし、また自分がその町の一員として認められたときは何にも代え難い喜びを感じたのである。

とはいえ、フオベ自身は〈光の姫君〉の信奉者ではなかった。天から光をもたらすその姿に憧憬(しょうけい)の念を抱きはしたがそれを崇(あが)め奉(たてまつ)ろうという気は不思議と全く起こらなかったのである。文字通り手の届かないほどの高みに在りながらその姿をいつでも確かめることのできる〈光の姫君〉ペサラは、フオベにとっては信仰の対象というよりは、親しみを持てる身内のような存在だったのである。フオベは天を見上げる度、今にもペサラが地に降りてくるような、もしくは己が天へと昇っていくかのような錯覚を感じていた。

「ところで兄貴。例のあれは？」

フオベが訊ねると、サデルは大きく頷いた。

「おうおう、ちゃんと捕まえといたぜ」

サデルは腰から下げていた小袋を取り外し、フオベの目の前に掲げてみせた。煤まみれの袋の中で何かがもぞもぞと蠢(うごめ)いているのがわかった。

「ありがとよ、兄貴。あんたに夜(よる)の幸(さいわ)いあれ、だ」

それを受け取ると、フオベはほくほく顔で懐(ふところ)にしまい込んだ。

「本当におかしなやつだな、おまえは。何が楽しくてそんなもんを育てようなんて思ったんだか」

呆(あき)れ顔のサデルの言葉も上の空で、フオベは足取り軽く家路に就いた。

に住まう者ほど貧しかった。貧民街に隣接する区画にある、竜巻はおろかちょっとした突風でも倒壊してしまいそうな荒(あば)ら屋(や)がフオベの起居する住処(すみか)だった。

他の煙突掃除人もこのように粗末(そまつ)な住まいで寝起きしているのかといえば、そんなことは全くない。例えばサデルは比較的豊かな外縁(がいえん)寄りの区画に家族六人が暮らせる立派な屋敷を構えていた。ここ何代かの王に好かれていないとはいえ、煙突掃除人の社会的地位は未だに聖職として広く認められており、その生活は十分過ぎるほど保障されていたのである。

フオベには養う家族もなく、一般の〈人間〉が抱くような欲望を一切持ち合わせていなかった。〈光(ひかり)の姫(ひめ)君(ぎみ)〉に対する憧れだけを強く抱いていたのだが、そんなフオベにもう一つの生き甲斐らしきものが生まれつつあった。

帰宅したフオベは、着替えを済ますより先に二つの小袋を持って部屋の奥壁の隅にはめ込んだ卓(たく)へと直進した。小袋の一つはサデルから渡された物で、もう一つは自分の物である。フオベは卓上に置いておいた木箱の蓋をそっと開き、光を入れないように細心の注意を払いながら袋の口から中身を流し込んだ。

「ひいふうみい……と。これで、三十三匹か」

フオベが呟いて気を緩(ゆる)めたそのとき、蓋の隙間から一匹の黒い羽虫が飛び出した。黒い虫は迷いながら荒ら屋の戸口まで飛んだが、戸の隙間から差し込む光に触れるなり蒸発するように消えてしまった。虫が消えた後、指の先ほどもない小さな白い玉が床に落ちた。

白い玉に変わったその虫は、ここ数年現れるようになったもので、煙突掃除人の間で〈影虫(かげむし)〉と呼ばれていた。その名の所以(ゆえん)は、手入れの行き届いていない煙突の内側にいつの間にか棲(す)み着いているからである。若い煙突掃除人たちは、〈影虫〉の発生をヤイジャリガ王による〈光の姫君〉崇拜弾圧(だんあつ)の副産物だと捉えており、王にぶつけられず溜まりに溜まった不平不満を、暗い煙突の中を白い光を放ちながら飛ぶだけの無害な虫たちへと向けていた。

他の掃除人たちならば見つけるなり叩き潰す〈影虫〉に対し、フオベだけは愛着のような奇妙な感覚を抱いた。虫が放つ灰(ほの)かな光にどこか親しみを感じたフオベは、ものの試しにと〈影虫〉を家に持ち帰ろうと考えた。しかし、捕まえた一匹を握って煙突の外に出た途端、天からの光を浴びた〈影虫〉は今のようになく消滅してしまったのである。

〈影虫〉が光に弱いことを悟ったフオベは、町一番の服屋に足を向け、光を一切通さない小袋を特注で作らせた。その代金は五人を一年間養えるほどの額だったが、これといって趣味の類がなく、稼いだ金の使い道を持たないフオベにとっては何のことはない出費だった。

それがおよそ五十日前の話である。捕まえた〈影虫〉をその小袋に入れて持ち帰っている内、フオベは少しずつ〈影虫〉の特徴と性質を理解していった。極端に光に弱いという以外にも、滅びた後には白い玉が残ることや、闇で光るのはその玉であること、何よりフオベが驚いたのは〈影虫〉は生物ではないという事実である。

フオベは小袋と同じように光を通さない木箱を職人に作らせ、その中に〈影虫〉を飼うことにした。餌になりそうな野菜や果物、果てには煙突にこびり付いていた煤(すす)も一緒に入れたのだが〈影虫〉は何も食べようとしなかった。

「よしよし。すぐに餌をやるからな」

フオベは床に落ちた白い玉を拾い上げると、木箱の中に戻した。すると、中に凝(こご)る闇が白い玉にまわりついて再び虫の形を取り戻していく。

〈影虫〉の餌は煙突掃除人であるフオベにとってありふれたものだった。つまり〈影虫〉は周囲の闇を取り込み、己の体としていたのである。光に当たって滅んだように見えても、残った玉を闇に浸(ひた)しておけば数日の間に元の虫の姿に戻る。〈影虫〉には滅びがないということを知り、フオベの心は感動で沸き上がった。

フオベの知的好奇心を一層揺り動かしたのは、〈影虫〉たちの交感方法である。〈影虫〉は時折おかしい音を発することがあった。耳を澄ますと、木箱を閉じていてもその中で虫たちが何らかのやり取りをしていることが察せられた。その音色は単純な調べではなく、伝えたい内容に応じて様々に変化させながら仲間と交感をしているらしかった。驚くことに〈影虫〉は会話をしていたのである。

それに気付いたフオベは〈人間〉が生まれる前の遙かな太古に獣や魚(うお)たちが言葉を交わしていたという神話を思い出し、踊り出したくなるほど興奮した。興奮のあまり、自らも〈影虫〉と会話をしてみたいと願うようになったフオベは、寝食の間も惜しんでその方法を試行錯誤するようになった。

フオベはまず囁(ささや)き声よりもおぼろげで隙間風のような〈影虫〉の調べを楽器で再現しようと考えた。世界にはすでに多様な楽器が考案されており、フオベはそこから直感に従って笛を選んだ。笛だと決めたのはいいが、管の長さといったその形状や材質、音孔(おとあな)の径(けい)などを見極めるには山と積もるほどの失敗作を積み上げねばならなかった。

煙突掃除人としての激務の傍(かたわ)ら作業を続けておよそ三百日。フオベはとうとう〈影虫〉に届く音色を奏でる笛を作り上げた。完成の充実感に一時も浸ることなく、フオベは笛の奏法に熟練すべく研鑽を重ねた。二百匹ほどに増えた〈影虫〉同士の会話に耳を傾けている内に、文法に近いものをおおまかに把握できるようになった。

さらにフオベは、漠然とではあるが〈影虫〉たちの本質をも掴んでいた。飼っている〈影虫〉たちに単純な指示を何とか伝えられるようになったある日、フオベの家の戸を叩く者があった。戸を開くとそこに居たのは貧民街の路地裏で辻(つじ)占いをしている老婆だった。老婆はフオベが持っていた笛を一目見て声を震わせた。

「おおお！ 最近どうもおかしい音がすると思うたら、まさか〈龍笛(りゅうてき)〉じゃったとはのう」

「〈龍笛〉だって？」

フオベが怪訝そうに訊ねると、老婆は朗々と語り出した。

「〈龍(りゅう)〉っちゃん、だあれも見たことのない獣のことじゃ。〈龍〉がこの世界に姿を現したのはただ一度だけ。古伝に云う大地新生の折(おり)じゃ」

フオベは幼い頃に祖母から何度も聞かされた神話を思い出した。

「大地新生ってのは確か、太陽(たいよう)と太陰(たいいん)が生まれたときのことだろ？」

「そうじゃ。〈いと小さき者〉が太陽と太陰の卵をその身の内に抱き、大海の深淵(しんえん)より

来る追っ手から逃れて水面を越えたそのときに、〈龍〉は現れたそうじゃ」

〈龍〉が不思議な声音(こわね)を響かせるや、追っ手どもは一様に恐れおののき、深淵に引き下がつて二度と姿を現さなかったのだと老婆は語った。

「その声音を模した楽器が〈龍笛〉なのじゃ。だが……いやしかし、ここまで素晴らしい音色を奏でる一品は初めて見たわい」

老婆はそう言うと、覚束(おぼつか)ない足取りで貧民街へと戻って行った。老婆の背を見送るフオベの頭に天に昇る〈龍〉の姿が閃き、さらにそれが二つの事柄へと結び付いた。

飼育している〈影虫〉を思うままに操ることができるようになったフオベは、仕事先である煙突にも笛を携(たずさ)え、野良の個体との交感を試みようとした。飼育下の個体ほど細かい指示は理解しなかったが、野良の〈影虫〉も笛に反応するということを確かめると、フオベは残った財産の全てを使って貧民街の土地の一角を買い上げ、光が一切入らない仕掛けの倉庫を建造させた。

また、フオベはサデルや貧民街で知り合った仲間たちの協力を得て、〈影虫〉の研究を一層推し進めた。一匹一匹では天の光にさらされた瞬間に玉に戻ってしまう〈影虫〉たちも数十数百と寄り集まることでその姿を維持できることがわかった。それを知ったフオベは、協力者たちに頼んでビーヤニ中の〈影虫〉を集めさせた。フオベは倉庫に入りきらないほどの〈影虫〉を統制して「とある形」を取らせることに成功した。

しかし、惜しげもなく全財産を使い果たし、満足しているフオベを見て、親しくない煙突掃除人たちはおろか町の者たちも眉をひそめていた。

「そんなことをしている場合ではなかりょうに」

口を揃えてそう言う理由は、世界が次なる存亡の危機を迎えていたからである。

かつて太陰が地に分散した折に生じた竜巻の勢力がとうとう極大に達し、大地を縦横無尽に荒れ狂っていた。〈人間〉の町のほとんどは竜巻に滅ぼされ、残るはビーヤニと幾つかの町、そして王都のみであった。残された〈人間〉たちの多くはすでにヤイジャリガ王が〈光の姫君〉に責任をなすりつけていたことに気付いており、王に踊らされて罪なき〈光の姫君〉を責め苛(さいな)んだ己たちの所業(しょぎょう)を激しく悔やんでいた。〈人間〉たちの罪深きは、それでもなお〈光の姫君〉に縋ろうとしたところである。

〈光の姫君〉から今一度の恩寵(おんちょう)を賜(たまわ)らんと〈人間〉たちは残存する全ての煙突を稼働させた。濛々(もうもう)と立ち昇る煙により、最盛期の数分の一ほどではあるもののシャルナグは幾ばくかの力を取り戻すことができたが、根本的な問題の解決には至らなかった。〈光の姫君〉ペサラにはやはり、大竜巻の猛威に対して講じる術(すべ)を考え出すことができなかったのである。

王都が竜巻に吞まれ、ヤイジャリガ王をはじめとする王族や家臣たちがことごとく命を落としたという報と共に、大竜巻が次なる進路をいよいよビーヤニへと定めたことが知らされた。怪物のような姿で迫り来る竜巻に目を背けるように、ビーヤニの住民たちは家の戸を固く閉ざしてただただ震えるのみだった。

絶望に打ちひしがれるビーヤニの者たちの中で、フオベだけはその目から希望を失ってはい

なかった。フオベがその胸に抱いていたのは、己のみではなく残された〈人間〉全ての希望だった。

吹き荒れる大風の中、フオベとサデルを筆頭とするその仲間たちは自らの手で研究用の倉庫を壊し、中で飼育していた全ての〈影虫〉を解き放った。数千匹にも及ぶ〈影虫〉の大群はフオベが奏でる〈龍笛〉の透き通った調べが導くまま蠢いた。虫の群は黒い渦と化し、その先頭が大きく二つに裂けて顎のような形となった。獅子や狼のようであり、かつ蛇や亀のようでもあるそれは、フオベが想像した〈龍〉のものだった。

フオベが〈龍笛〉で風を起こすよう指示を出すと、黒い〈龍〉はその身を激しく振らせ、独楽のように激しく回転し始めた。〈龍〉が巻き起こした突風により吹き荒れる竜巻の勢いが幾分か和らいた。フオベはあらん限りの精神力と体力を注ぎ込んで〈龍笛〉を吹き鳴らし、〈龍〉を迫り来る竜巻へと立ち向かわせた。

黒い龍はフオベの強い願いに呼応し、自らよりも遙かに大きな竜巻の進行方向をわずかにではあるが逸(そ)らすことに成功した。大竜巻はビーヤニの町の北半分を挟(えぐ)り取りつつも、そのまま西の方角へと退いていった。

竜巻が去り、半壊しつつも生き残ったビーヤニの者たちが歓喜と賞賛の声を上げた。フオベはそれを背で聞きながらも一度〈龍笛〉を鳴らすと、黒い〈龍〉が宙で一うねりするや降下した。サデルや仲間たちの無事確かめたフオベは颯爽(さっそう)と〈龍〉の頭上に飛び乗り、西へ離れゆく竜巻の後を追っていったのである。

4

〈光(ひかり)の姫(ひめ)君(ぎみ)〉ペサラは憔悴(しょうすい)し切っていた。眼下の大地は荒れ狂う竜巻により滅ぼされ、苦しみ喘(あえ)ぐ〈人間〉たちは王に唆(そ)そのか)されて光をもたらすしか能のない己へと呪詛(じゅそ)の言葉を投げかけてくる。半(なか)ば人の血を引いている分ペサラの思考は大いなる者たちよりも柔軟だったが、それは反面弱みでもあった。大いなる者とはいわば意思のある現象とも呼べる存在であり、その運行を司る役割は人に近い精神を持つペサラにとっては重過ぎるものであった。

世界から夜を消したのは太陰(たいいん)であり、それと共に在った太陽(たいよう)はペサラの母である初代〈光の姫君〉を創り上げて虚空へと退いた。そして初代も後継者としてペサラを産み落とした後、夫である賢(さか)しきヴィフィドと連れ立ち、太陽を追って虚空へと旅立った。ペサラにとってただ一人の理解者であったシャルナグも日を追うごとに強力になる竜巻の影響で力を失い、姿を見せる機会が著(いちじる)しく減っていた。

詰まるところ、ペサラを苛んだ最大の敵は竜巻ではなく孤独だったのだが、ペサラは光を司る〈光の姫君〉としての役割を放棄しようとはしなかった。自分以外の誰にも担(にな)えるようなものでもなかったが、ペサラはそれ以上に役割を失くした剥き出しの自分に何の価値もないことが明らかになるのではないかと恐怖していたのである。

ペサラは己の価値を疑っていた。それは母である初代〈光の姫君〉だったら抱くことなどない

悩みだった。太陽によって作られた母は賢しきヴィフィドと子を成したものの、本当の意味での〈人間〉らしい愛情はついぞ理解することがなかった。〈人間〉を父に持つペサラだからこそ〈人間〉からの罵詈(ばり)雑言(ぞうごん)に過剰なまでの戸惑いを覚え、己に与えられた役割に迷い、そして己の存在意義を疑ったのだった。

ペサラが困憊していく間にも、その眼下で竜巻が猛威を振るい続けていた。彼女への信頼を揺るがしたヤイジャリガ王とその家臣たちが王都ごと塵芥(じんかい)と化したが、心に覆う深い霧は一向に晴れなかった。

そして今この時も一つの町が竜巻に呑み込まれようとしていた。

「ビーヤニの町が……」

それは大地で最も多くの煙突を持ち、ペサラが光の管理をするようになってからも煙を絶やすことのなかった町だった。

以前、非難を気に病み不安げな顔をしているペサラを見かねたシャルナグが、それでも若い煙突掃除人たちが中心となって変わらず煙突を動かしてくれているのだと教えて聞かせたことがあった。そんな話を幾度となく聞き心の拠り所としている内、ペサラ自身もその住民であるかのようにビーヤニへの愛着を抱くようになっていたのである。

とはいえ〈光の姫君〉は決して暗愚ではない。そんなビーヤニにも自分を非難する者が少なからずいることには気付きつつ、ペサラはビーヤニとその住人を愛していたのである。

「ああ……」

その愛しい町が竜巻によって滅ぼされんとしているのを見て、ペサラの胸は張り裂けんばかりに痛んだ。己の無力を嘆(なげ)くしかなく、ただひたすらにビーヤニが救われることを思い念じた。かつて多くの〈人間〉が天を仰いで己に向けてそうしたように、ペサラは両の掌をきつく合わせ、大地へと祈りを捧げたのだった。

祈りも空しく竜巻がビーヤニに届いたそのときである。ペサラの目に、ビーヤニの中心部に黒い渦が生じるのが映った。

「あれは、何かしら……？」

黒い渦が百倍は巨大な竜巻へと果敢に挑むのを見下ろし、ペサラは思わず声を出していた。大地からでは途方もない現象としてしか捉えられないその激突も、天からは容易に俯瞰することができた。黒い渦と竜巻の回転は逆で、その二つがぶつかったところには火花が散るかのごとく気流が弾けていた。

「何か……聴こえるわ」

競り合うように拮抗する二つの渦をじっと眺めていると、ペサラの耳に不思議な音が届いてきた。微かながらも澄んだその音色は笛のもので、見下ろしているビーヤニから発せられていることがわかった。

姿の見えない奏者(そうしゃ)が笛の音に強い思いを込めると、黒い渦が驚くほどの力を発揮した。黒い渦は極大となった竜巻を圧倒し、なんとその進路を町から逸(そ)らすことに成功したのである。

「まあ！」

半壊はしたものの、ビーヤニの町は何とか形を残していた。だが、ペサラが喜色を浮かべたのは、それに加えて黒い渦と渦を操る笛の音色の存在に不思議な希望を感じたためである。

黒い渦はビーヤニを守っただけではなく、奏者らしき男を乗せて軌道を変えた竜巻の後を追った。ペサラは瞳を凝らし、獣の顎のように変化した渦の先端に立つ男を観察しようとした。

その刹那、男の方も顔を上げて天にいるペサラを見つめた。視線が交錯し、ペサラは驚きのあまり瞬(まばた)きも忘れた。男は笛を口に当てながら、そちらに向けて一心に視線を送っていた。「今からそちらへ参ります！」

男が叫ぶ声がペサラに届くが早いか、黒い渦は竜巻へと飛び込んだ。大地で最も壮麗な王都すら砂城のように塵に帰した竜巻に吞まれ、無事で済む者などいるはずがない。ペサラは全身から血の気が失せる気分で成り行きを見つめ続けた。

すると、竜巻の中を一筋の黒い何かが駆け昇るのが見えた。
「あ、あれは……」

うねる様は蛇のようだったが、それには短い四足があり、頭の形はどちらかと言えば獣に近く、獅子のたてがみに似た毛を生やしていた。未知の獣がひたむきに目指すのは、他ならぬペサラのいる天であった。

※ ※ ※

フオベが〈影虫〉に誰も見たことのない〈龍〉を象(かたど)らせたのには理由があった。魚(うお)であり蛇であるその姿は、竜巻という大気の流れを掻き分けていくのに最も適(てき)していたのである。

フオベは〈龍〉のたてがみの中に腰から下を沈め、ひたすら笛を吹き鳴らした。地上のあらゆる形有る物を滅ぼす乱流の中で、その脳裡に閃くものがあつた。それは、十一年前にフオベとその家族を襲った災禍のときの記憶だった。フオベはそこで、何度となく巡察使(じゅんさつし)や王都の役人に訊ねられ、自分でも努力したがどうしても思い出せなかった記憶を取り戻すと共に、己がなぜ〈影虫〉を操ることができたのかというこの答えをも掴んだ。

十一年前、生まれ育った町と諸共に竜巻に巻き上げられた少年のフオベは、そのような致死(ちし)の状況下にあっても天の〈光の姫君〉の所在を目で追っていた。その光を目に留め、微笑む少年の胸に折れた鉄材の尖(とが)った先端が突き刺さった。

フオベはそのとき確かに命を落とした。貫かれた胸から血とは違うもやもやとした何かが流れ出ていくのを感じた。薄れる意識の中で見えたのは形の定まらない黒い影だった。

フオベから流れ出た大量の影は、竜巻の乱流に散じることなくフオベの眼前に浮かび続け、徐々に人の形を取った。その輪郭は少年のものではなく、大人の男の体格――それはこれまで世界に変化の兆(きざ)しと共に姿を見せていた〈影(かげ)〉に違いなかった。

(……やっと見つけた)

世界の変化ではなく、己の目的のために姿を見せた〈影〉が声を出したとき、少年の目の焦点は定まっていなかった。〈影〉が翳(かざ)した掌から銀色の光が発せられ、竜巻に巻き上げられた

町のあらゆる残骸の影を吸い込んでいった。

(ようやく見つけた私の〈肉体(からだ)〉……決して滅んではならんぞ)

〈影〉は球状にまとめた影を、己の意識と共にフオベの胸に注ぎ込んだ。胸を貫いた鉄材は融(と)けるように消え去り、傷口も見er間に塞がっていった。また、銀色の光が少年を包み、荒れ狂う暴風の猛威を退(しりぞ)け、羽毛のようにゆっくりと柔らかく地上へと下ろしたのである。

※ ※ ※

黒い〈龍〉は竜巻を下から上に切り裂くように昇り、とうとうその頂きにまで到達した。荒れ狂う暴風を突き抜け、〈龍〉は地上とは比べ物にならぬほどの光で満ち満ちた場所に出た。溢れんばかりの光であったが、不思議と目が眩(くら)むことはなかった。

「ここが天かあ！」

フオベが物珍しそうに辺りを見回すと、その目前で大気に含まれる水分が凝(こ)り固まって褐色(かっしょく)の毛並みをした小さな鳥の姿を取った。

「よくぞ来た、小さき〈人間〉よ」

フオベは面食らったような顔をした。フオベは〈人間〉の中でも大柄な方である。そうでなくとも自分よりも遙かに小さな鳥にそんなことを言われ、フオベは奇妙な気分になった。

「人の身を保ち、自力でこの天にやって来た者など、今の今までおらなんだ。それこそ世界の開闢(かいびやく)以来初めてであろうよ」

フオベの戸惑いをよそに、小鳥はさえずり続けた。

「かの賢しきヴィフィドは人の身であったが、先代の〈光の姫君〉に招かれての昇天であった。かく言うこの私も、元は人の身を捨ててここに至った〈人間〉であるしな」

「へええ。小鳥殿も〈人間〉でらっしゃったのですか」

フオベが目を見開いて態度を一変させると、小鳥は自慢げに胸を張った。

「おっと、私のことなどを語っている場合ではなかった。さる高貴な御方が、貴殿に会いたいと仰っておる。私はその使いとして参ったのだ」

「高貴な御方……ってえと、まさか？」

フオベがある存在を思い描いたそのとき、まるで天幕が開かれたかのように光が揺らめいた。その中から亜麻色の長い髪をたなびかせつつ現れたのは、フオベが今思い描いた、そしてこれまで逢うことを希(こいねが)ってやまなかった存在だった。

「あ、あなた様は……」

白く輝く衣を纏う乙女に柔和な微笑を送られ、フオベは陶然となった。瞬きするのも忘れて見入るフオベの肩に小鳥が止まり、嘴でその耳を啄(ついば)んだ。

「あいてっ」

フオベは正気に戻り、耳を押さえながら抗議の視線で小鳥を見た。

「頭が高いぞ」

小鳥に諫(いさ)められ、フオベがしぶしぶ頭を下げる。それを見て、乙女は口元を隠してころこ

ろと楽しげに笑った。

「わざわざご足労をかける必要などありませんなのに。我が君ながら我慢のない御方ですこと」

主であろう乙女の様子を見て、小鳥は嘆息した。

「あら。こう見えても、あなたにはいつも感謝しているのですよ、シャルナーグ」

くすくすと笑いながら乙女が出したその名を聞き、フオベは驚いた。

「なんと、小鳥殿はあのシャルナーグなのか。かの〈炎(ほのお)の剣(つるぎ)〉の英雄にして、滅びて後〈光の姫君〉を助ける雲(くも)となったという……」

「然り。ただし、今では力のほとんどを失い、斯様に無様な姿しか見せられんがな」

言いながら、フオベが向けてくる敬意の眼差しにまんざらでもない風を吹かせるシャルナーグだったが、そこで乙女が少し面白くなさげな顔をしていることに気が付いた。

「……おほん、私の話はそれくらいにして」

慌てて取り繕(つくろ)うと、シャルナーグはフオベの肩から羽ばたき、乙女が差し出した細い腕に止まった。

「こちらにおわすは、天に坐(ざ)し、遍(あまね)く大地を照らす太陽光(たいようこう)を司る〈光の姫君〉ペサラ様である」

シャルナーグが口にした名は、フオベが幼い頃から繰り返し聞かされていたものだった。

「やっぱり、あんたがお姫(ひ)い……じゃねえ、〈光の姫君〉……」

そしてその名の主こそが、フオベが片時も忘れることなく追い求めていた存在であった。フオベはこれまでにないほどの喜びに全身が沸き立つのを感じつつ、しかし心は不思議なほど落ち着いていた。〈光の姫君〉を前にしながら、まるで清水(しみず)のごとく透明なものであるかのような心境だったのである。

5

「むむむ。無礼であろう。貴殿も名乗りを上げられよ」

シャルナーグは、微笑を湛えるペサラをいつまでも見続けるフオベを窘(たしな)めた。するとどうしたとか。フオベは逡巡(しゅんじゅん)することなくすっと立ち上がり、胸を張った。

「……おれはフオベ。ビーヤニの町の煙突掃除人だ」

「まあ」

あまりにもぶっきらぼうな名乗りに、ペサラは思わず目を丸くした。

「無礼な！」

血相を変えて腕から飛び立ったシャルナーグを、ペサラはとっさに両手で捕まえた。反射的な動作だったが、それは間違いなくペサラの本心が促(うなが)した行動だった。

「よいのですよ、シャルナーグ。構いません」

ペサラはたおやかに小鳥を肩へと導(みちび)くと、もう一度フオベと向き合った。

「フオベ殿。拝見させて頂きましたよ」

「と、言いますと？」

問い返すフオベに恐縮した様子はなく、素(す)の闊達(かったつ)さが全面に表れていた。ペサラもそれを不遜(ふそん)とは思わず、むしろ快(こころよ)く感じていた。

「先刻、竜巻に立ち向かっていたあなたの勇姿です。とても見事な手並みでありました」

「いや、おれだけの力じゃないよ。ビーヤニの仲間たちが協力してくれたし、何よりこいつがいなきゃ何もできなかった」

フオベが〈龍笛(りゅうてき)〉を軽く吹き鳴らすと、〈龍〉はその足下にかしづくように身を横たえた。

「その獣は、一体？」

大いなる者とはいえ、ペサラも龍を見たことがなかった。

「こいつは〈龍〉さ。〈影虫(かげむし)〉を操ってこの姿にさせたんだ」

「〈影虫〉とは？」

影のない天で生まれ育ったため、ペサラは〈影虫〉のことも知らなかった。

「煙突に湧く変な虫でね。ほら、本当はこんな姿をしている」

フオベが短く笛を吹くと、〈龍〉から掌(てのひら)に収まるほどの大きさの〈影虫〉の塊が切り離され、ペサラへと漂った。〈光の姫君〉の後光が〈影虫〉の纏(まと)う闇を引き剥(は)がし、ペサラの手元に届く頃には十数粒の丸い玉になってしまった。

「おれがここまで昇って来た理由は二つある。一つは、それだ」

「これは……」

掌に落ちた白い玉を見て、ペサラは驚いた。

「シャルナーグ、これはもしや……」

ペサラは玉を肩の小鳥に見せた。

「おお、これは失われし太陰(たいいん)ではありませんか！」

その場でただ一人、実際に太陰を目にしたことのあるシャルナーグは驚嘆した。〈影虫〉の中核である玉は、かつて天から地に降り散らばった太陰の欠片(かけら)だった。

「やっぱりそうか」

フオベは納得げに頷いた。フオベは、薄暗い煙突の中で初めて〈影虫〉を見つけた際に覚えた不思議な感興(かんきょう)を、なぜか見たことのない太陰と結びつけて考えていたのである。これは単なる直感ではなく、〈影虫〉が太陰の欠片であることはその後の研究を通して明らかとなった。また、時折降ってくる懐かしい感覚の正体は、この天を訪わんと大竜巻を遡っていく中で判明していた。

「つまり、その〈龍〉という獣が纏う闇とは……」

ペサラがわなわなと声を震わせたのはひどく当惑したからであるが、それは負の混乱ではなく、思いもしなかった僥倖(ぎょうこう)に接したためだった。

「ああ、夜さ」

快活に微笑むなり、フオベは唐突に手を伸ばすと、ペサラの華奢(きゃしゃ)な肩を引き寄せた。

「な、何をなさるのですか……」

生を享けてよりこの方、感じたことのない興奮がペサラの全身を駆け抜けた。衝撃ではあったものの決して心地の悪い感覚でなかったのは、その相手がフオベだったからであろう。初めてあったはずの無礼な煙突掃除人を、ペサラはなぜだか近しく感じた。〈光の姫君〉である自分とは全く違う存在、違うがゆえに自分にとってかけがえのない存在であるとまで思っていたのである。

「何をするかって？ 決まってるさ！」

フオベは〈龍笛〉を口にあてがうと、一つの旋律を奏(かな)で始めた。それは、竜巻と対峙したときのように激しく勇壮なものではなく、真綿(まわた)に墨(すみ)が染み込むような静かな広がりを持つ音色だった。旋律が天から地へと響き渡る様を目の当たりにし、ペサラはフオベが何を成さんとしているかに思いを至らせた。

「まさか、あなたはこの天に夜を呼び戻そうとなさってらっしゃるのですか？」

訊(たず)ねるペサラに、フオベは笛に全霊を傾(かたむ)けつつ、微かな笑みで返した。ペサラが気付いた通り、フオベは〈龍笛〉の音色を用いて大地の様々な暗がりに潜む〈影虫〉、つまり太陰の欠片を天に喚(よ)び戻し、太陰と夜の時を復活させようと考えているのだった。

そこでペサラが浮かべた涙は、心の底から溢れた喜びによるものである。ペサラは〈人間〉を慈しみながら、その反面でたやすく扇動(せんどう)される愚かなものと半ば諦めており、掛け値なく味方になってくれる存在はシャルナーグだけだと思っていた。その〈人間〉の中に、このように明確な意志で己を助けようとする者がいるなどと想像すらしなかった。

「おおっ！」

ふと、眼下に目を向けたシャルナーグが驚きの声を上げた。ペサラもそちらを見やると、大地のそこかしこから〈影虫〉たちが塊となりながら浮かび上がってきていた。それらはさらに集まって幾つもの筋を作ると、遠目から見ると緩やかに、近くからは目にも留まらぬ速さで天の一点――つまりフオベの元を目指した。そんな〈影虫〉たちの上昇運動が天と地の狭間に影響を及ぼし、大地を蹂躪した大竜巻の勢いすらもまるで中和するかのようには減衰させていった。

「なるほど！ あの竜巻は、かつて太陰が地に落ちたときに生じたもの。ならばその逆を行えば、即ち竜巻も消える道理か」

シャルナーグが感心して言う間にも、闇はさらなる闇を呼び、逆巻く夜の奔流が完全に竜巻を覆い尽くした。ここまでやれば音色がなくとも夜が帰還すると確信したフオベは、〈龍笛〉を吹くのをやめた。

「それい！」

とフオベが放り投げた〈龍笛〉に、幾筋もの夜の奔流が殺到した。〈影虫〉たちがそれぞれ内包する太陰の欠片は、〈龍笛〉を核として凝り固まり、そしてそれは次なる太陰となった。

太陰は闇を集めて天を覆(おお)った。世界に二百数十年ぶりの夜が訪れたのである。

「あなたの御陰で、夜が戻って参りました」

〈光の姫君〉ペサラは、絶えず圧しかかる重責から解放されたことに安堵(あんど)すると共に、一抹(いちまつ)ならぬ不安も感じていた。それは己に科せられた役目を失うことへの恐怖である。ペ

サラに残された役割は、司っていた光を身の内から開放し、太陰と対になる太陽として天に還すことだけだった。

「貴殿は大いなる功績を残されました。フオベよ、あなたは〈人間〉の中で最も気高き意志の持ち主です」

そう言いながら、ペサラは己の紡(つむ)ぐ言葉がうわべだけのものであると自覚していた。本心から伝えたい言葉はそうではなかった。自分が感じてきた来(こ)し方(かた)の辛(つら)みを、そして行く末に抱く不安を吐き出したかった。目の前のフオベがその全てに耳を傾け、己を受け止めてくれたらどんなに幸いであるかと願ってやまなかった。

「やめてくれ」

フオベは素っ気なく言った。いくらうわべの言葉とはいえ、まるで拒(こば)むように応じられ、ペサラの心は大きく軋んだ。これが母である初代〈光の姫君〉であったならば、意にも介さずに聞き流しただろう。しかし、〈人間〉の血を引くペサラにとっては心が碎けるほどの響きを持った言葉だった。

「おれはそんなに偉くない。おれは.....おれはただの〈人間〉だ」

そんなペサラの動揺をよそに、フオベは続けた。ペサラは顔面を蒼白にし、心でわななきながらそれを聞いた。フオベの言葉は「おまえが引く〈人間〉の血は半分だけであり、本当の〈人間〉の心を十全に汲(く)み取ることなどできない」と言われているかのように聞こえたのである。

「.....そうでありましょう。あなたは私とは違う。私たちは所詮、相容(あいひ)れぬ者同士ですもの」

ペサラはそう言うと、フオベの胸を突き飛ばすようにして身を離れた。

「お、おい、待ってくれ」

フオベはとっさにペサラの手首を掴み、離すまいとした。

「無礼者、離しなさい！」

ペサラが声を荒げる。その瞳(ひとみ)の色はまるで羞恥(しゅうち)と絶望に彩られた暗い虹が渦巻いているかのようにだった。しかし、気圧(けお)されながらもフオベはその手を離しはしなかった。

「おれは莫迦(ばか)だから、あんたが何で怒ってんのかはさっぱりわからねえけどもよ.....ちょっとだけ、話を聞いてもらえねえか。それが済めばさっさと帰るからさ。頼む、お姫(ひ)いさん」

ペサラは取り乱した心を必死に平静にしようと努め、何とか小さく頷かせた。

「ただし、その呼び方はやめてください。ペサラで構いません」

それを聞き、フオベは胸をなで下ろした。

「ありがとう、ペサラ。おれがここまで来たのは、夜を取り戻すためだけじゃないんだ」

フオベは煙突掃除のときにも見せないほど必死の眼差しで語りかけた。

「おれはそんなに偉い〈人間〉じゃない。あんたが言ってくれたように気高くなんてないし、意志なんて大層なものもほとんどない」

「では、あなたはどのようにして〈影虫〉を操ろうと考えられたのですか？ それはビーヤニの町を、そして大地を竜巻の脅威から守るためなのではないのですか？」

「それはだな……うーん、たまたまそうっただけだ」

ペサラに問われ、フオベは途端に歯切れが悪くなった。

「おれと〈影虫〉は、その……あれだ。同じようなもんなんだよ」

「同じようなもの、とは？」

ペサラは疑問符を浮かべ、小首を傾げた。

「だ、だから、おれはだな、〈影(かげ)〉が……その、夜を取り戻してだな……」

フオベは顔を真っ赤にし、全く意味のない身振り手振りをし始めた。

「……ええい、まどろっこしい！」

フオベは意を決すると、ペサラの肩を掴み、再び己の胸に引き寄せた。

「全部、こうしたくてやったんだよ！」

「え……」

思わぬ行動と言葉に、ペサラの心身は反射的に強ばってしまった。

「ずっと、ずっとあんたを見ていた。ガキの頃、祖母(ばあ)ちゃんにあんたのことを聞かされてから、ずっとだ」

「え、え……」

フオベのひたむきな言葉がペサラの全てを揺り動かした。

「町を救ったのは、孤児のおれを養ってくれた恩返しだ。けどよ、そもそも〈影虫〉を操ろうと思ったのは、竜巻を利用してここに来るためだ。夜を呼び戻したのは、そうすることであんたの悲しみや辛みが少しでも軽くなるならって何となく思いついたからだ。おれがそれを成し遂げられたのは、ガキの時分に〈影〉ってやつと一つになったからなんだが、そんなこたあどうでもいい」

天地が逆転するかのような気分になりながらペサラの一部分は不思議と冷静で、フオベの厚い胸板からの熱に安らぎを感じてもいた。

「わかるかペサラ？ おれが本当に救いたかったのは、町でも大地でも――他の誰でもない、あんたなんだよ」

「そんな……」

ペサラはうまく言葉を返せなかった。思いは止めどなく溢れてくるけれど、それを言葉にすることができない。ただ、自分が太陽ならばフオベは太陰、光ならば闇、自分たちはそんな不可分の関係であることだけは確信できた。

「ペサラ、おれのものになってくれ。お務めのない夜の間だけでもいい、おれと一緒にしてくれねえか」

あまりにも真剣な顔をするフオベを見て、ペサラはくすりと笑った。

「本当に、おかしな人」

そう言うと、フオベの首にしがみつき、口づけを以てその返答とした。

〈光の姫君〉の体から世界を照らす光が離れていく。大地を遍(あまね)く照らしたペサラの惜しみない愛は、フオベのみに注(そそ)がれることとなったのである。

かくして、〈世界(口カ・ダアツ)〉に訪れし四度目の試練は過ぎていった。これより後、ペサラは速(すみ)やかに太陽と太陰の運行を定め、天を司る役割から退いて一人の女としてフオベと夫婦(めおと)の契(ちぎ)りをかわすのだろう。

二人は多くの子を成し、それが大地を満たして第五の世界の礎(いしずえ)を築いて――。

第五の世界の礎を築いて――。

礎を築いて――。

築いて――。

いて。

て。

て。

て。

[illegible]

———おかしい。

何だ、これは――。

物語が停止しているだと？

物語が少しも進まないのはなぜだ！

ぼくはこの物語を綴(つづ)り終えたはずだ。

もうすでに物語を読み終えたはずだ……。

四つの物語を終え、五つ目の物語へと進み、そして《**■□■□■□■**》に至る門に到達するはず。

なのに、どうしてだ。

どうして、フオベとペサラが結ばれたところで止まっているんだ

「そのとき、【読み手】は驚くべき物を目にした」

だ、誰だ――？

「物語の登場人物にしか過ぎない二人、〈光の姫君〉と〈闇の操(く)り人〉が【読み手】を見つけ、直視していたのである」

誰とも知れない声に促されるように、名もなき書物の中のフオベとペサラがぼくを見た。
その表情は、大団円を迎えた登場人物の幸福な表情とはほど遠かった。
二人は眉根に皺を寄せ、確かにぼくを睨(にら)みつけていた。

「物語の中で、ようやく光と闇が混じり合い、時間と空間を超越する新たな獣が誕生した」

これは――。

「それにより、この名もなき忌まわしい書物に記されたあらゆる登場人物は世界の外を感知できるようになり、自分たちが物語の【綴り手】でもある【読み手】によって供(きょう)された贄(にえ)だということを悟った」

これは、ぼくが読まれているのか？

「自分たちを陥(おとしい)れた者の存在を知った彼らは、その姿を血眼(ちまなこ)になって捜し求めた」

誰だ。ぼくを読んでいるのは、誰だ！

「〈光の姫君〉と〈闇の繰り人〉は、二つの心身を一つにまとめて灰色の〈永劫(ズルワン)〉となり――」

い、いやだ、やめてくれ。

「【綴り手】にして【読み手】の両腕に時(とき)の枷(かせ)をかけた」

――がしゃり。

んな……っ、何だよこれっ！ 外してくれよ！

「すると、その額で不気味な輝きを放つ第三の目に亀裂が生じた」

びしり。

.....うっ、ぎいいやあああああっ！

「万能ともいえる二つの力——時と空(そら)とを自由に飛び越えることのできる力の片割れを失った【綴り手】にして【読み手】は——」

い、いやだ。

こんなところで終わりたくない。

「恨みを晴らさんとする追っ手たちから逃れようと、〈世界(ロカ・ダアツ)〉の第五季——空界(くうかい)へとその身を滑り込ませたのであった」

お——終わらせてたまるかっ！

そこは上も下も莫(な)い〈世界(ロカ・ダアツ)〉だった。

黒とも白ともつかない色が均質に広がっている。

ただ一人だけ、何も莫い空間を漂っている者がいた。

手枷(てかせ)をかけられ、書物を抱え、第三の目を持っている。

それが、ぼくだ。

漂っている、というのだろうか。

浮いている？

流されている？

それとも飛んでいる？

落ちているのかもしれない。

とにかく、そこにいるのはぼくだけだった。

ぼくは、逃げてきたのだ。

恐ろしい存在(モノ)から。

ぼくが綴(つづ)っていた物語から現れた、ぼくに綴るつもりのなかった存在(モノ)だ。

白紙の書物に記されていく物語に対してぼくは万能だった。

【世(せ)】――物語の時間(とき)はぼくの掌(てのひら)の中にあり、その針を進むも戻すも思いのままだった。

【界(かい)】――物語の空間(そら)はぼくの意識が届く範囲までしか存在せず、どこで切り取るかは気分次第だった。

物語世界において万能の存在であるはずのそのぼくを、物語に登場した存在(モノ)が恐怖させた。

――あり得ない。

あり得るはずがない。

そんなこと、あって良いはずがない。

しかし、光と闇が混ざり合い生まれた存在(モノ)が、こうしてぼくから時間の優位を奪った。

とっさに本を開き、空間を飛び越えて物語が記されていないこの白紙の頁(ページ)――空界(くうかい)に逃げてきたものの、追いつかれるのは時間の問題だろう。

方策を練らねばならない。

対策を講じなければならない。

光と闇が混淆(こんこう)して生まれたあれ――灰色の〈永劫(ズルワン)〉を打ち倒すことのできる存在(モノ)を、この空界で作り上げねばならない。

「おい、話が違うじゃないか！」

ぼくは虚空に呼びかけた。

ぼくにこんな力と本を与えた、あいつを問い詰めてやろうと思って。

――返答はない。

「こんなこと聞いてないぞ！ 物語の登場人物が襲ってくるなんて」

返答がないだけでなく、力を与えられたときのような周囲の存在感もなかった。

この空界は、文字通り空っぽの世界だった。

あいつの助けは望めない。

見捨てられた……のか？

いや、まだ手はある。

名もなき書物はまだ手元にある。

額に触れてみると、亀裂が入ってはいたものの第三の目にも半分の力――空間を自在にする力が残されている。

時間の針を失った今、世界の成長を自由に促進させることはできない。

ならば、まずは〈永劫(ズルワン)〉にたやすく見つからぬよう、この空界に広大な世界として創造する必要があるだろう。

「大地よ、在(あ)れ」

ぼくが高らかに宣下(せんげ)すると、膨大な量の塵がどこからか喚(よ)び寄せられ、凝り固まって足場を築き始めた。

「果てなき大地を」

大地は波紋が生じたように四方八方へと速やかに広がる。

これまでの世界とは比べ物にならないくらい大きな世界を創らねばならない。

見つけられる前に〈永劫(ズルワン)〉を迎え撃つことのできる物語世界に仕上げるのだ。

ぼくは降り立った大地に「ぼくの意識が届かないところまで広がること」と「様々な地形を隆起させること」を許した。

自動的に広がる大地に次々と多様な樹木が繁茂(はんも)していく合間に、ぼくは入り組んだ地形の中をくぐり抜けるように進んだ。

時間が自由にならなくなってしまった以上、うまく時間を稼(かせ)がねばならない。

時間を作り、あのうねり迫る〈永劫(ズルワン)〉を打ち倒すことのできる存在を生み出さねば――。

思考を巡らせようとしたそのとき、何者かが近付いてくるのが察せられた。

ぼくはまだこの空界に植物と微生物以外の生命を生み出してはいない。

反射的に、ぼくは近くの大岩の陰に身を潜めた。

「一体どういうことだ？」

動揺しつつも余裕があったのは、それが〈永劫(ズルワン)〉ではないとわかったからだだろう。

〈永劫(ズルワン)〉でないのならば、恐れることはない。

どんな獣が出てくるのかと待ち構えていると、大岩の陰から現れたのは一人の人間だった。

「何だと？」

岩の向こうから聞こえた足音は、確かに四足獣のものだったはずだ。

「……会いたかったぜ」

その人間は男で、小柄だが精悍な顔つきの少年だった。

「お、おまえは……？」

どこかで見た覚えのある顔であるように思えてならなかったが、何者であるかはどうしてもわからなかった。

「おいおい、忘れちゃったのかよ。悲しいじゃねえか」

男は表情を歪(ゆが)め、鋭い笑みを浮かべた。

発する気配はやはり獣のもので、端を吊り上げた口から尖(とが)った犬歯が覗いた。

「俺は……いや、俺たちは、こんなにもてめえに会いたがってたってのによ」

男の全身が、銀色の体毛に覆われていく。

四つん這(ば)いになるや両腕が前足と化した。

男は、一頭の狼(おおかみ)となった。

猛々しく雄叫びを放ち、狼はぼくへと飛びかかろうとした。

ぼくはとっさに大地に命じ、何本もの岩の柱を隆起させて狼の進路を阻んだ。

狼は軽やかに岩柱をかわすが、わずかな隙ができた。

ぼくはそこを突いて大地に千尋の断崖を開き、素早く後方へと駆け出した。

広がる自由を許された大地は、ぼくが知らないような地形をも思うがままに作り出していた。

奇怪な植物が密生する森に逃げ込もうとするぼくの前に幾つもの人影が立ちはだかった。

「またか！」

人影は数えて十あったが、その内で肉体を持っているのは先頭に立つ一人だけだった。

「来ると思っていたぞ」

言うなり、先頭の男の姿形が変わっていく。

男は雄々しい金色のたてがみを持つ獅子(しし)となった。

後ろに控える人影たちも、熊の影、鷹の影、蛇の影というようにそれぞれ異なる形に変わる。

獅子が轟(とどろ)くような咆哮(ほうこう)を上げると、九つの獣の影はそのたてがみに吸い込まれていった。

獅子は十頭の獣の特徴を具えた多頭獣となってぼくへと躍(おど)りかかってきた。

ぼくはとっさに足元の植物に意識を通わせた。

数千の蔓(つる)で多頭獣を縛り上げ、ぼくは再び逃げ出した。

すぐに追いつかれることは明白だった。

時間(とき)を失った以上、ぼくの力は絶対的なものではない。

世界という空間(そら)の中で定めた範囲でしか、ぼくの力は有効ではない。

ましてや、今はぼく自身がこうして世界に降り立ってしまっている。

一つの世界に所属してしまっている。

この世界で生み出した生命ならともかく、この世界の外から来訪した存在には――たとえそれが別の世界でぼくが創造したものであったとしても――ぼくの力は通じないのである。

ぼくは一心に念じて大地を割り、あらん限りの力と意識でそこにできた隙間を大海へと変じさ

せた。

そのとき、後方から多頭獣と狼が猛然と迫っていたが、さしもの獣たちも突如現れた大海には躊躇(ちゅうちょ)し、足を止めていた。

それを確かめるが早いか、ぼくは大海へと飛び込み、盛大な水飛沫(しぶき)を上げながら獣を振り切った。

創造したばかりの大海こそ、襲ってきた獣はおろかあらゆる生命のいない潔い場所であるはずだった。

ぼくはしばらく潜り、静かな海中で獣たちや〈永劫(ズルワン)〉を圧倒する存在(モノ)を作り上げようと考えた。

しかしその矢先、ぶくぶくという奇妙な音が海中に響いた。

ぼくが音のする方向に目を向けると、水飛沫と共に水面(みなも)に生じた無数の薄紅色の泡沫(ほうまつ)が、割れることなく身を寄せ合い始めているのが見えた。

ぼくは、数千はあるだろうその泡の一つ一つに異なる種の海生生物が包まれていることに気付いた。

泡の集合体の頂点であり最先端の泡には、小さな女が包まれていた。

人間の女に近いがその件のところどころに鱗(うろこ)や鰓(えら)、鰭(ひれ)といった魚の特徴が見られた。

半人半魚の小さな女がぼくを指差した。

すると、大小数万はあろう泡の内の全ての生物が一様にぼくを見定め、泡ごとすさまじい勢いで押し寄せてきたのである。

「うう、またか！」

ぼくは慌てて身を翻し、海の底へと潜っていった。

泡沫群は小さな女を先頭に錐のような形をとり、大海を攪拌(かくはん)しながらぼくを追隨した。

じわじわと距離を詰められつつ、ぼくは這々(ほうほう)の体(てい)で海底に辿り着いた。

海底には、これまた作り出した覚えのない途方もなく大きな二枚貝があった。

その中へと逃げ込もうとした瞬間、足元の岩盤に亀裂が走り、その下から青暗たる深き水とは真反対の赤く熱した溶岩が噴出した。

「う、うわああッ！」

溶岩はぼくに覆い被さるように広がった。

真紅の炎に押し包まれ、そのまま海底火山の火口へと引きずり込まれんとする中で、ぼくは空間跳躍を試みた。

こうなったら自力であそこに――。

《■□■□■□■》へと辿り着くしか手はない。

私がこの島に降り立ったのは、まるで真紅の炎に包まれたかのような夕(ゆう)だった。島を囲う堡礁(ほしょう)のさらに向こう、水平線の彼方で燃え盛る炎の上から、正(まさ)しく帳(とぼり)が下ろされるように闇が広がっていく。私はここまで鮮やかな夜への移(うつ)ろいを観たことがなかった。

夜とはいえ私が引きずる時間感覚ではまだ早い時刻だったが、帳はすでに地表までを覆い尽くしていた。頭上を仰(あお)ぐと、これまた観たことのない星空が広がっていた。星々が数え切れないほど瞬いているから――というだけではない。例え星々が強い光を放つもののみであっても、その星辰(せいしん)を判別することはできなかつたろう。私は星空と持っていた手記を何度も見比べ、そこに記された星辰との一致を確認した。

ここは南洋。ハワイ、ニュージーランド、ラパ・ヌイを繋(つな)いで描いたポリネシアン・トライアングルの臍(へそ)、ソシエテ諸島の一島である。諸々の事情により島の名はあえて秘(ひ)すが、ここを特定するのはさして難しくない。これから私が記す内容を読めばここに至る道程は自ずと浮き彫りになるはずだからである。

私がこの島を訪れたきっかけは、十年がかりで手がけてきた南洋文化研究の資料の一つとしてあるモルモン教徒の手記を手に入れたからだ。ポリネシアの文化に文字はなく、そのため疫病などの理由で島の人々が著しく減少した際に口碑(こうひ)伝承(でんしょう)が途絶えてしまうことがしばしばあった。失われた伝承は決して少なくはなく、私は斯(か)くのごとく断絶した文化を復元するためにこの島を訪れたのだった。

軽々しく口にすることのできない筋から入手した手記には百年前の諸島の様子が詳細に記されていた。特に、マラエと呼ばれる各島に少なくとも十基は残存する祭祀(さいし)遺構(いこう)の記録は史料価値が高かった。

マラエとは、民家ほどの広さの土地に石を敷(し)いて設定したいわば聖域のようなものであると理解されている。その敷地の奥まった場所には、大きな珊瑚(さんご)板(いた)を用いた箱状構造物「アフ」がある。アフはハワイではヘイアウとも呼ばれ、ラパ・ヌイではこの構造物の上にかのモアイが据(す)え置かれる。つまりアフとは、聖域であるマラエにおいて神なる存在の降臨を導く祭壇(さいだん)なのである。

諸島の中でも私が訪れたこの島には格段に多くのマラエがあり、海岸や山中の至るところに点在している物を全て合わせると八十基にも及ぶ。とはいえ、それほどのマラエを同時に使用したとは考えにくい。なぜならば、この島の人口は今に至るまでに三百人を上回ったことはなく、シャーマンの役割を果たす村々の首長は多いときでも十人に満たなかったからである。

論理的に考えれば、それら数多のマラエは時期によって区分ができるはずである。同時期に用いられたマラエは十ほどということになるのだろう。

――だが、もし。

私はそう考えずにはいられない。

もし、八十ものマラエが同時に使われていたとしたら……想像する度に背筋が凍りつくような

悪寒(おかん)を覚えるのは、それが決して突飛(とっぴ)な妄想でないことを知っているからだ。

百年ほど前、モルモン教徒が残した手記にその証左(しょうさ)となる忌(い)まわしい記述が残されていた。神の愛を説(と)きにはるばる訪れた敬虔(けいけん)なモルモン教徒は、シャーマンたる首長の相貌(そうぼう)がきわめて魚に近いことを指摘した上で「マラエの用途は人の欲望を満たすためにあらず」と記し、この島での布教は不可能であると絶望していた。

あえて話を横道(よこみち)に逸(そ)らすと、このモルモン教徒の絶望は決定的を射てはいなかった。私が訪れた現在の島は、首長はかけらも魚に似ていなかったし、小学校が併設されたカトリックの教会も二つ建てられているのである。

しかし、それは水面(みなも)に生じた泡が割れるまでのわずかな時間の営みでしかないということと私は確信している。

手記の最後の頁(ページ)には次の一文が書き残されていた。

星辰調(ととの)いし闇淵(やみわだ)に、
禁忌(きんき)の頂きより眺望(ちょうぼう)せし光景を記す。
罪咎(つみとが)を模(かたど)る鱗鱗(りんき)に汚穢(おわい)を纏い、
いと深き、いと暗き水底(みなそこ)から拳(こぞ)り来たる――

そこで筆跡は途切れていた。何を指しての記述かは解らないが、その殴り書きの様子から記した者の狂気を想像するのは難くないだろう。

私にはわかる。モルモン教徒は布教を諦めはしたものの、その代わりにこの島で崇められる神なる存在への興味を抱いたのだ。信仰の在り方を調査し、おぞましき偶像をその目で見ても彼は進む足を止めなかった。いや、むしろ邪悪な泥濘(ぬかるみ)に一度(ひとたび)足を踏み入れてしまったからこそ彼は後戻りできなくなったのだろう。

その記述から星辰がちょうど一回り経(へ)巡(めぐ)った今夜、私は手記が見つかったのと同じ場所――つまり、諸島で最も標高のあるこの禁忌の山〈モア・タブ〉の頂上から恐るべき光景を目の当たりにしている。

遙か南東の海中から陸地と見紛(みまが)うほど巨大な二枚貝が浮かび上がり、その口が緩慢(かんまん)に開かれていくのが遠目に見えた。その動きに呼応するように、堡礁の外からインド象三頭分はあろうかという巨大な人影が幾つも姿を現した。

巨影どもは島に上がるとそれぞれの祭壇の前に立てられた台座に腰を下ろす。月明かりが照らすその忌まわしい姿。瞼(まぶた)のないのっぺりと淀んだ双眸(そうぼう)。前屈(かが)みで頭頂から背にかけて尖(とが)った鱗(ひれ)を生やしている。そして、体表を覆うねじくれ曲がった醜(みにく)い鱗(うろこ)――ああ！ あの記述は、正にこの者どもの出現を指していたのだ。

私が声を上げたのは恐怖のためか。それとも歓喜に打ち震えているからであろうか。とにかく私はかつてモルモン教徒が目にしたのと同じ光景を肉視し、同じ狂気に包まれている。

――いや、違う。私はこれからその先を目にすることになるのだ。

開ききった二枚貝の内側には尖塔(せんとう)らしき建造物が無数にあった。最も大きな尖塔が夜

気を震わせながら崩れ、その中から巨影どもと比しても遙かに大きく、遙かにおぞましい存在(モノ)が立ち上がった。

頭と四肢とは別に、首の辺りから伸びる長く醜悪な数十本の触手を蠢(うごめ)かせながら、それはこの島へと近付いてくる。数百キロはあろう距離を、それはせいぜいがとこ数十歩で到達せんとしている。

興奮に全身を硬直させながら、私はある事実思い至った。あれが巨影どもを従える存在(モノ)であるならば、あれのための祭壇と台座もあらねばならない。しかし、この島にはあれほど巨大な存在を支えるマラエもアフもない。

大いなる存在はいよいよこの島へと迫った。悪臭すらも神々(こうごう)しく思える距離になり、それが神と崇められた所以(ゆえん)と共に私は全てを理解した。

「そうか。あれの玉座とはこの――」

※ ※ ※

気が付くと、ぼくは再び空界(くうかい)へと戻っていた。

頭が割れそうに痛い。

空間跳躍に失敗したのだ。

やはり不完全な状態では無理か。

今見た物語は一体何だったのだろう。

全くわからなかった。

あれはぼくの物語じゃあない。

じゃあ誰の――その正体を探っている暇はなかった。

「ここは……？」

ぼくは身を起こし、周囲を見渡した。

空界であることは確かだったが、やはり創った覚えのない光景が広がっている。

そこは見渡す限り炎が立ち上る焦熱の土地――なぜか見覚えはあった。

遙か前方に、陽炎(かげろう)に揺れる人影が見えた。

褐色の肌に黒い短髪の少女だった。

「おおおおおおッ！」

褐色の少女が吼え、ぼくへと駆け出した。

その目や口をはじめとする全身のあらゆる穴から炎が噴(ふ)き上がる。

さらに周囲の炎を取り込みながら二回りほど巨大化した少女は、その右手から発される紅蓮(ぐれん)の炎を赫(あか)き剣(つるぎ)に変えた。

逃げようと身を翻(ひるがえ)すと、後ろからもう一人の少女が歩み寄って来ていた。

鮮やかな赤い長髪に白い肌の少女が、左手から発する炎を大地に向けた。

大地が割れ、その合間から透き通った真水(まみず)が噴出した。

真水は赤髪の少女の全身を包んだかと思うと、碧(あお)き鎧へと変じた。

赤髪の少女は、無言のまま腰から碧き剣を鞘走(さやばし)らせ、ぼくの方へと駆け出した。
二人の少女はぼくを狙っているのか、それともお互いに敵対する関係なのだろうか。
赫き剣と碧き剣がぼくを挟んで交わらんとする。
その瞬間、ぼくは再び空間を引き裂いた。

3

夏休みのプール教室が中止になった。
理由は全国的な水不足だ。
学校だけでなく、住宅地の水道も毎日二時間の断水をしているほど深刻らしい。
ぼくはまだ小学生だけど、そんなことになるような予感はしていた。
だって、今年の冬の降雪量はここ三十年で最低だったと聞いていたし、うっとうしい梅雨(つゆ)
)だってやって来なかったのだ。
ニュースでは、農作物への影響とか熱中症で倒れた人の数ばかりが流れていたけど、ぼくと友達二人にはほとんど別の世界の話のように聞こえていた。
「ちえー、プールねえとつまんねえなあ」
フェンスの上でソーダ味の六十円アイスをかじりながらぼやいたのはゲンジくんだ。少し長い栗色の髪が熱っぽい風に踊らされている。
「そうかー？ おれはうれしいけどなー、プールなくて」
フェンスの下の芝生(しばふ)に座っているのはタカオくん。同じ六十円アイスを、溶けるスピードよりも速く舐(な)めきってしまおうと必死になっている。
「あはは。おまえは泳ぐの苦手だからなあ」
ゲンジくんが笑うと、タカオくんは唇を尖(とが)らせて、
「うるせー」
と言った。
ゲンジくんは、勉強や運動はもちろん何をやらせても完璧にやってのける。手先は器用だし歌も上手い。
タカオくんは算数と水泳は苦手だけど運動が得意で、少年野球の試合ではいつも大活躍しているのだそうだ。
「ふふふ」
つられてぼくも笑うと、タカオくんはほっぺたを膨(ふく)らませた。
「ひでえよ、シュン。おまえまで笑うなんて」
「えっ、ご、ごめん！」
悪気なんて少しもなく自然に出た笑いがタカオくんの怒らせてしまったと思い、ぼくはすぐに頭を下げた。
「なーにアヤマってんだよ。ジョーダンだってば」
顔を上げると、タカオくんが苦笑していた。

「ばーか。おまえのジョーダンがサムイから、フォローしてくれたんだっつの。な、シュン？」

ゲンジくんはぼくに笑顔を向けると、ぴょんとフェンスから飛び降りた。もちろん、ぼくにタカオくんをフォローしようなんて考えはなかった。ただただ嫌われたくなくて、謝ってしまっただけだったのだ。人をフォローするどころか、実際にはこうやってゲンジくんがぼくのフォローしてくれていた。ぼくはそのことをよくわかっていた。

「なんだよー。なんかおれだけナカマはずれにされた感じだぞー」

悔しそうなタカオくんをからかうように、ゲンジくんはぼくの肩に腕を回した。

「そりゃそうさ。だって、おれたちはうちのクラスナンバー1(ワン)と2(ツー)だからな」

ゲンジくんが口にしたのは、一学期にたった一回しかなかった水泳の授業で、クロールで二十五メートルを一番速く泳げたのがゲンジくん、二番目がぼくだったという話だ。

「ひでーひでー！」

大げさにわめくタカオくんの順位はというと、下から数えた方が早かった。言うまでもないことだけど、ゲンジくんは本気でからかっているワケじゃないし、タカオくんも本気で怒っているワケじゃない。全部、友達同士のじゃれ合いだ。

――そう、〈友達〉同士の。

二人と一緒にいるとき、ぼくはいつも嬉しさや楽しさと一緒に怖さも感じている。

ぼくは今年の五月に都内の私立小学校からこの県に転校してきた。

理由は、いじめだった。

転校したばかりの頃は、友達を作れるような気持ちじゃなかった。前の学校の同級生たちは、思い出すと眠れなくなるくらいに残酷さをぼく一人に向けてきた。同じ教室で、同じ黒板を見て勉強して、同じ空気を吸って、吐いているはずなのに、彼らの姿はまるで、絵本に出てきた橋の下に住むトロールのように不気味で、卑怯(ひきょう)で、そして醜(みにく)かった。

いじめられた原因は、今もよくわからない。ぼくはおとなしい性格で、ケンカどころか言い争いすらイヤだった。いじめの理由はよくわからないけど、知らない内に何かみんなの気を悪くすることをしてしまったのだろう。そんな覚えは全くないけれど、ぼくはとにかくそういうことにしておいて、あのときのことは心のはじっこに閉じ込めるようにしている。

けれど、その〈何か〉が何なのかはどうしても気になってしまう。

いじめられることがなくなり、次にやって来た恐怖はそれだった。

みんなに好かれたいだなんて、全然思わない。ぼくが気になって仕方ないのは、何をしたら嫌われないのだろう、みんなの邪魔をしないでいられるのだろうということだ。

転校してからの二ヶ月間、学校にいるときは毎日毎時毎分毎秒そのことばかりを考えては怯(おび)えていた。

考えることに疲れて、ふと気を抜いてしまったのが七月の水泳だった。保育園の頃からスイミングスクールに通わされていたお陰で、勉強も運動もイマイチなぼくの中で水泳だけは唯一得意なものだった。

ぼくも水泳は嫌いじゃなかった。水に入ると、重くて仕方ない荷物を下ろしたような軽やかな気分になれるからだ。

あの日も、気が付いたら二十五メートルを泳ぎ終えていた。水から顔を上げた途端、わあっという歓声が聞こえた。そこでようやく、クラスのヒーローであるゲンジくんと争って、タッチの差で負けていたことを知った。

「すごいな、おまえ」

プールから上がったぼくの肩をゲンジくんが叩いた。ぼくのようなやつに追い詰められたことを悔(くや)しがる感じは少しもない、きらきらとした笑顔だった。

「ゲンジが負けそうなところ、初めて見たぜ」

逆の肩を小突いたのはタカオくんだった。ぼくの方こそ、あんな風にほめてもらえたのは初めてだった。

それが、ぼくが二人と友達になったきっかけだった。

友達に、なった――。

――はずだ。たぶん。

こうして一緒に遊んでいても、やはりぼくの心には不安が残っていた。ゲンジくんとタカオくんがぼくを認めてくれていることは、よくわかっている。不安なのは二人の今の気持ちじゃなくて、これからぼくが二人の気持ちを損ねてしまわないかということだ。

二人に嫌われたくない。

二人に傷つけられたくない。

――いいや。

何より、ぼくは二人を失いたくなかった。

そんな感じで心を揺らしながら、夏休みが始まってからというもの、毎日欠かさず二人と遊び回っている。

小学生にとって夏のプールがないということは、まるっきりの自由を手に入れたということだ。

ぼくらの日課は、林での虫捕りと小川での釣りだった。

「よし。今日もやるかー！」

ゲンジくんはそう言うと、アイスのはずれ棒を放り捨ててフェンスにかけていた捕虫網(ほちゅうあみ)を取った。

「お、いいねえ」

タカオくんも自分の網と、青いポリバケツを持った。

「あっ、待ってよ」

素早く行動する二人に置いていかれないよう、捕虫網のないぼくは大あわてで三人分の虫籠(むしかご)を肩にかけた。

水不足と関係しているのだろうか、今年はいつになくミンミンゼミが大量発生した年だった。

どの木もセミが満員状態で、ぼくらのような子どもでも素手で届くような高さにまでびっしりと止まっていた。

獲物はもう一つあった。猛暑と水不足のために川の水が急に減っていて、ザリガニを捕まえるのも簡単だったのだ。日陰で水の溜まる場所を見つけさえすれば、バケツで一すくいするだけで入れ食い状態だった。

しかし、ぼくらは初日で途方に暮れた。虫籠にぎゅうぎゅう詰め of セミはハネがボロボロに碎けてしまい、バケツ一杯のザリガニは腐臭(ふしゅう)をプンプンさせていた。持って帰る気はないけど、一日がかりの収穫物だ。そう簡単には捨てられなかった。

「学校のプールに持ってこよう」

ぼくは思いつきをそのままを言ってみた。夏の水泳教室はなかったが、プールには半分ほどの水が蓄えられていることを校舎から見て知っていたのだ。

「え、ヤバくね？」

タカオくんはためらったが、ゲンジくんは違った。

「いいじゃん、それ」

その一言で、ぼく of 案は実行されることになった。

それから二週間、ぼくら三人は学校へ忍び込んでフェンスの外からプールへ収穫物を投げ込んだ。

「あいつら、共食いとかしてんじゃね？」

はじめはびくびくしていたタカオくんが楽しげに言う。

「だなー。全員で食い合ってるうちにレベルアップで進化したりして」

ゲンジくんが嬉しげに答える。

ぼくも楽しく、嬉しかった。けれど、それは二人とは違う理由だ。ぼくにとっては、二人が楽しんで、嬉しがる様子を見るのが何よりの喜びだった。この時間がいつまでも続けばいい、と思った。

ぼくは、二人がもっと喜ぶことを内緒でしてみようと考えた。

何がいいかな、と頭をひねった。

――そうだ、と閃(ひらめ)いた。

そして今夜。ぼくは、前にお父さんがアメリカ出張のお土産でくれた隕石(いんせき)のカケラを持って家を出た。これをくれるとき、お父さんはこう言った。

「隕石っていうのは流れ星と同じ物なんだ。シュンがちゃんと大切にしていれば、きっと叶えてくれるよ」

その言葉を頭の中で何度も思い出しながら、ぼくは音を立てないように夜の道を走った。

学校に着くと、いつも使っている抜け道を通してプールのフェンスまで入った。

「二人の考えていた通りになりますように！」

そう願いを込めて、ぼくは隕石のカケラをプールに投げ入れた。

びちゃり、という音が一回だけ立ち――。

そして、青白い煙が夜空へと噴き出した。

硫黄みたいな悪臭がプールの外へと広がった。

鼻が曲がりそうなほどの悪臭も気にならないほどぼくは興奮し、夢中でフェンスをよじ登った。

「す、すごい……」

フェンス上から見えた光景に、ぼくは息を呑んだ。

セミとザリガニの死骸がプールの水面を埋め尽くすほど浮かんでいる。

その中で生き残ったモノたちが、プールの真ん中に集まって、もぞもぞと動いていた。

きっと、その下に、投げ入れた隕石があるのだろう。

気持ち悪い団子みたくになっている生き物たちは、元よりもずっと巨大化していて、しかもさらに形を変えていく。

ザリガニの背中から透明なハネが生え、ハサミが鋭く尖っていく。

セミの頭が二つに割れ、脳ミソによく似たキノコのような物体がもこもこと盛り上がる。

「ゲンジくん、タカオくん。こいつら、やっぱり進化したよ！」

変態を終えた異形(いぎょう)のモノたちの無機質な眼が、フェンスの上のぼくを一斉に見た。

※ ※ ※

これじゃだめだ。

でも、もう少しで届く。

信じろ、物語の力を――。

4

冬枯(が)れて灰色の空気の中を、私は藁(わら)にも縋(すが)るような思いで駆け抜けた。町外れにある屋敷の門をくぐり、体当たりをするような勢いで古びた扉を叩いた。

「お、おい、いるか？ なあ、開けてくれよ、アヴィ！」

すぐに応答は来ない。忌々(いまいま)しいくらいにいつも通りの無反応だった。

舌打ちしながら五分ほど粘ったところで、それまで巖(いわお)のように堅かったドアノブが回った。ほとんど独りでに開いた扉の向こうへと入ると、内側からしっかりと錠(じょう)をかけた。そんなことは無駄だということは理解していたがそうせずにはいられなかった。あいつに追いつかれないようにという焦燥(しょうそう)により私の理性は機能しなくなっていたのである。

「ア、アヴィ！」

私は外套(コート)も烏打帽(とりうちぼう)も脱がず、先ほどから幾度となく呼ぶその名の主が箆(こ)もっている書斎へと駆け込んだ。書斎にしては余りにも広いその部屋には、入ってすぐに応接の空間があり、その奥に突き当たりの壁が見通せないほどの書棚が図書館のように並んでいた。オーク製の両袖(りょうそで)机(つくえ)の向こうで安楽椅子が私に背を向けている。

「なんだい、騒々しいねえ」

安楽(あんらく)椅子(いす)が軋(きし)んだ音を立ててこちらへと回ると、肩口で切り揃(そろ)えられた金髪と鮮やかな輝きを秘めた碧眼(へきがん)の女性が現れた。

「ここしばらく無沙汰(ぶさた)だった分を取り戻そうと騒ぐのは勝手だけどさ。ねえ、エドワード？」

東洋の煙管(きせる)をくゆらせ、背もたれに体を預ける姿は二十歳そこそこの淑女(しゅくじょ)である。だがその眼光は猛禽(もうきん)のように鋭く、私は心臓を鷲掴(わしづか)みにされたかのように身を竦(すく)ませてしまった。

「あんた、忘れちゃいないかい？　ここがこのあたしーアビゲイル・エヴァンジェリンの屋敷だってことをさ」

煙管をふかす彼女の着衣はブラウスにズボン姿で、まるで男の装いのようだった。これも特別なことではなく、彼女はいつもその姿をしている——つまり、彼女はいわゆる男装の麗人(れいじん)というやつだった。

「わ、わかっているさ、アビゲイル。だからこそ、私はここに来たのだから」

私は大量の汗をかきながら言葉を絞り出した。体の前面から噴(ふ)き出すのはアヴィに対する脂汗(あぶらあせ)、背中から流れるのは恐怖からくる冷や汗である。

「大方の察しはつくさ。生半可な知識で厄介なものに手を出していたんだろう？」

アヴィは呆(あき)れた風にわざとらしく鼻を鳴らした。その眼光は背中の中冷や汗すら見通していたようだった。

「あんたはいつもそうさ。才覚も努力も一流にはほど遠い癖に、好奇心と虚栄心と自尊心は人一倍。隠れて動いていたのも、あたしに知られて横車(よこぐるま)を押されたらかなわんとでも考えたのだろう、ええ？」

「む……」

アヴィの的確な指摘に、私は口を噤(つぐ)まざるを得なかった。

「——で、こそこそ準備して、何を喚(よ)び出したってんだい？」

私はごくりと喉を鳴らし、重々しく口を開いた。

「……い、犬だ」

「犬だって？　〈吠(ほ)えるもの〉の類(たぐい)ってことか。どこぞの墓地から翡翠(ひすい)の護符(ごふ)でも持ち出したのかい？」

アヴィはにやりと笑った。私のような木(こ)っ端(ぱ)術師には、その程度のことはできないとも思って小馬鹿にしているのだろう。矜持(きょうじ)を保とうとする気持ちとアヴィに縋(すが)りたい気持ちがジレンマとなり、私の胸中で渦を巻いた。

「ち、違う……私は高次(こうじ)への壁を越えようと……」

あそこで視た名状しがたい光景を思い出すだけで総身(そうみ)が震えて奥歯が鳴る。そんな私を見て、アヴィはようやく起きつつある事態の重大さを捉えた。

「ってえことは……〈獵犬(りょうけん)〉か。ちっ。よりもよって、ってやつだね。全く、小人(しょうじん)閑居(かんきょ)して何とやらとはよく言ったもんだよ」

アヴィの皮肉に内心で臍(ほぞ)を噛みながらも、私は何も言い返すことができなかった。

そもそも、私はどうしてあのような犬などに付きまといられるような愚考を犯してしまったのだろう。確かに私は、アヴィに指摘されたように才能と実力の伴(ともな)わない虚栄心と自尊心を肥大化させている。適切な努力を積み重ねられてもいないのだろう。甚(はなは)だ口惜(くちお)しくはあるが、だからこそ私がそのような――高次へ到達する道筋を見出すことなど、到底できるはずがないのである。

けれども、私は雷に撃たれたかのような閃きを得(え)、書棚を整理するようにそれを成すための理論を構築し、周到な準備をした上で行動を起こしたのである。我がことながら自分が自分ではないような気がしてならなかった。その違和感はここに至っても続いているのである。

「――あんた、誰だい？」

アヴィがそう言ったのは、まるで、そんな私の疑問を察したかのようなようだった。その眼は変わらず私を捉(とら)えたままだったが、碧い瞳の奥には知的な興味の光が迸(ほとばし)っていた。

「と、突然何を言い出すんだ。私はエドワードだ。君もよく知るエドワード・スターリングだよ」

アヴィが気付いてくれたことに喜んでいたはずなのに、口から出たのは真意とは全く逆の言葉だった。そこでようやく私は、私ではない何者かに操られていたのだと確信した。私という人格の九割がその何者かに浸蝕され、主導権を奪われていたのであった。

さしもの私も、今日ばかりはいつも辛辣(しんらつ)な男装の麗人(れいじん)が私の発する嘘を看破することを願ってやまなかった。

「そうだね。あんたは確かに洩(はな)垂(た)れのエドさ。呆れるほど浅学(せんがく)にして、哀れなくらい非才(ひさい)の魔導師(まどうし)――」

しかし、アヴィはその期待に応(こた)えることなく何者かの言葉に調子を合わせてしまった。「そ、そうさ」

絶望に襲われた本心に反し、何者かは私の顔にへつらいの笑みを浮かばせた。

「……そうだよ、あんたにある才能はたった二つだけさ」

「私の才能だって？ それは一体何だい？」

私を操る何者かは、なぜだか激しく動揺していた。

「決まってるじゃないか。悪意を喚び込む才と、それに影響を受けちまう才さ」

アヴィは不敵に笑った。墮天使も斯くあらんという邪惡な笑顔も、このときばかりは大天使の祝福のように感じられた。

「何だって？ じゃあ君は、亡霊のような何かが私に取り憑(つ)いて、高次の壁を越えさせようとしたとでも言いたいのかい？」

語るに落ちるとは正にこのことだった。こうなっては男装の麗人にして邪(よこしま)な天使である彼女に勝てる見込みはない。押しやられつつある私自身の意識は声なき快哉(かいさい)を叫んだ。

「はん。何かが私に取り憑いた、だって？ 笑わせるじゃないか」

「何だと？」

私は声を荒げ、身を乗り出した。

「待ちな！」

アヴィは安楽椅子から身を起こすと、掴みかからんばかりの剣幕の私を迎え撃つように両袖机を跳び越えて煙管の先を鼻先に突き出す。すると、あれだけいきり立っていた私の体が時を止められたかのように硬直してしまった。

「余計な話をしてる場合じゃないんだろう？」

口の端を釣り上げるアヴィに観念したのか、私はこくりと頷いた。

「よし。良い子だね」

アヴィが煙管を持つ手を下ろしたそのとき、書斎の入り口から鼻が曲がりそうな臭気が漂ってきた。酢漬けの大蒜(にんにく)が腐ったような悪臭である。

「ちっ、犬コロめ。断りもなくあたしの家に這入(はい)ってきやがった」

アヴィは顔を歪めると、踵(きびす)を返して書棚の方へと歩き出した。

「おっと」

顔だけを振り返らせ、指をぱちりと鳴らすと、私の体に自由が戻ってきた。

「エド、あんたはとにかく歩いてな」

「あ、歩く、だって？」

そんなことをしている間に、悪臭の主に襲われてしまうのではなかろうか。その恐怖だけは、私が私に憑依している何者かと共有できた唯一の感情だった。

「ああ、ひたすら歩き回るんだ。円を描くようにしてね。決して鋭角を作っちゃいけないよ」

私はすぐさまアヴィの言う通りに行動した。書斎と呼ぶのをためらうほどその部屋は広く、私は一周二十メートルほどの円を描くようにイメージしながら応接用のソファの周りを歩いた。すると、それまでひしひしと迫ってきていた悪臭の濃度が心なしか薄まってくるように感じられた。

心にわずかな余裕が生まれ、私は細心の注意を払って足を運ばせながら、書棚の影に消えたアヴィに声をかけた。

「な、なあ。その〈猟犬〉ってのは――」

「気を逸らすな！」

見えないところからの一喝に、私は喉から心臓が出るほど驚き、それからは黙々と早足でひたすら円を描き続けることにした。

数分後。十二周ほどした頃、男装の麗人は三冊の書物を脇に抱えて戻ってきた。

「.....全く。あんたも魔導師の端くれなら、〈猟犬〉の何たるかくらいは知っておくんだね」

アヴィは机上に腰をかけ、ズボンに包んだ長い両脚を組んだ。

「折角の危機だ。ただ逃れるのではなく、好機としてお勉強でもしようじゃないか」

幼年学校の教師のような口調で言いながら、アヴィは持ってきた書物の一冊を開いて頁(ページ)をめくり始めた。

「あんたを追っている〈猟犬〉は、文字通りの犬というわけじゃない」

「あ、当たり前じゃないか。どこの犬が時空(じくう)を超えて追ってくるものか」

アヴィが言うあんたとは私を操る何者かであり、それに答えたのもその何者かである。私、エドワード・スターリング本来の意識は仕方なく、二人のやり取りを傍観するという立ち位置を取ることにした。

「そりゃあそうだね。けれど、そいつは犬なのさ」

「どういうことだ？」

「どうもこうもない。与えられた本質が犬と同じってことさ」

「犬の、本質だと……」

何者かは歩きながら呆然と呟いた。

「あんた、犬を飼ったことはあるかい？」

「いや、私はない。犬は好きじゃないんだ。昔、叔父(おじ)が飼っていて、親に連れられて訪ねる度に吠えかかれた思い出があつてね」

この何者かにそんな思い出はなかった。エドワードとしての私の記憶を引き出して語っているのだ。非才と蔑(さげす)まされた私でもそれを察する程度の干渉はできた。

「それさね」

アヴィはやはり、私の内面的闘争には素知らぬ顔で会話を続けた。

「……そうか。犬の本質とは、主人の命令に忠実に従うということか。そして、知らない者に吠えかかる、と……」

何者かが理解したのを見て、アヴィは軽く頷いた。

「犬が吠えるのは、即(すなわ)ち警告(けいこく)さ」

そう言うと、手にしていた書物を私に見えるように開いた。アヴィが見せた頁には、奇矯(きぎょう)な風体(ふうてい)の男が袋を通した棒を肩に担(かつ)ぎ、何処(いずこ)とも知れぬ道を進んでいる挿し絵があった。

「〈愚者(ぐしゃ)〉か……」

近年、魔導師や占星術師でなくとも知られるようになってきたが、〈愚者〉とは二十二枚ある大アルカナの0(ゼロ)場面のカードである。アヴィが開いたのはタロットの研究書であるらしかった。

「ようくご覧よ。何処かへ向かおうとする男の後ろから、犬が吠えかかっているだろう？ これは、この世界の外へ出ようとする事への警告を発しているのさ」

「この世界の外……だって？」

「タロットにはもう一つ、犬が描かれているものがある。わかるかい？」

「……つ、〈月(つき)〉だ」

「そうだね。じゃあ、〈月〉のカードに描かれている三つの要素を言ってご覧」

いくら私でもそのくらいの知識はあった。だが、何者かにはなかったらしい。何者かは再び私の記憶を検索し、その知識を引き出した。

「上段には夜空に光る月。下段には水があつて、ザリガニのような甲殻類がいる。その間に二頭の犬が――」

そこまで口にして、何者かはアヴィの言わんとしていることを悟った。

「〈月〉に描かれた犬も、警告を発する者なのさ。それだけじゃない、この二頭は門番でもある」

「も、門番……？」

「ああそうさ」

アヴィはタロットの本を傍(かたわ)らに置くと二冊目の書物を開いた。一冊目と比べて半分にも満たない厚みのその本は、よく観察すると印刷されたものではなかった。

「それは、拓本(たくほん)か？」

拓本とは、石碑などに刻まれた文字を紙に写し取ったものである。それを何十枚も綴(つづ)った物が、アヴィが二冊目に開いた本だった。

「これが何だかわかるかい？」

「いや……」

拓本の文字は私の知らないものであり、何者かにとっても未知であった。

「『下のものは上のものごとく、下のものは上のものごとし』さ」

言葉で解読してもらい、初めて理解することができた。と同時に、理解する以上の衝撃が私を襲った。

「エ、【エメラルド・タブレット】か……」

そう呟いたのは、抑圧されていた私本来の意識だった。アヴィの授業により、いつの間にか取り憑いた何者かの影響は弱まり、主導権を奪い返せるようになっていたのである。

そこでアヴィが笑みを浮かべたのはそれを察したのか、それとも単に【エメラルド・タブレット】という名称を言い当てることができたからだろうか。目敏(めざと)い男装の麗人のことだ、おそらくはその両方だろう。

【エメラルド・タブレット】——その名の通り神であるヘルメスがエメラルドの石版に記したと言われる書物である。しかし写本こそ点在するものの、実物の石版はまだ一枚も見つかっていないはず。少なくとも、私の知る限りでは。

「ほら。こっちには〈防壁の番犬〉についての記述が書かれている。『時の存在せざる彼方の空間に、通り過ぎて行かんとするものを待ちて横たわる。番犬は角度をなしてのみ動き、弧を描く次元を動くことはできない』だとき。ご丁寧に、気をつけろ、と再三の忠告付きだ」

アヴィは拓本を私に向けたまま、内容を誦(そら)んじてみせた。

「門番である〈獵犬〉と、防壁で待ち構える〈番犬〉……」

そう言いながら、私はこれまで与えられた情報の整理ができていなかった。

「あんたときたら本当に浅学だね。今あたしが口にしたのは、拓本なんぞ持ち出さなくてもそこから出回っている不完全極まりない断片の、それも写本にも書かれている程度の内容だよ」

普段通りのからかい口調でアヴィが語りかけてくるが、今の私には不明を恥じて赤面するような余裕はなかった。

私は悟っていた。アヴィが与えてくれた情報の整理ができていないのではなかった。整理し、繋げ合わせることそのものを避けていたのだ。

犬の本質。

タロットの〈愚者〉と〈月〉に描かれた犬。

エメラルド・タブレットに刻まれた〈番犬〉。

今も私を捕らえようと牙を研いでいる〈獵犬〉。

繋ぐのは簡単だ。どれをどう繋いでみても、結論は同じだからである。私が恐れているのは、その結論そのものが暴かれることだったのである。

そして、眼前に座る男装の麗人は容赦(ようしゃ)なくそれを暴いた。

「さあ締め括りといこう。つまり、高次の世界だか世界の外だかは知らないけれど、あんたが向かうとしていた場所への途上にも門があったってことだ。間抜けなあんたはそこに〈番犬〉であり〈獵犬〉でもある凶悪な存在(モノ)が待ち構えていることにも気付かず、その〈窮極(きゅうきょく)の門(もん)〉をくぐろうとしたんだ」

「き、〈窮極の門〉！」

その言葉を聞き、私のあらゆる毛穴から脂汗が噴出した。

「目的は何だったんだろうね。高次の壁を超越して時間を自在にしたかったのか。それとも、門の向こうにある《いや果ての空虚》へ至ろうとでもしたのかい？　なあ、教えておくれよ、エド？」

何者かは答えることができなかった。アヴィの授業が終了のベルを鳴らすのと同じく、私の内面的闘争も終焉を迎えていたのである。

「いいや、違うね。あんたはエドワード・スターリングじゃない。あんたは――」

アヴィが耳慣れない名を口にした。それを聞いた途端、私の視界は真紅に染まった。私の体は意思に従わず円を描くのをやめ、獣のごとくアヴィへと飛びかかっていた。男装の麗人は狼狽(ろうばい)することなく、流麗な動作で三冊目の書物――出来損(そこ)ないの藁人形のような異形が表紙に描かれた本を私に向けて開いた。何も記されていない空白のページの合間に鋭角が生じる。そこから悪臭を伴って吹き出した銀緑色(ぎんりょくしょく)の煙が、汚(けが)れた顎(あぎと)を形作り、そして私へと――、

5

仮住まいを飛び出したぼくは、幾度目かの空間跳躍を行った。

犬どもに尾(つ)けられぬよう、螺旋(らせん)を描きながら遙(はる)けき虚空(こくう)を目指して跳ぶ。

もうちょっとだ。もう少しで手が届く。

惑星の重力から逃れ、広がる星辰(せいしん)が幾筋もの流れとなって後方へと走る。

銀河を抜け、宇宙を抜け、そして――。

※ ※ ※

跳躍を終え、ぼくは振り返った。
忌々しい犬どもの気配は――ない。
どうやら捲(ま)くことに成功したようだ。
前方に向き直り、ぼくは息を呑んだ。

※ ※ ※

星々の海の外は、虚無でありながら無限量の羊水(ようすい)で充(み)たされていた。
羊水に揺られながら、一人の少女が微睡(まどろ)んでいる。
すぐそこにいるかのように思えたが、それは錯覚だ。
少女が揺蕩(たゆた)っているのは、遙か遠く離れた場所である。
少女は大きく広げた腕の内に、無数の卵を抱えていた。
ぼくは、その卵が宇宙卵(うちゅうらん)であることを直感的に理解した。
無数の卵が内包する宇宙の相(そう)はそれぞれ異なり、また、その殻にも同じ物は二つとして
ない。

文字通りの卵殻だけ数えてみても、鳥類、爬虫類、両生類といったあらゆる形状があった。
のみならず、全ての植物の種子や花蕾(からい)も少女の腕の中にあった。
虫蛹(ちゅうよう)や繭(まゆ)、真珠貝の殻など、卵の形ではない有機物もある。
あの奇妙な形の植物は、アリノスダマだろうか。
少女は有機物でない物も多く抱えていた。

雪玉。

砂の城。

真鍮(しんちゅう)の球。

寄木(よせぎ)細工の箱。

着色硝子(ガラス)の小瓶。

アオサギのコロニー。

使い古された目覚まし時計。

またはハッカ飴の包み紙、パイ生地の薄皮、虹色の泡沫(ほうまつ)――。

多種多様な形状の中で例外のように、同じ形をした骰子(さいころ)が二つあった。

(なぜだろう?)

ぼくが疑問に思った刹那に答えが伝わってきた。

二つの骰子はそれぞれ異なる唯一物で、一つは出目が運命(うんめい)で決まり、もう一つは偶然(ぐうぜん)で決まるのだそうだ。

そう教えてくれたのは、目の少女なのだろうか。

少女は目を開くこともなく、ただ微笑むだけだった。

言葉はないが、その感情らしきものは察することができる。

無数にある宇宙卵のどれもが少女のお気に入りらしかった。

少女は微笑を湛(たた)え、目を瞑(つむ)ったまま、この上なく優しい手つきで卵の一つ一つに触れていく。

その脳裏に、ときに良夢(りょうむ)を、ときに悪夢を浮かべながら――。

遙(はるか)か来(き)し方(かた)より、幾(いく)星(せい)霜(そう)の行く末(すえ)まで、いつまでも。

夢(ゆめ)が終わり殻(から)の破(やぶ)れるそのときまで、いつまでも。

無(む)限(げん)量(りやう)の羊(や)水(すい)に揺(ゆ)蕩(たう)いながら、夢(ゆめ)見(み)る少(せう)女(にょ)は宇(う)宙(しゅう)の輪(りん)郭(かく)をなぞり続(つづ)けるのだ。

(〈窮(きゆう)極(ごく)の門(もん)〉は、何(い)処(こ)にあるのですか？)

ぼくが問いかけるように念(ねん)じると、少女(せうにょ)はその場所(ばしょ)を教(し)えてくれた。

そこは、ぼくが探(たづ)ね求(もと)めていた場所(ばしょ)だった。

他(た)者(さ)の犠(ぎ)牲(せい)を厭(いと)わずに紡(つむ)がんとした五(ご)つ(つ)の物(もの)語(ご)の終(しゅう)着(ちゃく)点(てん)。

その門(もん)を越(こ)えれば、悪(あく)夢(む)のよ(よ)うな現(げん)実(じ)から逃(に)れ、良(りやう)夢(む)の郷(きょう)(さと)へ(へ)と到(た)達(だつ)で(で)き(き)る。

ぼくはすぐさま、少女(せうにょ)の教(し)えてくれた場所(ばしょ)へ(へ)と跳(と)ぼう(ぼう)とし(し)た。

そのとき――。

※ ※ ※

「待(まち)てよ」

誰(たれ)か(か)がそ(そ)う言(い)い、跳(と)ぼう(ぼう)とし(し)たぼ(ぼ)く(く)の肩(かた)を強(きやう)く掴(つか)んだ。

「お、おま(ま)え……」

振(ふ)り返(かへ)ると、そこ(そこ)にいた(いた)のは空(くう)界(かい)で狼(ろう)に形(かたち)を(を)変(か)え、襲(おそ)いかか(か)ってき(き)た男(おとこ)だ(だ)った。

「おま(ま)えは、一(いっ)体(たい)誰(たれ)なん(なん)だ！」

ぼく(ぼく)が声(こゑ)を荒(あら)げ(げ)ると、男(おとこ)は苦(く)笑(しょう)し(し)て鼻(はな)を搔(か)いた。

「ま(ま)い(い)った(た)な。や(や)っ(っ)ぱ(ぱ)り忘(わす)れ(れ)ち(ち)ま(ま)っ(っ)てん(ん)のか(か)よ」

ぼく(ぼく)より頭(かぶ)一つ小(こ)さいその男(おとこ)の顔(かほ)に(に)は(は)や(や)はり見(み)覚(さ)え(え)が(が)あ(あ)った。

だ(だ)が、誰(たれ)な(な)のか(か)は一(いっ)向(きやう)に思(おも)い出(で)せ(せ)ない。

「無(む)駄(だ)だ。こ(こ)いつ(つ)は(は)お(お)れ(れ)た(た)ち(ち)のこ(こ)とな(な)ん(ん)ざ(ざ)覚(さ)え(え)て(て)や(や)し(し)ない(ない)の(の)さ」

逆(さか)の肩(かた)に手(て)を乗(の)せた(た)のは、多(た)頭(だう)の獅(し)子(し)へ(へ)と変(か)じ(じ)た男(おとこ)だ(だ)った。

「――本(ほん)当(たう)に忘(わす)れ(れ)て(て)し(し)ま(ま)った(た)とい(い)う(う)の(の)？」

目(め)の前(まへ)の虚(こ)空(くう)が凝(こ)り固(かた)ま(ま)っ(っ)て水(みづ)と(と)な(な)り、そ(そ)れ(れ)が人(ひと)の形(かたち)を取(と)った。

「あ(あ)な(な)た(た)が、あ(あ)た(た)し(し)た(た)ち(ち)に(に)し(し)た(た)仕(し)打(うち)の全(ぜん)て(て)を(を)？」

詰(つ)め寄(よ)っ(っ)てく(く)る(る)の(の)は、大(たい)海(かい)で泡(う)に包(つつ)ま(ま)れ(れ)て(て)いた半(はん)人(にん)半(はん)魚(ぎよ)の女(にょ)。

「そ(そ)う(う)よ。彼(か)に(に)は(は)こ(こ)れ(れ)と(と)い(い)った(た)目(め)的(てき)も夢(ゆめ)も(も)ない」

「だ(だ)か(か)らあ(あ)た(た)し(し)た(た)ち(ち)を贅(えい)(にえ)に(に)す(す)こ(こ)う(う)が(が)で(で)き(き)た(た)の(の)さ。思(おも)い(い)つ(つ)く(く)ま(ま)、面(めん)白(はく)半(はん)分(ぶん)に(に)な(な)」

泡の女の左右に赫(あか)と碧(あお)の炎が生じ、二人の女となった。

二人は炎と同色の剣をそれぞれ抜き放ち、刃を交差させながらぼくの首筋へと押し当てた。
「胴と首を切り離して、虚無へ流してやる」

赫き剣の女が凄む。

「それは最後でしょう。まずは指を一本ずつ切って、四肢を断ち、耳と鼻を削(そ)ぎ、舌を落として目を刳(く)り貫(ぬ)いてからにしましょう」

碧き剣の女がそう言うと、五人の男女は一斉に嗜虐(しぎゃく)的な笑みを浮かべた。

「……ふ、ふざけるなッ！」

ぼくは男たちの手を振り払い、空間を跳躍した。

まずは一旦異なる位相に渡り、そこから門へと跳んだ。

その先に、虚空に浮かぶ石造りの門が見えた。

「ははっ、どうだ。時を操れなくたって、ぼくはおまえたちに捕まるような間抜けじゃあないんだ！」

一気に門を抜けようとするぼくの目に、二つの人影が映った。

門番たる忌まわしき〈狛犬(りょうけん)〉を従えている人影は、どうやら男女のようだった。
先ほどの五人とは違う男女だが、同じく見覚えのある顔だった。

「行かせはしない」

男が右手を掲げると、その指先から漆黒の闇が噴き出した。

「ここまでよ」

女が左手を翳(かざ)すと、その掌(てのひら)から目映(まばゆ)い閃光が迸(ほとばし)った。

闇と光は混じり合い、灰色の波動となってぼくを呑み込んだ。

永劫(えいごう)という名の波動にさらされたぼくの体は徐々に色彩を失っていく。

色だけでなく、腕や足、胸といった肉体の本質が薄れ、透き通っていくのがわかった。

痛みは全くなく、むしろ心地良さすら感じられた。

その感覚のあまりの恐ろしさに、ぼくは絶叫する。

しかし、そのときにはすでに息を吐く肺も声を出す喉も灰色の波動によって消失していた。
額の第三の目も消える。

思考の最後の瞬間、ぼくは彼ら七人が何者であるかを思い出した。

そうだ。

彼らは、ぼくの――。

「お疲れさまでした。そして改めて――卒業おめでとう、みなさん」

冬の寒さが微かに残りつつも、麗(うら)らかな春の陽光が差し込む教室。

二年生から持ち上がりだった担任の女性教師が、卒業式を終えたばかりのぼくらに最後の言葉を贈ろうとしている。

「あなたたちの世界(せかい)は四月から――いいえ、明日から、新しいものになります」

その言葉を聞き、ぼくははっと正気に戻った。

新しい世界という響きが正しくキーワードのようにぼくの心にかかったある錠(じょう)を開き、何重にも巻かれた鎖を取り払った。

「三年前、みなさんは小学校という小さな世界から中学という少し広い世界に移ってきました。色々なことを学び、経験しながら学校生活を送ってきましたね。中学という世界はこの三年間でみなさんの中で消化され、吸収され、血となり肉となり、きっと今ではみなさん自身となっているものと思います」

理科の担当教員らしい例え話も、ぼくの心を上滑りするだけだった。

最後に覚えているのは、社会科の授業のことだ。

最後の歴史の授業――。

夏休み前の曇(くも)りの日だ。

それから半年以上、ぼくは正気でなかったということになる。

正確に言うと、記憶はある。

勉強をした記憶、学校に通った記憶、家での記憶、受験の記憶――その全てが記憶にはあるが、ぼくが意識して行ったことは一つもなかった。

言わばぼくは、この八ヶ月近くを自動的に過ごしてきたのである。

「中学という世界は、あなたたちのものになりました。みなさんは、これから次の――新しい世界へと旅立つことになります」

世界、世界――新しい世界。

こめかみの辺りにおかしな感覚が生じる。

熱を帯びているようで、氷を押し当てられてもいるような、矛盾した感覚だ。

「世界の数には限りがありません。みなさんそれぞれがこれから進む新しい世界もそこで終わりではなく、さらに次の世界が待っています。でも、あなたたちなら大丈夫。きっと次の世界も、その次の世界も、全て自分のものにすることができるでしょう」

ぼくはこめかみの違和感を拭(ぬぐ)えないまま教室を見渡した。

世話になった担任の言葉を聞き、教室にいる生徒の大半が目には涙を浮かべている。

泣いていない生徒は――ぼく以外で七人いた。

人望厚いサッカー部の部長藍宮(あいみや)陽介(ようすけ)と陸上部のエースになった睦月(むつき)

熾朗(しろう)。元々サッカー部だった睦月は突然退部宣言をして藍宮と相当揉(も)めたらしいが、今ではその関係も修復したそうだ。

誰とも喋(しゃべ)らない根暗(ねくら)女だと思われていた桑折(こおり)凧波(ななみ)。こつこつと書き溜めた詩(し)を有名な賞に投稿して最年少で受賞したという。

女子剣道部の奈倉(なぐら)凧子(りんこ)と穴生(あのを)沙輝(さき)。市(まち)外れの森で天狗(てんぐ)に剣法を習っていると噂される二人の女剣士は、秋の大会の個人戦決勝で目を瞠(みは)るような名勝負を繰り広げたらしい。

いつもふわふわとして掴み所のなかった陣内(じんない)達彦(たつひこ)と、学年で一番人気の女子である天原(あまはら)亜依(あい)。この二人には何の接点もないはずだったが、紆余(うよ)曲折(きょくせつ)を経て最近付き合うようになったという噂だ。

――そうだ。

――という。

――らしい。

――噂だ。

強い違和感を覚える。おかしい。変だぞ。

ぼくは全て知っているはずだ。七人の全てを見て聞いてきたはずだ。

睦月が陸上をやりたくてサッカー部を辞めてそれを止めようとした藍宮と気まづくなってその藍宮は陣内を睦月の代役にしようと何度も何度も頼み込んで断られてでも諦めずに追い回して結局睦月は全中で入賞してサッカー部は何とか初戦には勝利したものの二回戦で敗れた。

ぼくは睦月と藍宮の話を夕暮れの渡り廊下ですっと聞いていたが、二人は隠れもしていないぼくに気づく素振りもなかった。

桑折は自分をどうやって表現すればいいのかをずっと思い悩んでて色々な文学の一人称の言葉をノートに書き連ねて自己表現の方法を探っていたところを陣内に見つかってそれをきっかけに色々相談するようになって詩を書くようになって陣内に背中を押されて投稿した。

ぼくは図書室でノートにボールペンを走らせる桑折をずっと見ていたが、桑折は隠れもしていないぼくに気づく素振りもなかった。

奈倉と穴生は本当に女天狗から剣法を習っていてその女天狗が気まぐれに秋季大会で優勝した方に奥義を教えると言ったため奈倉が穴生にライバル宣言を五日連続でして穴生はなかなか真っ直ぐそれ受け止められずに大会に臨(のぞ)んで勝ち進んでいく間に覚悟を固めていった。

ぼくは早朝の南校舎屋上で竹刀を交える奈倉と穴生をずっと見ていたが、二人は隠れもしていないぼくに気づく素振りもなかった。

天原は転校生の陣内の正体を調べて実は天原の父親と知り合いでイランの遺跡発掘にも同行して一緒に崩落事故に巻き込まれたけれど奇跡的に一人だけ生き残ったことをどうして教えなかったのかと詰め寄ったら陣内は天原を守るためにこの学校に転校してきたのだと答えた。

彼らのことは全て知っている。全て見聞きしたことだ。

でも、どれもぼくとは全く関係のない事柄だった。

その無関係のはずのぼくに、三人の男子と四人の女子全員が一切の感情を排除した視線を向けているのはなぜだろう。

ぼくは無関係じゃない？ いや、そんなはずはない。ぼくは彼らと関わっていない。天原を狙っていた〈無貌(むぼう)の三眼(さんがん)〉？ そんな存在(モノ)は知らない。それこそぼくとは無関係だ。名前のない書物？ 〈世界(ロカ・ダアツ)〉？ そんな物、そんな事、ぼくが知っているはずが……。

「――私からみなさんに贈る言葉は以上です」

担任が言い終わると、万雷(ばんらい)の拍手が教室を埋め尽くした。

「さあ門出のときです。みなさん、新しい世界を楽しんでくださいね」

中学で最後の起立。

この世界で最後の礼。

そして、同級生たちは声を掛け合いながら三々五々に教室を出ていく。

睦月と藍宮は肩を組み――、

穴生と奈倉が桑折に声をかけ――、

陣内と天原は無言で視線を交わしてそれぞれの仲間の元へ分かれた。

ぼくは独り、その場から動くことができず、いつまでも立ち尽くしていた。

ぼくが次に向かう世界は、一切が灰色に脱色されていた。

〈了〉

アンタイトルド・ブック

<http://p.booklog.jp/book/57304>

著者 : sasagani

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sasagani/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57304>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57304>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ